

研 究 紀 要

第 3 号

平成 9 年度

東北地方北部の縄文中期後半の土器	鈴木克彦	1～56
青森県の縄文早期住居跡集成	中村哲也, 坂本真弓	57～67
キノコ形土製品について	工藤伸一, 鈴木克彦	68～73
青森県内で検出された「畠跡」について	木村鐵次郎	74～78
平成 9 年青森県内発掘調査動向		79～84

1998

青森県埋蔵文化財調査センター

東北地方北部の縄文中期後半の土器

—大木系土器層位的共伴関係土器集成—

鈴木克彦

1 序

(1) はじめに

本稿は、土器の層位的な共伴関係から東北地方北部の縄文中期後半の土器型式編年について考えるものである。より充実した型式内容を確定させるために、発掘調査によって明らかになった遺構内共伴関係に基づいて層位的に検証し、併せて共伴する土器の器形組成や隣接する地域の大木式土器との平行関係を理解しようとするものである。

当該期の土器を一般に大木系土器と呼び（鈴木克彦1976）、その大木系とは何かという問題について筆者は既にその大筋を述べている（鈴木克彦1982）ので重複を避けるが、この土器は北海道南部まで影響を及ぼしている（鈴木1976, 川内基1988）ように、東北地方南部の大木式の北漸論の所産だと考えている。それが、それまで当該地域に根強かった円筒土器を終えんさせた。

この間の様相は、具体的に泉山式土器の形成に端的に表れている。逆に、このことは円筒土器（上層式）とは何かという問題に係わる。具体的には上層d, e式と泉山式の認識に関する問題である。中期後半の型式編年として当該地域には、泉山式以降、中の平1式、榎林1, 2式、中の平2, 3式、大曲1式が設定されている（角田文衛1939, 鈴木1976）外、円筒土器上層e, f式（江坂輝弥1970, 村越潔1974）、或いは大木10式平行式（成田滋彦1984, 外）などと呼ぶ類いがある。また、特に中期末に位置付けられる大木10式平行の大曲1式は中期と後期の境界に当たるので、中期とは、後期とは何か、という時期区分の問題に派生する。このようにこれら大木系土器諸型式の内容を論じることは、当該地域におけるその土器の出自、発展とその性格を明らかにすることでもあるので、汎東日本的な広域に影響を及ぼしている大木式土器を取り巻く相互の広域編年を理解する効果をもたらすであろうし、逆説的にはそれまで当該地域に根強かった円筒土器とは何かという問題を大木系土器の側から見直す契機となる波及効果を期待したい。

(2) 型式把握（認定、細分）の方法

学史については既に筆者や成田、柳沢清一が論じている（文献省略）ので本稿では取り上げないし、そのことを詮索するつもりもない。しかし、現在はより確実に豊饒な資料を得ている。未だ確定しかねる問題もあるが、新たな出発点として従来の型式を補訂して再構築したいと思っている。もはや、文様や器形の変化を追い求めて古典的手法で型式を論じる時代（段階）ではなく、層位的、型式学的方法を噛み合わせてこそより安定した型式把握ができよう。換言すれば、例えば遺構内出土の場合、土器の廃棄パターンを十分理解した上でそれが確実に一型式として纏まった資料なのかを型式学的に検証できない、そういう客観的な層位的裏付けのない型式は淘汰すべきである。また、層位的方法の有為性は、前後関係の序列や幾つかの器形の組成共伴関係を知ることができることにあり、本稿ではその層位的根拠に基づいた型式の大枠を把握（規定）したいと思っている。

さて、当該地域の発掘調査に共通する問題は、発掘調査における覆土、埋土一括と報告書に記載される遺構内に出土した遺物の曖昧な取り上げ方（観察）にある。これを改めない限り、幾ら発掘を重ねても問題は解決しない。その遠因は建設的相互批判を忘却したこの地域の考古学土壤の浅さにあるものだが、今一度、関東、中部地方で30年前に実践された土器の廃棄行為（パターン）や型式設定の

方法論を思い起こしてそれに学ぶべきである。近年これを反省材料に一部の地域で層位的発掘を心掛けようとする機運がでて来たのは光明である。山内清男が層位学と型式学を科学的に援用して編年学を樹立した体系が、小林達雄による土器の廃棄パターンの方法論や鈴木公雄による型式の認定方法論によって裏付けられたことを引き合いに出すまでも無く、発掘調査の層位的観察と土器の分類観察が一体になって、施文される文様構成や施文要素と文様要素、文様帯系統論が器形とその組成関係と共に論じられなければならないのである。

2 中期後半の土器の分類と層位的共伴関係による観察を通した編年の再構築

(1) 1群土器（泉山式相当）

①, 層位的根拠

泉山式（鈴木1982）の標識資料である三戸町泉山遺跡のI-1号フラスコ型土壙出土の一括廃棄の土器群（図5）について検証する。これには大木8a式が共伴している。

その類例（支持資料）に、八戸市松ヶ崎遺跡7号、13号、14号、23号住居跡床面（図6）、八戸市西長根遺跡3号住居跡床面（図13）、六ヶ所村富ノ沢遺跡6号、63号住居跡床面（図22）、216号住居跡床面外（図23）、276号、288号住居跡床面（図24）、432号、434号住居跡床面（図25）、青森市三内沢部遺跡3号、6号住居跡床面（図40）、などがある。

今度はもう少し対象を広げて見ると、松ヶ崎遺跡19号住居跡床面、3層（図6）、西長根遺跡1号住居跡床面、外（図13）、六ヶ所村富ノ沢遺跡28号住居跡床面（図22）、311号、333号住居跡床面（図24）、67号住居跡床面（図26）、1号住居跡床面（図28）、青森市近野遺跡5号、7号住居跡堆積土（図32）、今別町山崎遺跡2号住居跡床面（図34）、三内沢部遺跡4号住居跡床面（図40）、などの2等資料がある。

これだけ見ても泉山式は揺るぎないものだが、問題はこの2等資料にこそあるとしなければならない。必ずしも一括廃棄と断定しかねる堆積土から出土したものを含むが、泉山式標識土器群の範囲を越える土器例えば隆線文即ち従来の円筒土器上層d式のメルクマール文様を施文する土器などを含むからである。

②, 分類の方法

次に、これらの土器群を主として施文要素から分類し、文様要素を考慮する。本来は、土器の形態、器形、地文などの全体を説明しなければならないが、必要に応じて記し、要点を記述する。（要点だけという意味では以下同様である。）

1類：隆線文

この施文要素には、a所謂胸骨状文、b弧状線文と、c両者を併用、dその他渦巻文、鋸歯状文、の文様要素がある。これは、2類、3類同様である。隆線文はI文様帯にも施文されるが、通常はII文様帯を形成する。II文様帯には幅広いものと狭いもの、さらに痕跡程度に施文されるものなどがある。一般的に上層d式とされる。しかし、この考え方、把らえ方には疑問がある。その理由は、施文要素の違いだけで文様要素や文様構成の同じモチーフを別類立てできるかという問題である。ただし、1類には量的に少ない。

2類：隆起線文＋沈線文

1, 3類と同じ文様構成とは、a所謂胸骨状文と呼ぶ縦位と横位を組み合わせたもの、b弧状線文を重畳する、ものなどである。一般的に上層e式とされる。これにも、上記と同じ理由で疑問がある。

3類：沈線文

1群土器では最も多く見られる施文要素で、文様要素、文様構成は、1, 2類同様である。一般的

に上層e式とされる。

4類：その他（撚紐押捺文等）

口端つまりⅠ文様帯やⅡ文様帯に稀に撚紐押捺文で施文するもの（図16-21）がある。大木8a式（図5-17）にも用いられる。それが異型式同類かは検討を要する。

（2）2群土器（中の平1式相当，松ヶ崎式），（図1）

①，層位的根拠

かつて筆者は，泉山式と榎林式を繋ぐ1群の土器の存在を考慮して中の平1式を念頭に置いた（鈴木1982）。しかし，その際に提示した資料は必ずしも十分なものではなかった。そこで，このような中間型式というものが存在するかどうかという問題を念頭に置いて，再度この問題を考える必要がある。しかし，標識としてよい類例を図1に掲載したが，それは次の松ヶ崎遺跡出土土器に基づいているので，松ヶ崎式とした方がよからう。

泉山遺跡Ⅱ-30号住居跡堆積土（図5），松ヶ崎遺跡1次9号住居跡堆積土（図7），2次9号住居跡堆積土（図9），富ノ沢遺跡327号住居跡床面（図24），或いは381号住居跡床面，堆積土（図25）を含めてよいかもしれない。

問題は，この2群土器が1型式に止揚できるのか，或いは1群土器の中での時間差を示す段階差なのか，という点である。その際，以前筆者が榎林1式としたものの一部が含まれる可能性がある。恐らく，一型式に止揚されると思われるが，大木8a式が伴う。特に，壺形の出現に注意したい（図7-14，図9-11）。

②，分類の方法

Ⅰ文様帯以外には隆線文を用いることがなく，Ⅱ文様帯には沈線文の施文及び文様要素の弧状線文を基調とした襷掛け状の文様が施文される。Ⅱ文様帯の幅は狭く，稀に胸骨状文の名残りである懸垂文を見る。しかしながら，最大の特徴はその形態である。1群の土器が平縁に小さな突起を付けたようなものが通有であったが，この土器群は波状縁を呈し，口頸部以下の器形のプロポーションが幾らか膨らみを帯びてくることと，Ⅰ文様帯に凹線ないし沈線が引かれ，時には榎林式の最大の特徴である渦巻き状文が施される。問題があるとすれば，この土器群の文様要素が極めて単一であることだが，松ヶ崎遺跡2次9号住居跡などで大木8a式土器を共伴する。施文要素が単純なので，分類方法を変えて文様帯に注意したい。大木8a式（図9-1）のⅠ文様帯は幅広い。図9-2が大木式にあるかどうかは未調査だが，やはり幅広いⅠ文様帯を形成する。通常，在地土器はⅠとⅡ文様帯が上下に接続していたが，この段階からこの間に空白帯が形成される。恐らく，大木式からの影響によるものであろう。そのより強い影響が行われるようになるのである。

1類：Ⅰ文様帯が1群と同じもの

a類：施文要素が沈線文，文様要素がb弧状線文で，Ⅱ文様帯が横位沈線文で文様帯区画されるもの（図1-3）。

b-1類：a類にⅡ文様帯が横位沈線文で文様帯区画されないもの。そして，懸垂沈線文による中線を施文するもの（図1-1）。

b-2類：中線（垂線）を施文しないもの（図1-2）。

b-3類：Ⅱ文様帯の横位沈線文の下位に1列弧状線文を施文するもの（図1-4）。後にこれが継続する（図1-11）。

2類：Ⅰ文様帯が幅広い沈線文（凹線文）

a-1類：この凹線文の文様要素は，明らかに円筒土器の概念から外れる。Ⅰ文様帯以外は全くb

—2類同様である。したがって、両者を分別する理由はI文様帯の違いだけであるが、凹線文と盲穴（貫通しない孔）を組み合わせたもので、II文様帯が横位沈線文で文様帯区画されるもの（図1-6）。

a-2類：その弧状線文をS字状に交差させて襷掛け状文にしたもの（図1-7）。口縁部突起は火炎土器風で、その影響によるであろう。

b類：口縁部突起渦巻文が施文される点で、次の3群に通じる。文様要素はa-2類と同じものである（図1-5）。

3類：幅広いI文様帯を形成するもの（図1-8）。渦巻文が施文される。

4類：I文様帯とII文様帯を形成するもの（図1-9）。

5類：壺形（図1-10）である。

さて、大木8a式相当の3~5類は、松ヶ崎遺跡1, 2次の9号住居跡（図7, 9）の層位的共伴関係による。これによって大木式との相互の関係を知らることができる。

③ 3群土器（榎林式相当）

①, 層位的根拠

筆者は、榎林式を2細分したことがある。その妥当性は、松ヶ崎遺跡2次29号住居跡（図9）、西長根遺跡9号住居跡（図14）、富ノ沢遺跡246号住居跡（図23）、反面、その妥当性を欠く松ヶ崎遺跡2次31号住居跡（図9）、西長根遺跡10号住居跡（図15）の2者がある。型式学的に細分できると考えるが、最近では3段階区分を考慮しているので、西長根遺跡10号住居跡4~5層の一括廃棄の資料に対する問題を解決するまでは、その細分をしない。

②, 分類の方法

大木式の波及の所産によって2群では器形組成に変化が生じていた。この傾向は更に強まる。その結果、I文様帯を形成しない器形（図1-13, 27）が生まれる。深鉢形、鉢形、壺形に近い器形があるが、明確な壺形（図1-26, 29）と口縁部が内湾するキャリパー形（図1-24）は搬入である。波及という意味では同じでも、以後当地に定着した器形（図1-20, 22, 23, 27, 28）とがある。

3群は文様構成が比較的複雑になるので、上記との分類の整合性を取るために、I文様帯を形成するもの（図1-11）とI文様帯を形成しないもの（図1-13）の違いの記載を省略する。また、例外を除いて全て沈線文を施文要素とするのでそういう施文要素の分類もしない。また、I文様帯の凹線文及び渦巻文、体部の曲線文も自明の理なので敢えて記載しない。II文様帯が、体部全体にわたることが最大の特徴である。また、前型式に萌芽した特徴的なI文様帯の凹線文はゼンマイ状になって定着する。大木8b式が伴うことが多い。

1段階と2段階の様相を図1に示した。ゼンマイ状のI文様帯に弧状線文をII文様帯に施文するもの或いは多用するものが古く、II文様帯に曲線文様を施文するものが概ね新しいと思う。この曲線文様の文様要素や文様構成とそれらの組み合わせによって細分できよう。1段階の好例が松ヶ崎遺跡2次31号住居跡（図9）で、15~17, 20が共伴関係にある。半粗製（20）は段階分けする基準にはならないが、20は3段階には伴わないであろう。次の段階の好例が西長根遺跡9号住居跡（図14）、3段階が松ヶ崎遺跡2次29号住居跡（図8）などだが、細分には11号住居跡（図8）などと共に詳細な検証を要する。ただ、次の4群土器との違いは泉山遺跡II 31号住居跡（図5）の層位差によっても判明している。

④ 4群土器（中の平2式相当）、（図2）

中の平2式は、当時筆者が三厩村中の平遺跡の発掘を通して、主として岩手県などの他地域の資料を念頭に置いて、2式から中の平3式の成立にヒアタスがあることを考慮して設定したものであった。この考え方自体は決して誤りでないことを知る好例が岩手県九戸村田代遺跡A 4号住居跡床面出土資

料(図43-1, 2)で裏付けられたが、近年より良好な資料が得られている。しかしながら、田代遺跡ほどの層位的な好例がまだ青森県には層位的に確認されていない。西長根遺跡10号住居跡、外(図15, 図12-9~14, 外)、富ノ沢遺跡(図20-1, 5, 11)、野辺地町槻ノ木遺跡(図42-24~26, 28, 29)など類例は少なくないので、型式学的に類別することができるものの当座中の平2式(或いは田代式)を考慮しておきたい。大木9式と平行すると思っている。

(5) 5群土器(中の平3式相当), (図2)

中の平3式を設定するにはかなり広範囲な資料を調査したので、敢えて津軽半島北部の遺跡ながら中の平遺跡(青森県教育委員会1975)の資料でこれらの型式を設定した(鈴木1976)。中の平3式自体はその類例に下北半島地域の川内町野家遺跡などの資料を利用したように、筆者自身は岩手県地域などとは地域差があるものと考えていた。その当否を論じるに足る好例が、西長根遺跡、富ノ沢2遺跡などで出土している。特に、予測したように西長根遺跡では大木9式との平行関係を知る資料が層位的に把握されているので、この時期の青森県における地域性を語るができるようになった。

①, 層位的根拠

層位的な事例は、松ヶ崎遺跡1号竪穴堆積土(図7)、2次27号住居跡床面(図9)、西長根遺跡4号住居跡堆積土(図13)、富ノ沢遺跡38号住居跡堆積土中位、56号住居跡床面(図22)、102号住居跡床面(図23)、山崎遺跡8号住居跡床面(図34)、階上町野場5遺跡12号、15号住居跡床面(図37)、などがある。層位的なものでなければ量的に類例が多く、これらから判明する問題は多い。つまり、この土器群には時間幅があることと、地域差が顕著であること、更には従来あまり知られていなかった大木9式などの豊富な内容を示す土器との共伴関係が明瞭になってきたことである。

②, 分類の方法

地域差の問題については、津軽、下北地域と南部地域との違いを、大木9式のあまり貫入しない地域としての前者とそれが顕著になる後者とを指摘できる。津軽、下北地域の中の平3式に対して、南部地域に西長根遺跡4号住居跡を標識にして上記の松ヶ崎遺跡の類例を支持資料として西長根式を設定してもよいだろう。図2にはそのことを念頭に掲載した。その際の違いは、主として施文手法と文様モチーフに求められる。或いは、地文の縄文の上に沈線文で文様を施文する津軽、下北、磨消縄文の発達する南部、という具合にも区分できる。これは器形上の差異にも表れている。口頸部が大きく「く」の字状に屈折する広口壺と呼んで差し支えない器形を主体にする中の平3式、口頸部が弓なりにカーブする深鉢形の器形を特徴とする西長根式である。ただし、当該地域を一律に捉らえるならば、学史的に中の平3式である。

その一方で、中の平3式と西長根式は同じ大木9式平行の土器として時間差を示すということも一応考慮してみたが、層位的に見てその可能性はなく、地域性の問題に止揚されるものであろう。中の平3式については既に詳述しているので重複を避ける。

在地の当該期の土器には原則としてI文様帯が形成されない(図2-25, 27, 外)。一面これは画期的なことだが、そのベースは既に榎林式に伏線(図1-20, 22, 23, 外)があると考えられる。II文様帯は、中の平3式では「く」の字状に屈折する口頸部の下の体部にあるが、西長根式の場合は口頸部から体部下半部にかけて長い。この文様帯の形成の仕方が最大の特徴と言える。つまり、前型式のそれと同じなのである。II文様帯が上下2段になる場合(図13-15, 27, 32)がある。後の型式すなわち、原則としてII文様帯が口頸部つまり体部上半部にある大曲1式の文様帯との違いが大きい。ところが、中の平3式に伴って大曲1式の文様帯形成の仕方がこの段階に開始することを示す富ノ沢遺跡の資料(図23-1)は看過できない。これに類似する文様を示すもの(図22-31)がある。或いは、図7-25, 図

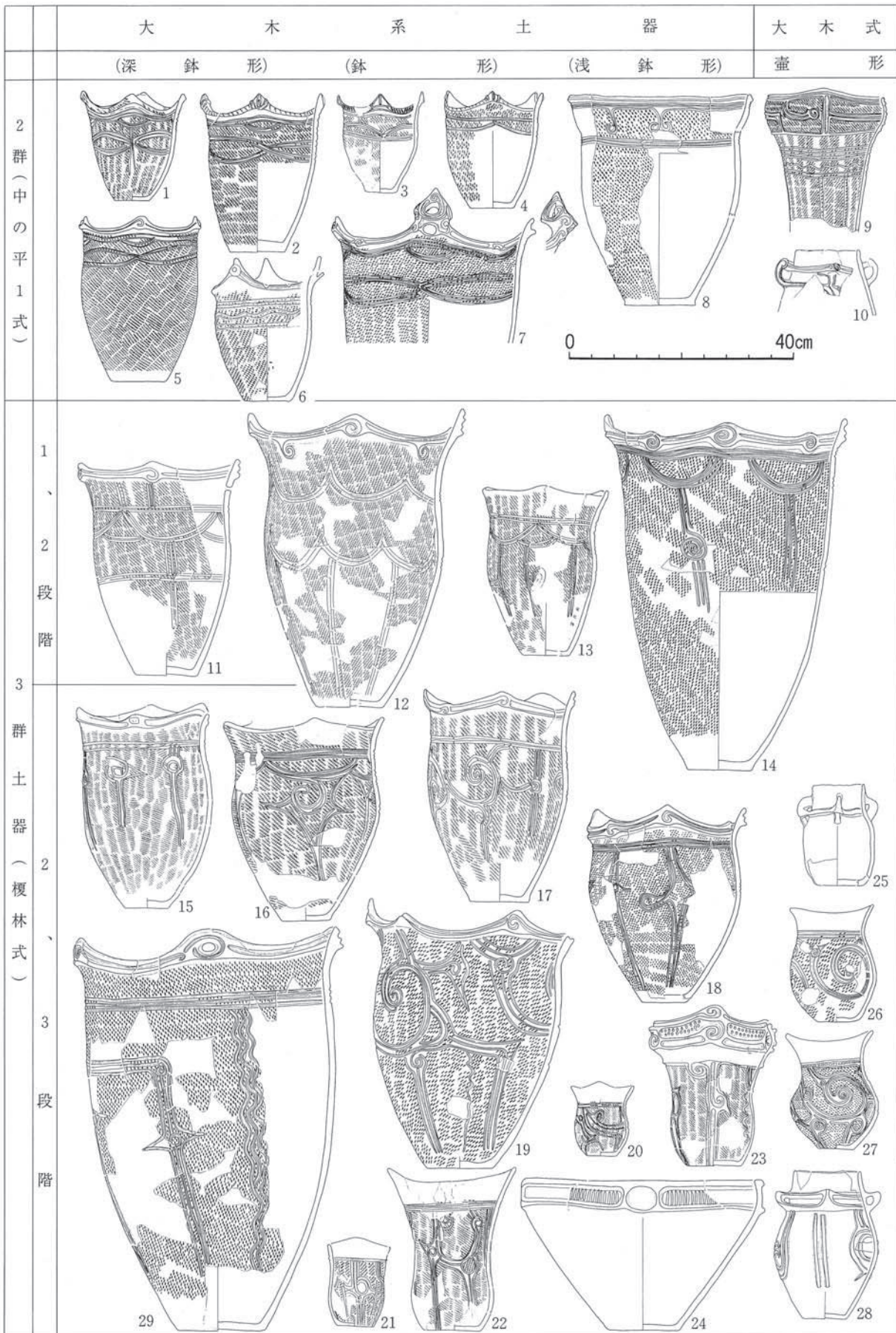


図1 青森県の縄文時代中期後半の大木系土器編年(1)

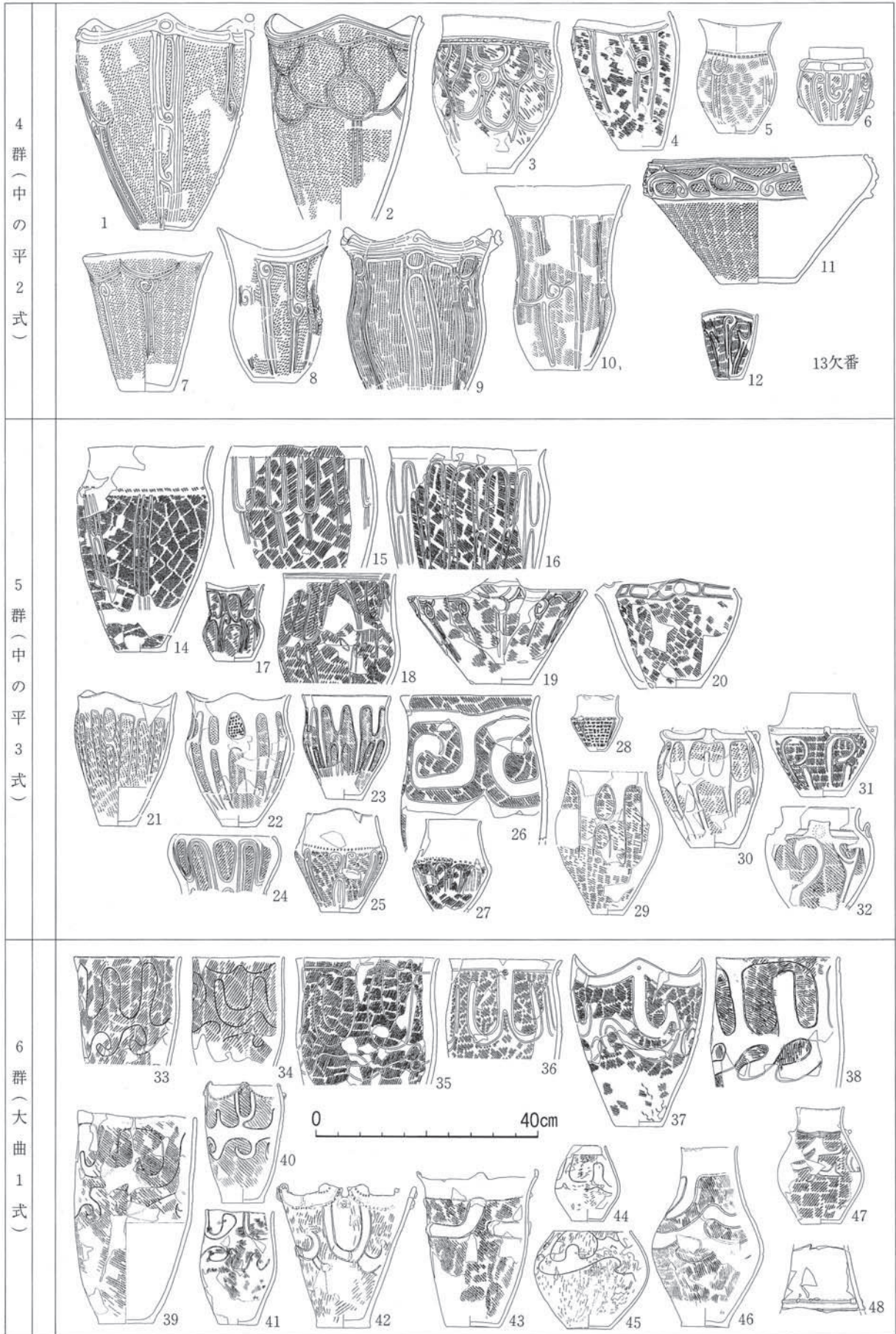


図2 青森県の縄文時代中期後半の大木系土器編年(2)

13-12, 30, 図37-10も含めてよいかもしれない。恐らく、その25に開始する形で変化してゆくものであろうが、いずれも共伴関係にあるものは中の平3式の範囲を超えない。しかし、まだその系譜は分からないが、次型式には変化してゆく。文様（要素、構成）についての分類学的考察を行う余裕がないが、図2にはできるだけ層位的観察に基づいて一見して全容（大枠）が分かるように示した。

(6) 6群土器（大曲1式相当、富ノ沢式）、(図2)

大曲1式は、鱒ヶ沢町大曲1号遺跡（田村誠一1968）の資料（1, 2類）に基づいて、筆者が再編成した上でこの遺跡名を取って設定したものである（青森県教育委員会1975）。当時既に大木10式に平行すると思われる土器は存在していたものの、それらとこの遺跡の土器が共伴する確証を得られなかったのでその編年的位置付けを後期としたが、今では大方のとおり大木10式に平行するとしてよいであろう。近年、良好な資料が富ノ沢2遺跡（青森県教育委員会1991）で得られたので、富ノ沢式として新たな型式名に止揚してその是非を論議したいとも考えているが、大曲1号遺跡の資料自体の評価は不動なので当座変更しない。当該期の土器群については既に成田滋彦（1984）などが論じている（山崎遺跡・青森県教育委員会1982、柳沢清一1980、1993）ので参照されたい。山崎遺跡の報告書で小笠原善範は充填磨消縄文を施文する1類と地文（縄文）の上に沈線文を施文する2類に分類し、成田はそれが東と西の地域性を表すことを指摘した。しかし、前型式の中の平3式、西長根式に見る地域性を継承しているとは言えようが、富ノ沢遺跡など作図に示した東の地域の類例を見るとそうではない。階上町野場5遺跡の類例（図37-39）があるものの、もう少し南部地域の類例増を待ちたい。

①、層位的根拠

類例自体は決して少なくはない。現状での層位的な把握として、富ノ沢遺跡8号、29号、31号、42号、57号住居跡床面（図26）、58号、99号、110号、124号住居跡床面（図27）、4号住居跡床面（図28）、野場5遺跡27号、121号住居跡床面（図37）、101号住居跡床面、121号土壙堆積土（図38）、三厩村宇鉄3遺跡Ⅱ層出土土器（図41）がある。

②、分類の方法

中の平3式の広口壺とも言える特徴的な器形は、恐らく壺形に吸収されて収束（終息）されるであろうごとく、壺形が多くなる。富ノ沢2遺跡の類例（図26, 27）から、U（コ）字、J字などの文様モチーフは前型式から大方を引いていることも分かる。最大の特徴は、Ⅱ文様帯が体部上半部に求められることと、その文様帯の下位に波頭文が施文され、文様帯区画が施されることである。勿論、前型式同様、地文（縄文）の上に沈線文で波状文などの曲線文を施文するものと、磨消縄文を施文するものがあり、それが共伴関係にある（図26, 27）。そして、両者の違いの中に磨消縄文であるか否かを問わなければ沈線文による文様の描き方がほぼ共通しているものが多いことが分かるであろう。しかし、幾分文様モチーフに違いがあるものもあるし、Ⅰ文様帯に相当する部位が狭く折り返し口縁になるもの、鱗（舌）状の偏平な突起を持ち始めたり、再びⅠ文様帯が形成される。稀に、隆線文を持つものが表れたりするなど、時間差を表すと思われる大小の変化が見られる。この問題は、層位や遺構の切り合い関係などによって検証されなければならないが、この型式（範囲）の最後が中期と後期の時期区分上の境界になるので慎重に検討すべきである。そういう意味で、野場5遺跡101号住居跡の層位的な出土例（図38）に見る土器の変化は重要である。特に、その堆積土上位のⅠ文様帯における隆線文と撚紐押捺文を施文する類例はその境界に相当しよう。これを後期とするかはここで結論づけないが、幅広いⅠ文様帯は後期であることの本質には違いない。したがって、この問題を課題として、少なくとも大曲1式はモチーフの上で中の平3式ないし西長根式に近い類似したモチーフを施文するものと、野場5遺跡の示す資料によって細分することができる。

3 中期後半の編年に関する諸問題

当該期の土器型式については論議されることさえなく、各地で発掘調査が行われながら以前守旧的なものであった。これほどの発掘増があれば、其学の発展のために発掘を担当する者が当然それらの是非を含めて補足修正などの検証を行った上でより確実な型式に止揚する責任を負っているにも係わらず、発掘でしか検証できない最も大事な作業を忘れてきたのである。冒頭で型式把握の方法を述べた理由である。近年、柳沢清一（1990,91,93）が関連する問題を論じている。その方法はこういった層位的方法と援用してより充実した型式の細分に寄与するであろうが、もはや古典的な机上論で型式を理解したり、議論する時代ではない。何故なら、在地研究として各地至るところで発掘すなわち、検証の機会が一様に与えられているからである。本稿は従来の土器型式の是非と細分を念頭に置きながらも、できるだけ従来の型式に対する大枠（概念、型式的幅）を規定しようとすることに主眼を置いている。或るものは細分できるものがあるが、それは概念が定まってからでも遅くはないし、その方が正しい順序でもあろう。

ところが、逐一例記しないがこの地域では漠然とか曖昧に大木式とかその平行式という地域性を無視した分類が横行している。例えば上層 a 式を大木7a 式平行とは言わず、在地の土器（例えば中の平3式、大曲1式）が存在しながらそれを9式とか10式平行の土器とさえ呼ぶ奇妙さで、少なくとも青森県には大木式は殆ど客体的にしか出土しない。確かに似ているものは出土するが、その場合でも搬入程度のもの、或いは岩手県中央部に出土する大木式と呼んでいる程度の亜流な土器を見るだけである。特に、当該地域の類例には本来の大木式の施文手法を取る類例は少なく、その客体的な土器に当てはまるだけに過ぎない。単に大木式の文様モチーフが似ているだけである。そのようなものを大木何式とすることは混乱の元や、大木式を知らない所見である。似た文様を捉らえるなら遙か関東地方の加曽利E式の文様さえ類似している。

この地域で最も議論しなければならない問題は、大木系土器の開始に関する問題である。言い換えれば、それは円筒土器の終焉、すなわち、円筒土器（上層式）とは何か、大木系土器とは何か、という根本の問題でもある。そのことを具体的な問題として論じることができるのは泉山式或いは従来の円筒土器上層 d, e 式の是非である。その一端については既に所見を開陳したことがある（鈴木1982）。この点については、東京堂出版刊行（戸沢充則編1994）の『縄文時代研究事典』「円筒上層式の項目」で小林克が指摘してもいる。幸い、最近待望の円筒土器の細別分類を考案し設定した山内清男の「基本写真」が公表された（山内先生没後25年記念論集刊行会1996）。

筆者の言う沈線文を施文要素とする泉山式に相当する土器、すなわち、少なくとも円筒土器上層 e 式は、円筒土器ではないと考える。正確に言えば、円筒土器の名称を与えることができない一群の土器だということである。そればかりか、命名した山内清男は上層 d 式さえも存在しないと述べた（山内清男1964）。円筒土器については山内清男の考えに沿ってできるだけ忠実に捉らえようとするのが大方の踏襲している姿勢である以上、この設定者の意図は尊重しなければならない。最近の資料は、その予言を裏付けているかに見える。

本稿は、沈線文を施文する土器群を対象にしているため円筒土器そのことを問題にするものではないので、ここでは上層 d 式の問題については言及しないが、この執筆を通して観察した限りでも d 式は山内清男が予測した通りになるであろうと思っている。その理由を簡明に述べると、まず型式学的な観点から、器形と口縁部突起の形状、沈線文と隆線文の文様モチーフ、文様構成の類似性（同似性）、などと共に、上記した1群土器の施文要素の組み合わせの用い方などに表れていることに観察することができる。作図には隆線文を主体にした土器の層位的観察を行っていないが、いずれこの問題につ

いては所見を述べたい。したがって、ここでは円筒土器（上層式）とは何かという問題には直接触れないで、沈線文を主体にした泉山式の問題を通して逆説的にこの問題に迫りたい。

泉山式を認識しようとする時に、沈線文だけに捕らわれることは画竜点睛を欠く。最も大事な視点の一つは、その口縁部突起（図28）であることは上記した。そして、この沈線文による文様構成は隆線文によるd式と殆ど類似していることを知るべきである。同じモチーフを施文要素だけで別型式に分別する是非の問題である。施文要素を優先するか、モチーフを優先するか、という択一した議論ができかねる類例が中の平3式に伴って隆線文による土器が1点だが存在する（図22-14）。共伴関係によって把握する好例である。ただし、堆積土中位の出土である。さて、話を口縁部突起に戻すと、それを集成した3遺跡の突起（図28-38-40）の多くは古い円筒土器上層式には無いものだが、このような突起を持つ土器の施文要素と文様構成を観察したものが図28-30-37である。特に、31と36は施文要素と地文（羽状縄文）の違いの外には、器形、突起、モチーフが瓜一つである。従来の判断では36が上層d式、31が上層e式（泉山式）となる。同一型式、別型式にしる判断基準と層位的把握がなされなければ説得力がないので、発掘を通して議論すべき最優先課題であることを提言する。このような突起を持つ土器群は、山内清男の「基本写真」の上層式以後の土器である。それは、1群土器すなわち、泉山式に最も近似する土器なのである。このような土器群については、古く山内清男から「基本写真」の提供を受けた小岩末治（1960）が40年近く前に筆者（1982）と同じことを述べている（注1）。

1群土器に次いで、2群土器（図2）を認定した。これも「基本写真」の上層式以後の土器である。これが1型式に止揚されるかは、議論と検証をして欲しいと思っている。層位的把握では松ヶ崎遺跡1次9号、2次9号住居跡が指標になるであろう。大木8a式が伴う。中の平1式相当だが、内容を少し変更しているので、松ヶ崎式としてもよい。

考えるところがあって、本稿では3群土器（図2）を広く捉らえた。大木系土器が最も盛行したキータイプになる存在なので、細分案には明確な型式観とその説明に心血を注ぎたいと考えたからだが、これの認識と理解は全国区で語るべきものだからでもある。松ヶ崎遺跡には好例が多い。そして、ほぼ同時期に位する西長根遺跡の存在、特に10号住居跡の一括廃棄の類例の器形と文様組成の問題を型式学的、かつ層位的に再検討する必要もある。その折りには、過去の化石的型式である榎林式を解体してさえも松ヶ崎2式としての系統性を考慮に入れてよいとさえ考えている。蛇足だが、二十一世紀の考古学は編年に終始する時代だとは考えていないので、この近距離に位置する二つの遺跡の存在が意味するものを、例えば同じ八戸市での後期前葉の丹後谷地、田面木平1遺跡の関係と同様に土器型式と社会組織（構造）の関係に止揚する問題を視野に入れた考察を視座に取り込みたいと思っている。また、これに共伴する幾つかの土器には広域編年の問題と共に有孔鏝付土器と思われる土器（図9-22、図12-25）さえ共伴する可能性が出てきた。恐らく松ヶ崎式の段階を嚆矢とするであろう鏝付土器や縦位橋状把手の存在もその後の土器を認識する上で侮れない。この恐らく3型式に細分されるであろう土器群の、I文様帯を形成する土器とI文様帯を形成しない土器の器形の共伴関係にもこの土器型式としての構造的な問題が内包されていると考える。後者の器形が、後の中の平3式のベースになっている。

この間の変遷過程を後づけるものが、中の平2式の存在である。西長根遺跡10号住居跡の一括廃棄の土器の解釈問題を解消するまではこの型式を用いるが、中の平遺跡で行った筆者の予測をずばり証明した岩手県の田代遺跡（岩手県埋蔵文化財センター1996）A4号住居跡床面の土器を標識にしてもよいであろう。この中の平2式が介在しなければ従来の榎林式から中の平3式が成立しないのである。

後はどれだけその型式を補填して行くかの問題である。

中の平3式の段階（時期）の持つ顕著な地域性については上述した。これについての段階的な変遷過程は山崎遺跡で考察されている。しかし、その過程には多少の疑問があるが、これは遺構の切り合い関係の把握によって解消される問題である。この段階の、a類：地文（縄文）の上に沈線文を引く手法によるもの、b類：磨消縄文を構成するもの、の違いの基本を筆者は地域差だと考えた。3式は2式と共に大木9式に平行するもので、この点については大木9式の「基本写真」を見ても一見して判断されることだが、一步進めて考慮しなければならないことは、松ヶ崎遺跡1号竪穴の類例（図7）に見られる柳沢清一（1980）が東北地方南部で投じた上原式など（大木9-10式）の問題と同じ問題を抱えていることをどのように認識するかということ（編年）と、西長根遺跡4号住居跡に一括廃棄された土器群に相伴している微隆起線分などの異質な土器（図13-10, 12, 30）をどのように解釈するかという問題にある。12の微隆起線文の手法といい、30の壺形と言える器形とその文様並びに把手の様子など、或いは松ヶ崎遺跡2次27号住居跡床面（図9）、富ノ沢2遺跡74号住居跡床面（図22）、102号住居跡床面（図23）など広域に検討すべき課題が少なくない。

中の平3式に後続するものは大曲1式（富ノ沢式）であるが、小笠原（青森県教育委員会1982）、成田（1984）や柳沢（1993）が詳細に論じている。最も良好な土器を出土した富ノ沢遺跡でそれぞれの文様の相伴関係が分かってきたので、それぞれの段階を層位や遺構の切り合い関係などの出土状態によって再検討する必要がある。そして、最大の問題は中期と後期の境界問題である。筆者はそれを、上記野場5遺跡の資料（図38）に基づいて隆線文などを施文する幅広いI文様帯の形成に求めた。その是非を課題に残す。

なお、本稿に掲載した青森県に関する当該期類例は、9割以上を掲載している。

注記

注1：筆者の見解については82年論文を参照されたい。小岩末治（1960）は、「次の段階では大木・円筒の両者は殆んど区別出来難くなってしまふ。」と述べたのは、彼自身の見解でもあるだろうし、また山内清男から写真だけを借用しただけではなくその考え方も教わったはずであろうことを物語るであろう。しかし、このことが問題なのではなく、その後円筒土器の中核にある我々が40年前に問題視されたことを等閑視してきたことにある。

図版掲載土器出土遺跡（図版キャプション及び図版中に記載した以外の遺跡）

図1-1~4, 6~10, 16, 18, 26, 27, 29, 八戸市松ヶ崎遺跡 5, 三厩村中の平遺跡 11~15, 17, 19~25, 28, 西長根遺跡
 図2-1, 2, 5, 7~11, 21~25, 30, 32, 西長根遺跡 3, 4, 岩手県田代遺跡 6, 寺下遺跡 11, 松ヶ崎遺跡 12, 13, 泉山遺跡 14~20, 26, 27, 33~47, 富ノ沢遺跡 28, 29, 31, 野場5遺跡
 図28-30, 32, 33, 36, 西長根遺跡 31, 荒屋敷遺跡 34, 37, 38, 泉山遺跡 35, 松ヶ崎遺跡 39, 三内沢部遺跡 40, 山崎遺跡
 図42-1, 四戸橋遺跡 2, 荒屋敷遺跡 3, 太師森遺跡 4, 西長根遺跡 5, 10, 13, 中の平遺跡 6, 11, 12, 16, 石神遺跡 7, 浜名遺跡 8, 14, 21, 三内丸山2遺跡 9, 22, 38, 42, 45, 泉山遺跡 10, 13, 中の平遺跡 15, 18, 蛭沢遺跡 17, 19, 弥次郎窪遺跡 20, 花巻遺跡 23~30, 34, 36, 槻ノ木遺跡 35, 境ノ沢遺跡 37, 柴崎1遺跡 39, 中宇田遺跡 40, 駒泊遺跡 41, 田ノ上遺跡 43, 44, 長者森遺跡 46, 妻の神遺跡 47, 宇鉄遺跡 48, 亀ヶ岡遺跡

参考文献（発行年代順）

- 角田文衛 1939 陸奥榎林遺跡の研究 考古学論叢10
 小岩末治 1960 岩手県史上古編
 山内清男 1964 縄文式土器・総論 日本原始美術I
 田村誠一 1968 大曲1号遺跡 岩木山
 江坂輝弥 1970 石神遺跡
 青森市教育委員会 1970 三内丸山遺跡調査概報
 青森県教育委員会 1973 国道280号線道路改良工事（今別バイパス）関係埋蔵文化財試掘調査報告書
 村越 潔 1974 円筒土器文化

- 青森県教育委員会 1974 亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書
 青森県教育委員会 1975 中の平遺跡発掘調査報告書
 鈴木克彦 1976 東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察 北奥古代文化8
 青森県教育委員会 1976 泉山遺跡
 青森県教育委員会 1976 白山堂遺跡・妻の神遺跡発掘調査報告書
 平賀町教育委員会 1976 井沢遺跡
 青森県教育委員会 1977 近野遺跡発掘調査報告書
 青森県教育委員会 1978 三内沢部遺跡発掘調査報告書
 蛭沢遺跡発掘調査団 1979 蛭沢遺跡
 柳沢清一 1980 大木10式土器論 古代探叢
 丹羽 茂 1981 大木式土器 縄文文化の研究4
 青森県教育委員会 1981 国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
 青森県教育委員会 1982 山崎遺跡
 鈴木克彦 1982 円筒土器に後続する土器の編年 考古風土記7
 三厩村教育委員会 1983 宇鉄Ⅲ遺跡発掘調査報告
 青森市教育委員会 1983 四戸橋遺跡調査報告書
 平賀町教育委員会 1983 太師森遺跡
 青森県教育委員会 1984 長者森遺跡
 平賀町教育委員会 1984 駒泊遺跡
 成田滋彦 1984 東北地方北部の大木10式土器周辺 奥南3
 鹿角市教育委員会 1984 天戸森遺跡
 青森県教育委員会 1986 弥栄平1遺跡
 黒石市教育委員会 1986 花巻遺跡
 柳沢清一 1988 「大木10式土器論」続考察 北奥古代文化19
 川内 基 1988 北海道の大木系土器 ひばり10
 青森県教育委員会 1989 富ノ沢 (1), (2) 遺跡
 青森県教育委員会 1989 館野遺跡
 柳沢清一 1990 『岩木山』編年の再検討 北奥古代文化20
 青森県教育委員会 1990 弥次郎窪遺跡
 柳沢清一 1991 「榎林式」から「最花式」(中の平Ⅲ式)へ 古代91
 青森県教育委員会 1991 富ノ沢 (2) 遺跡Ⅳ
 青森県教育委員会 1992 富ノ沢 (2) 遺跡Ⅴ
 柳沢清一 1993 北奥「大木10式並行土器」の編年 二十一世紀の考古学
 青森県教育委員会 1993 富ノ沢 (2) 遺跡Ⅵ, 富ノ沢 (3) 遺跡
 青森県教育委員会 1993 野場5遺跡
 青森市教育委員会 1993 三内丸山2遺跡, 小三内遺跡発掘調査報告書
 戸沢充則 1994 縄文時代研究事典 (東京堂出版)
 八戸市教育委員会 1994 八戸市内遺跡発掘調査報告書6
 青森県教育委員会 1995 泉山遺跡
 青森県教育委員会 1995 上蛇沢2遺跡
 八戸市教育委員会 1995 八戸市内遺跡発掘調査報告書7
 山内先生没後25年記念論集刊行会 1996 画龍点睛
 八戸市教育委員会 1996 八戸市内遺跡発掘調査報告書8
 野辺地町教育委員会 1996 柴崎1遺跡発掘調査報告書
 岩手県埋蔵文化財センター 1997 田代遺跡発掘調査報告書
 青森県教育委員会 1997 槻ノ木遺跡
 青森県立郷土館 1997 馬淵川流域の遺跡調査報告書

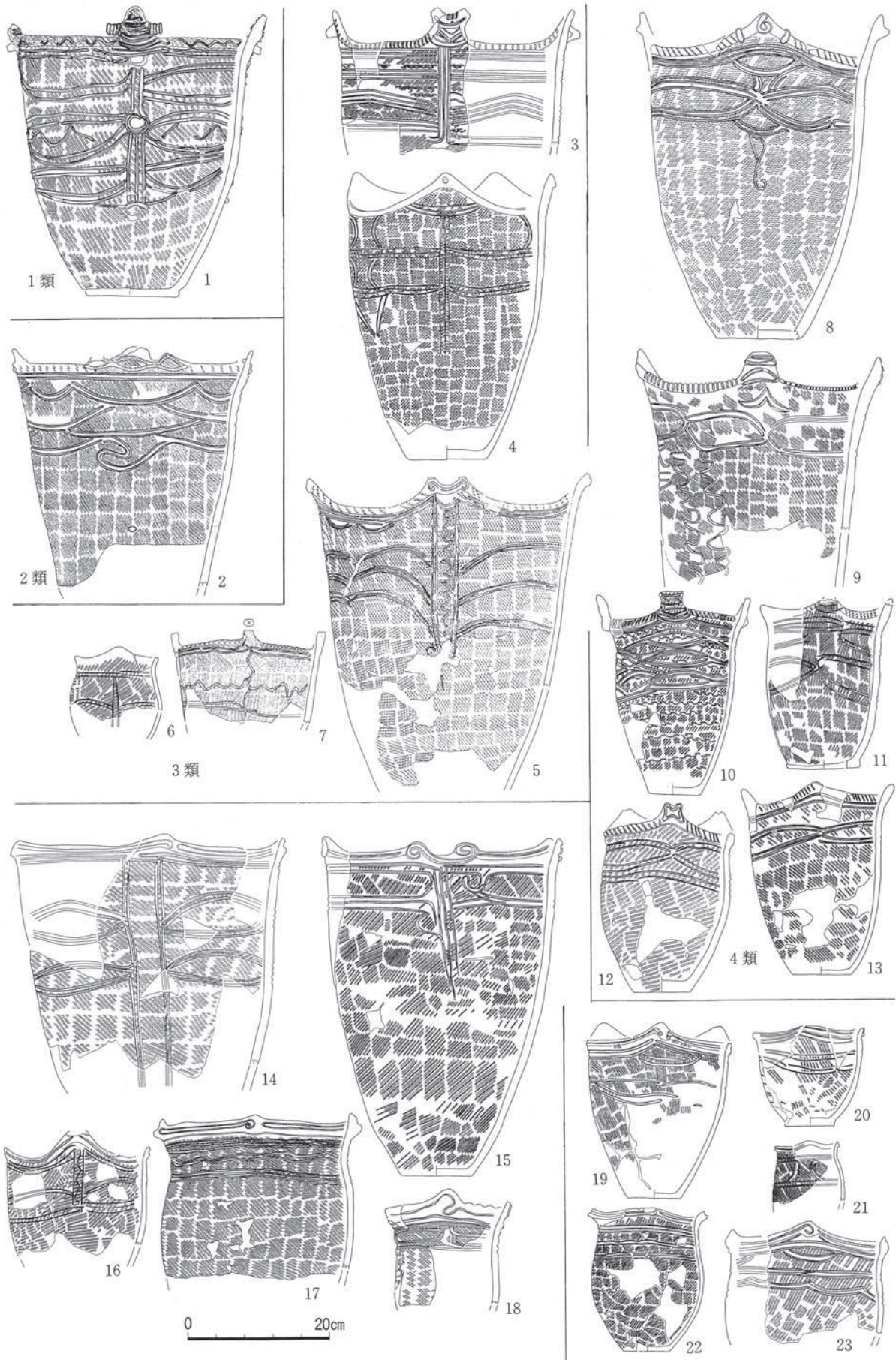
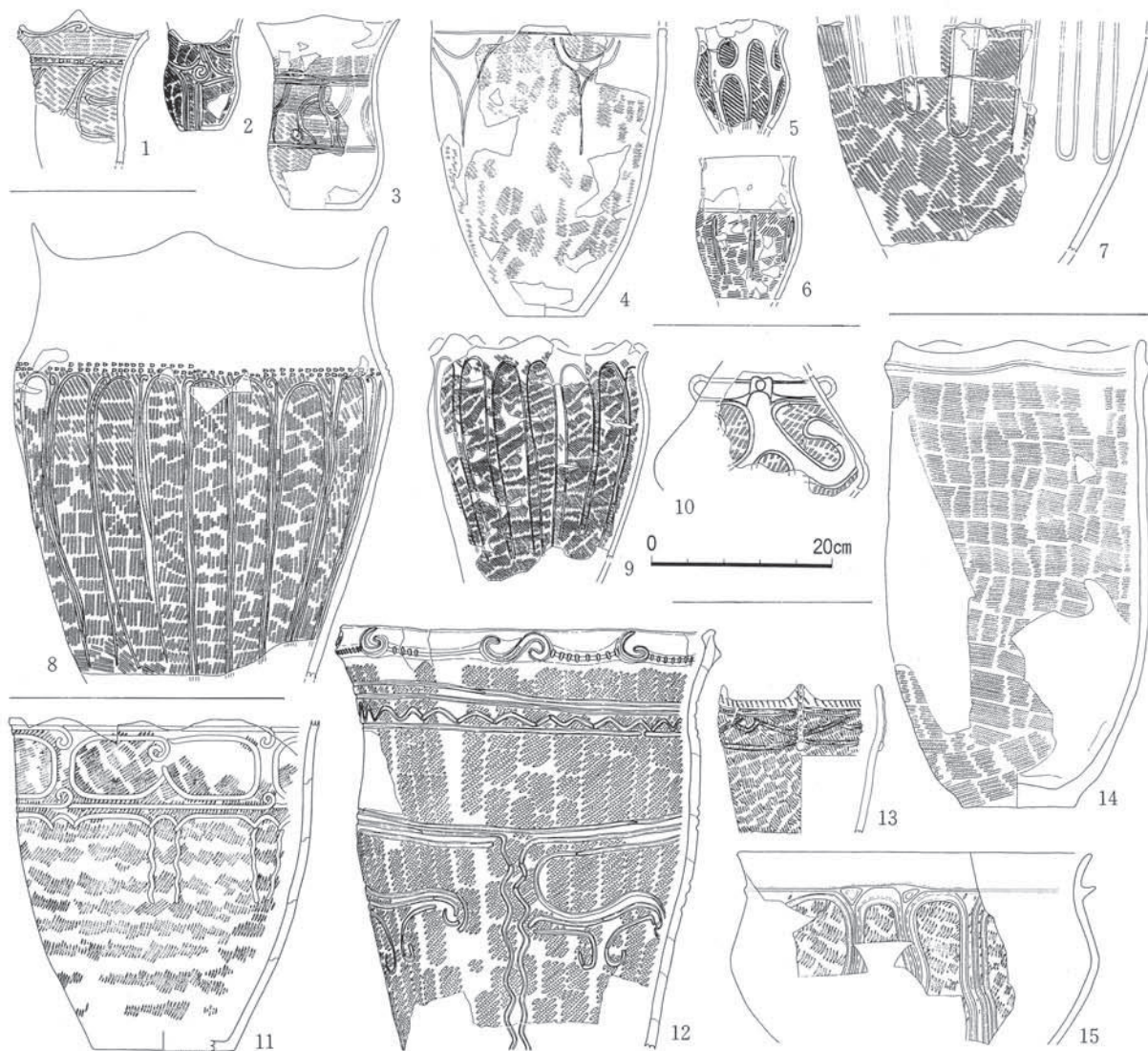
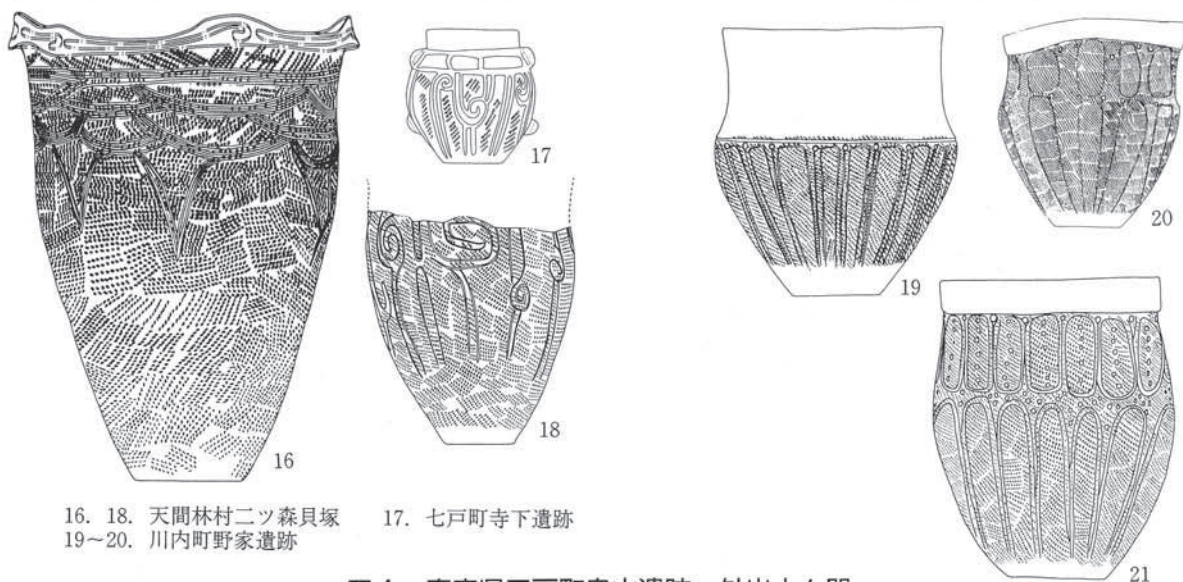


図3 青森県三戸町泉山遺跡出土土器(1)



三戸町泉山遺跡出土々器（2）



16. 18. 天間林村ニツ森貝塚 17. 七戸町寺下遺跡
19~20. 川内町野家遺跡

図4 青森県三戸町泉山遺跡、外出土々器

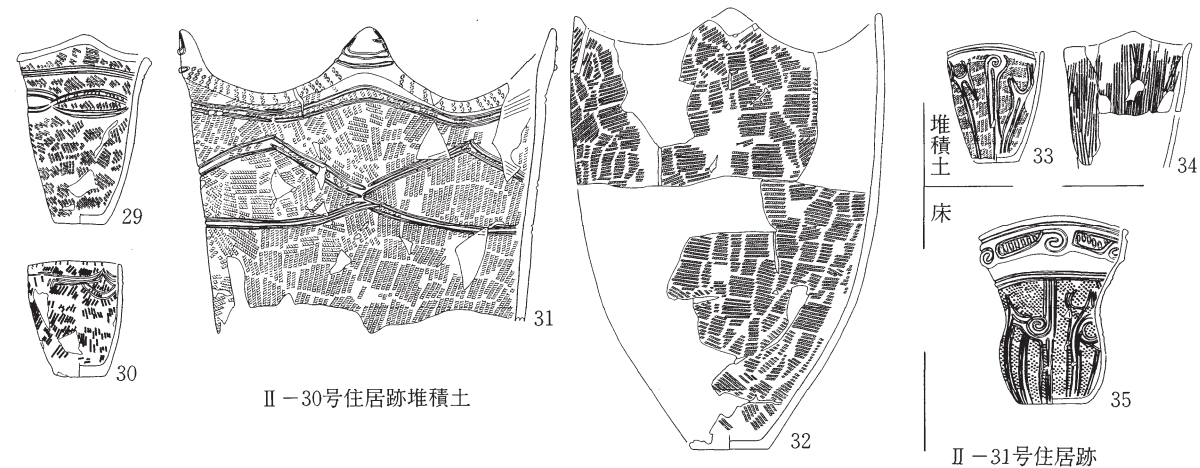
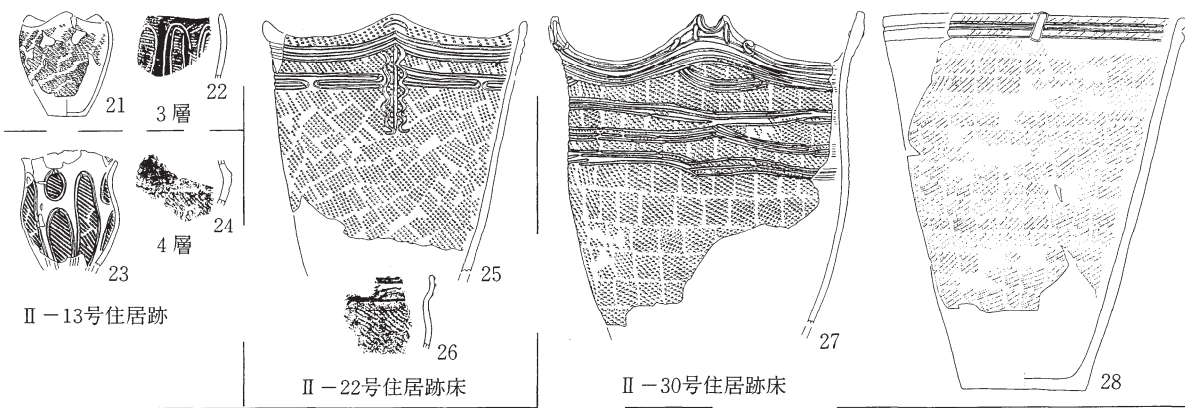
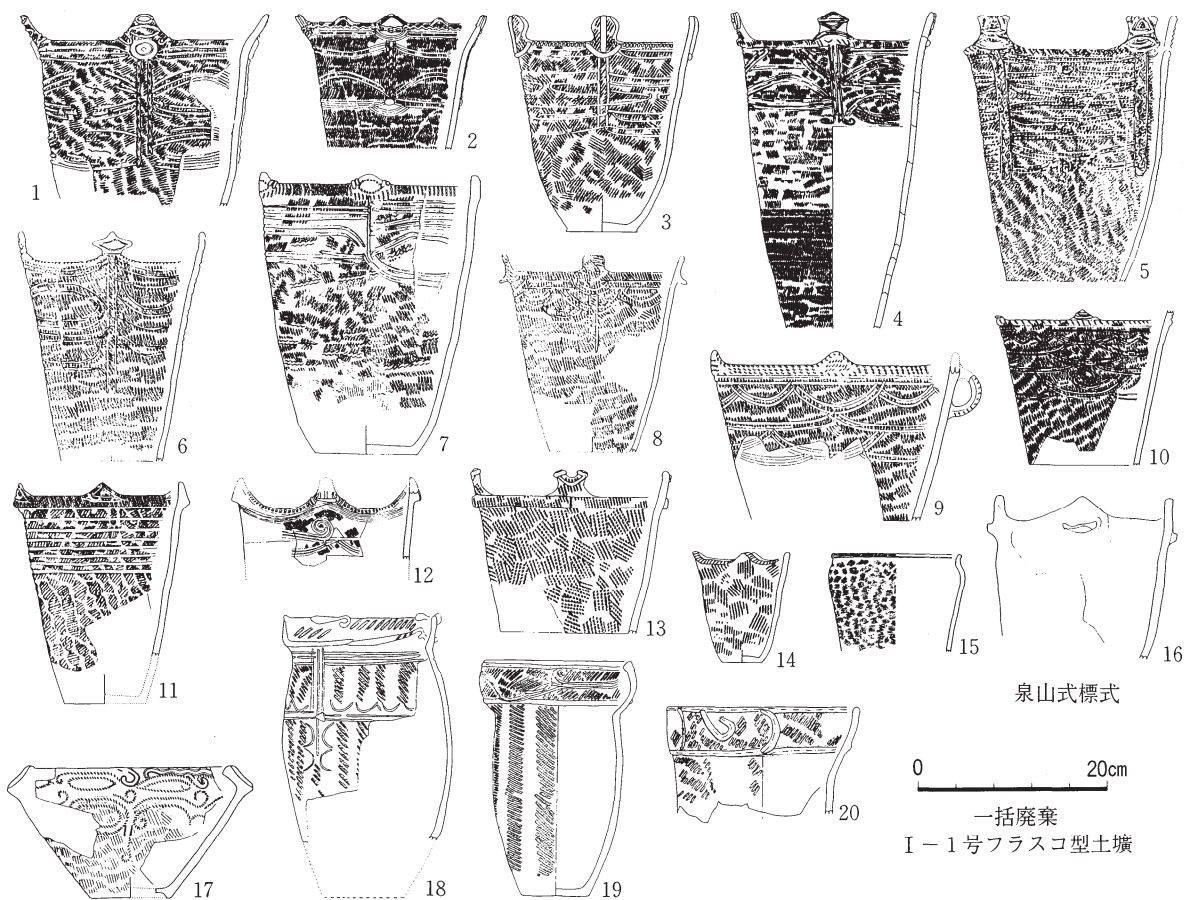


図5 青森県三戸町泉山遺跡出土土々器(3. 共伴関係)

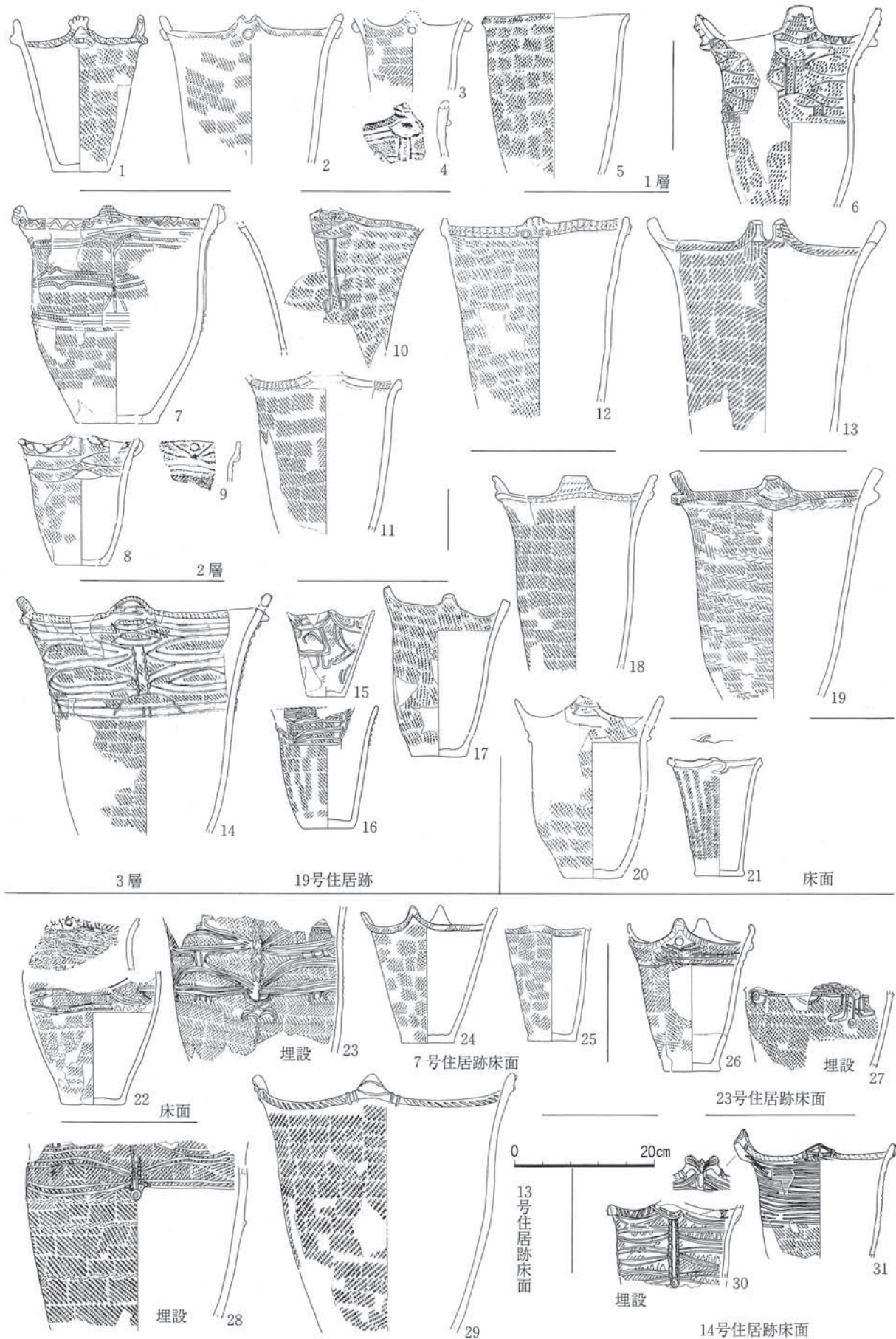


図6 八戸市松ヶ崎遺跡出土々器 (1. 共伴関係)

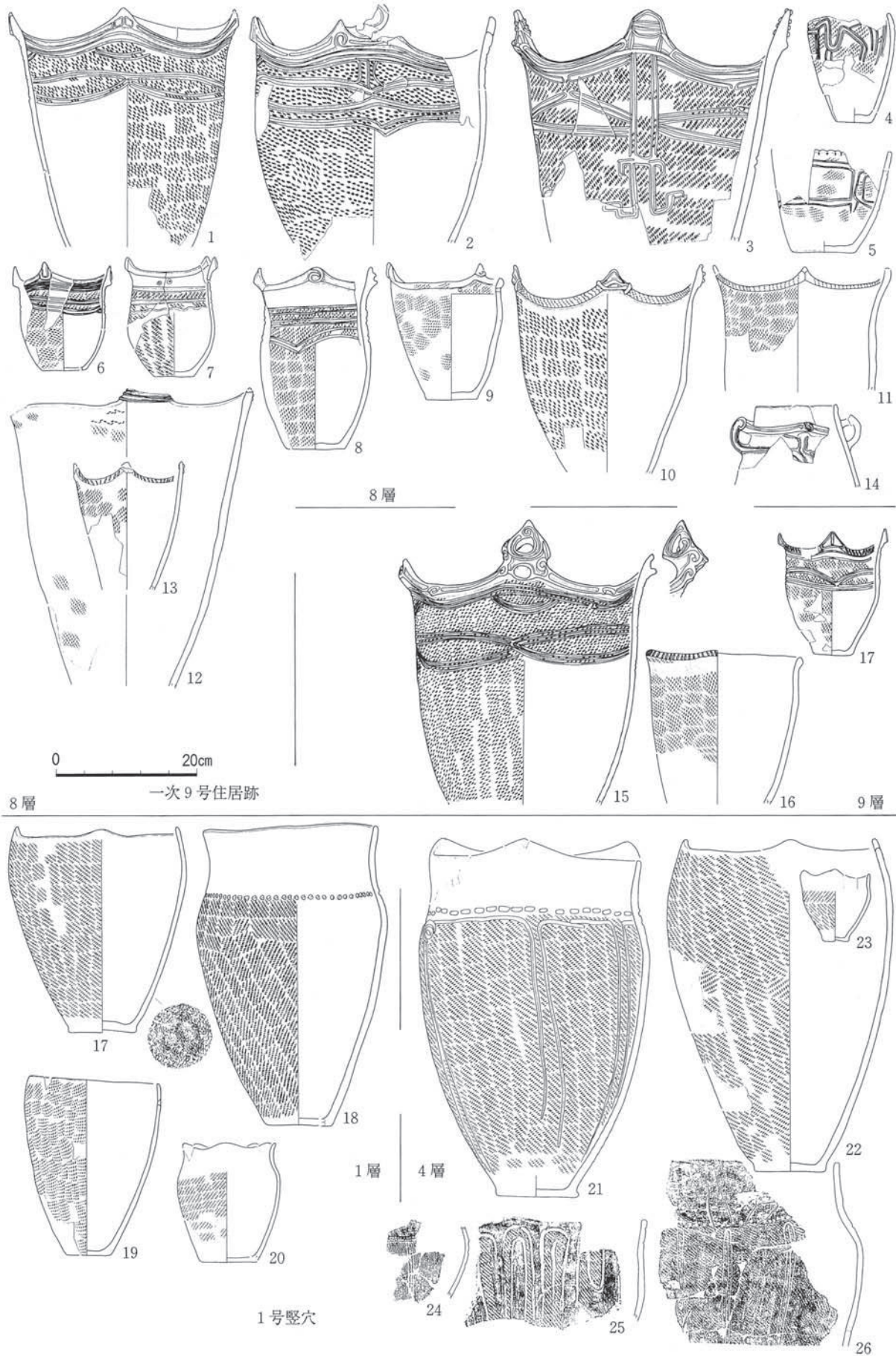


図7 八戸市松ヶ崎遺跡出土々器 (2. 共伴関係)

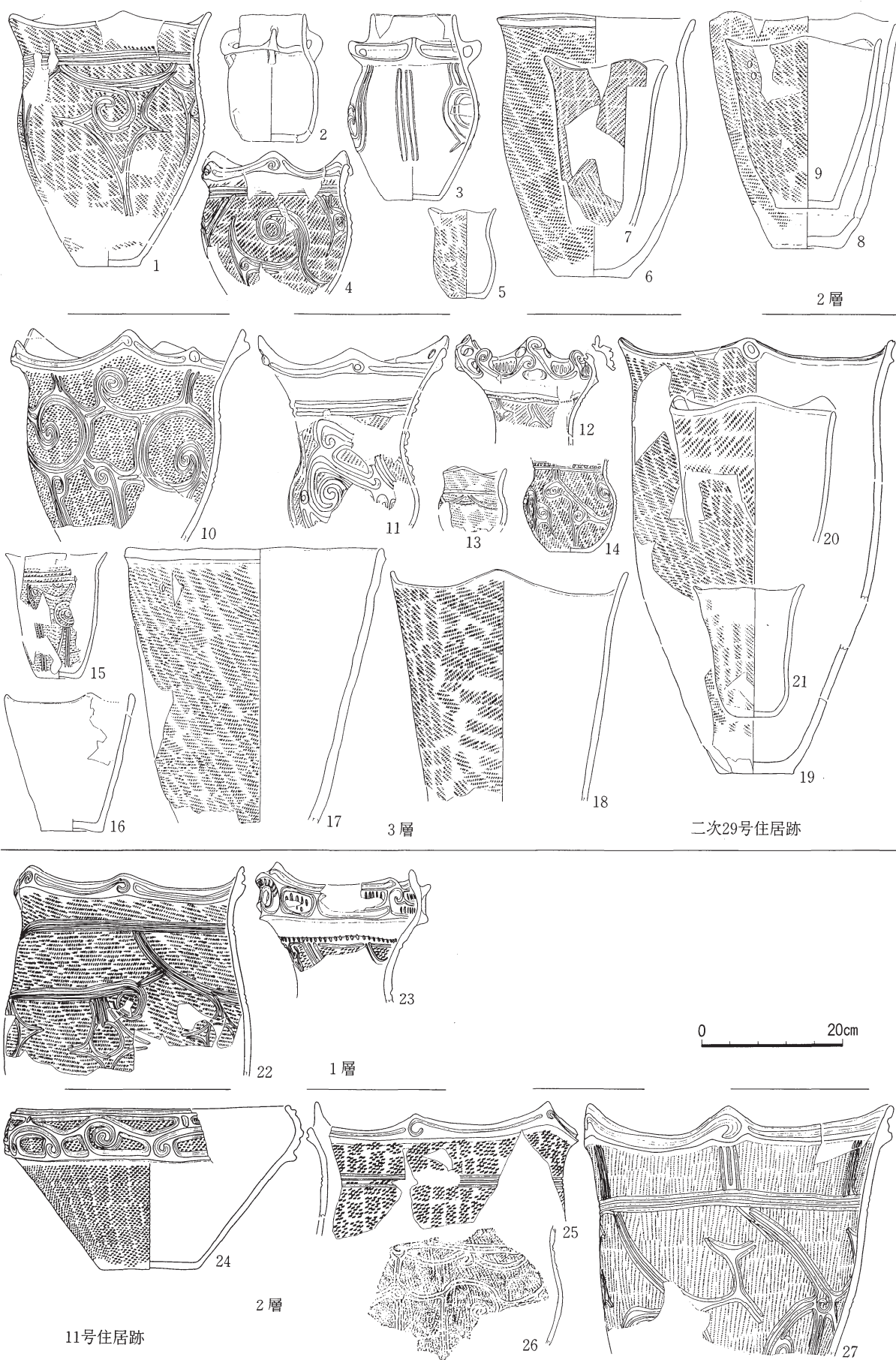


図8 八戸市松ヶ崎遺跡出土土器 (3. 共伴関係)

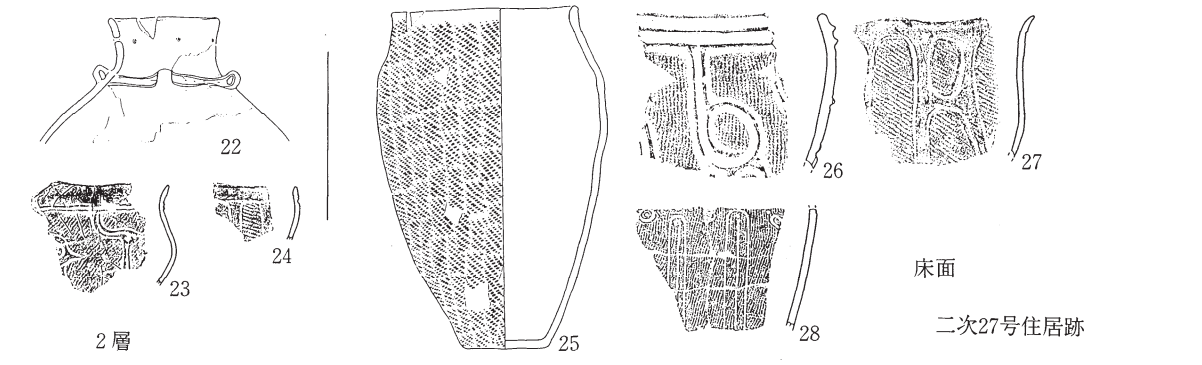
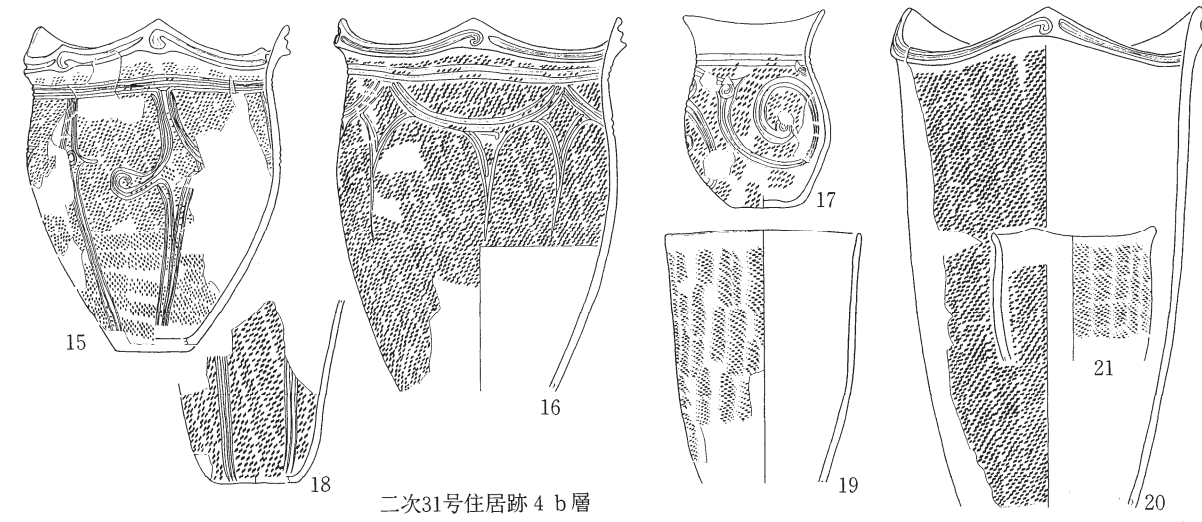
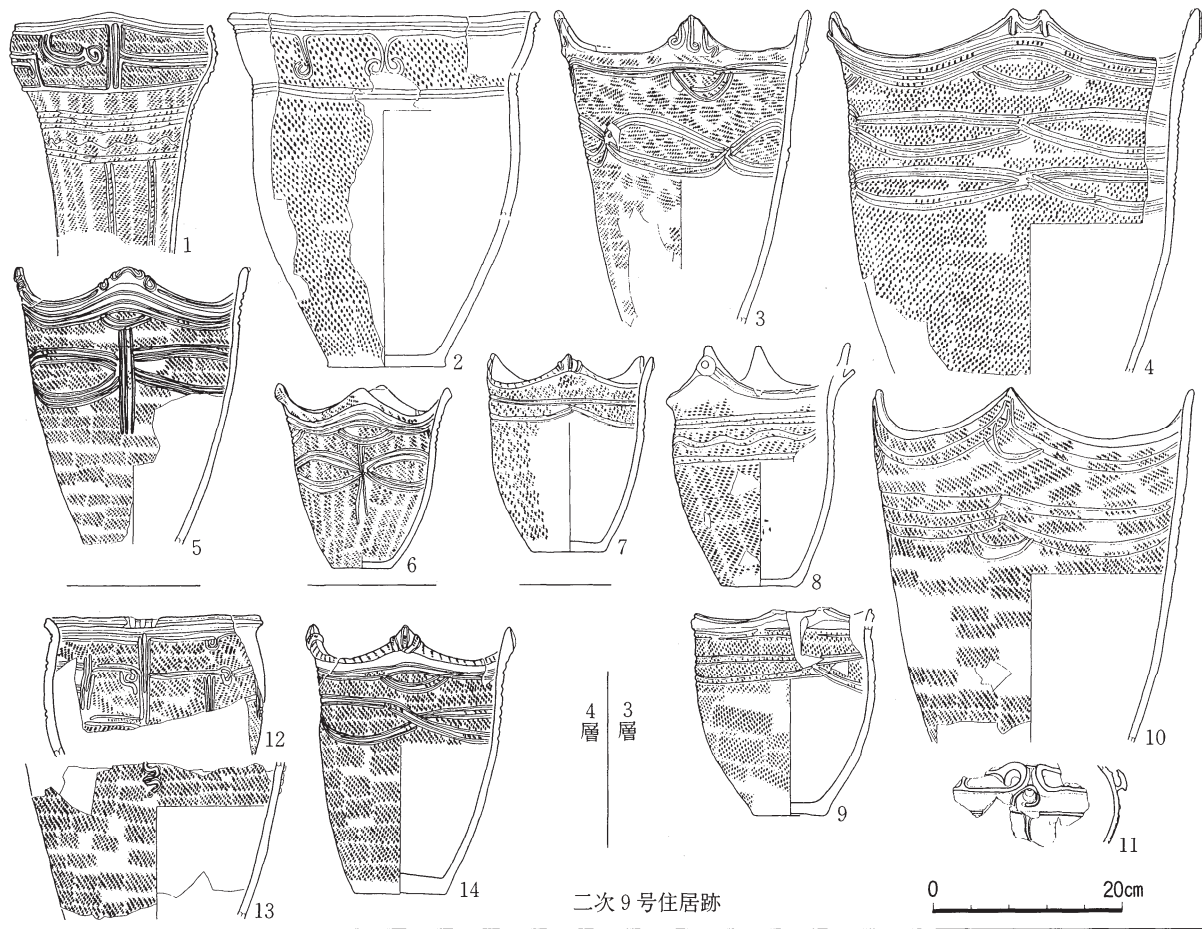


図9 八戸市松ヶ崎遺跡出土々器 (4. 共伴関係)

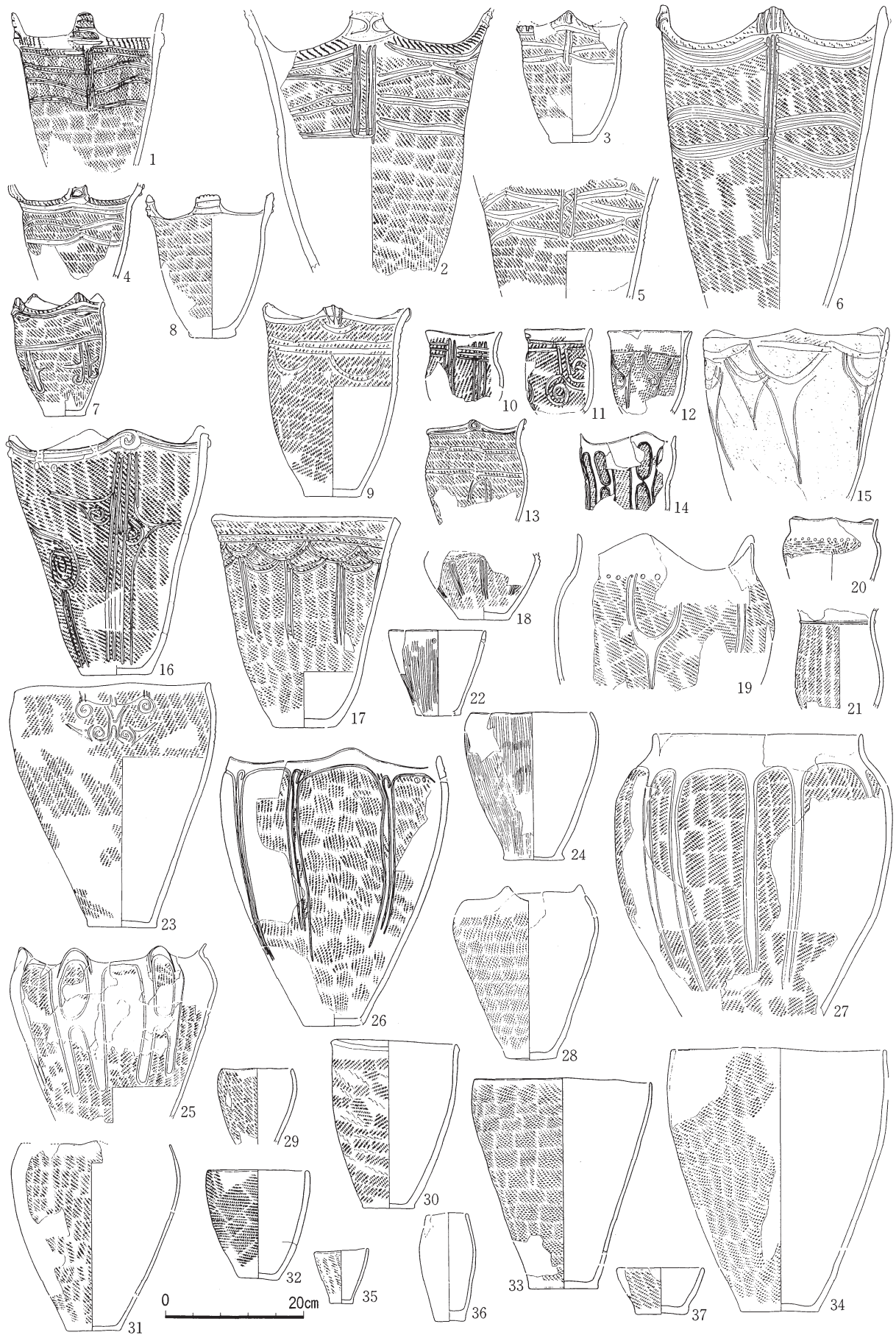


図10 八戸市松ヶ崎遺跡出土々器（5）

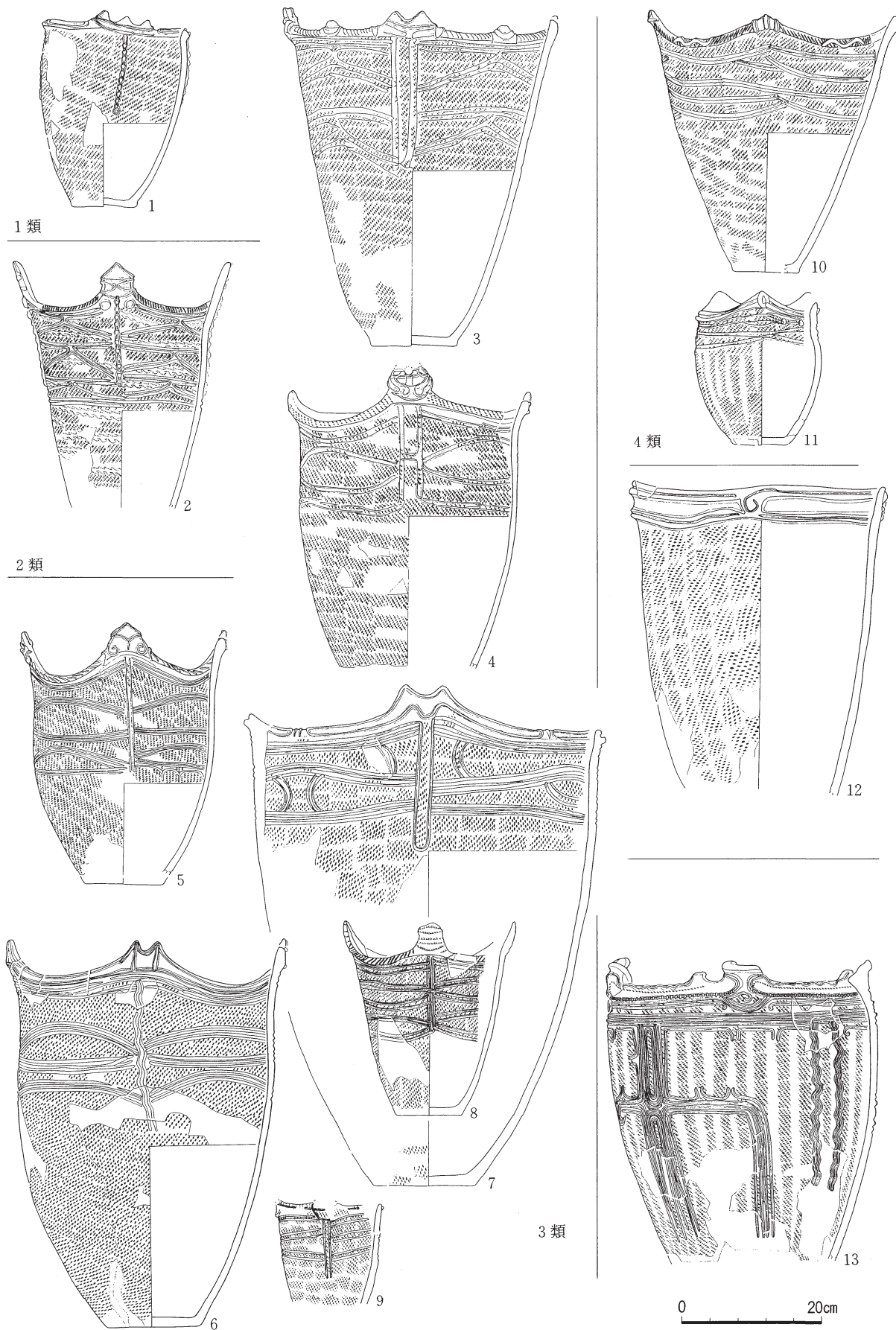


図11 八戸市西長根遺跡出土土々器(1)

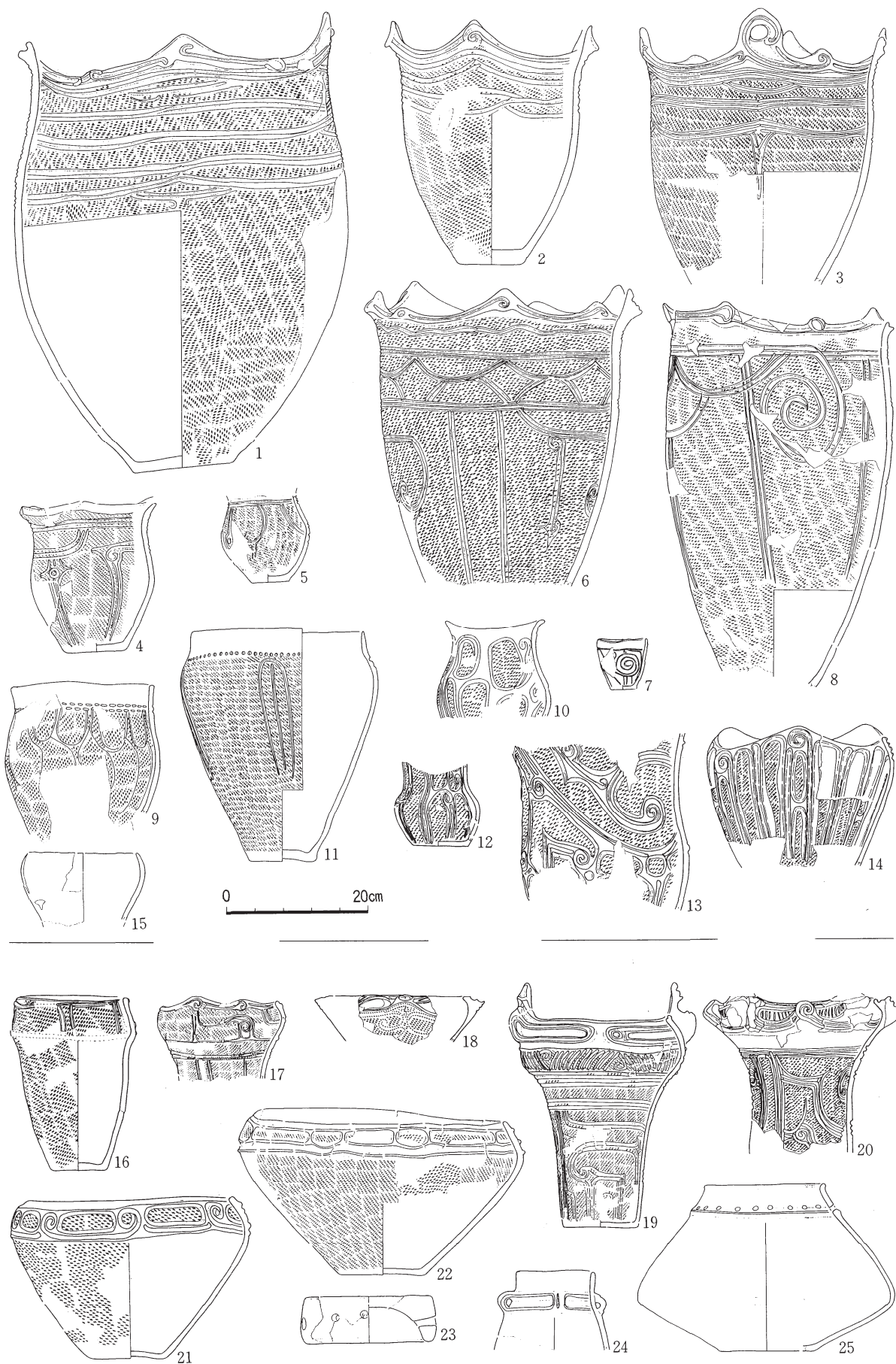


図12 八戸市西長根遺跡出土土器（2）



図13 八戸市西長根遺跡出土々器 (3. 共伴関係)

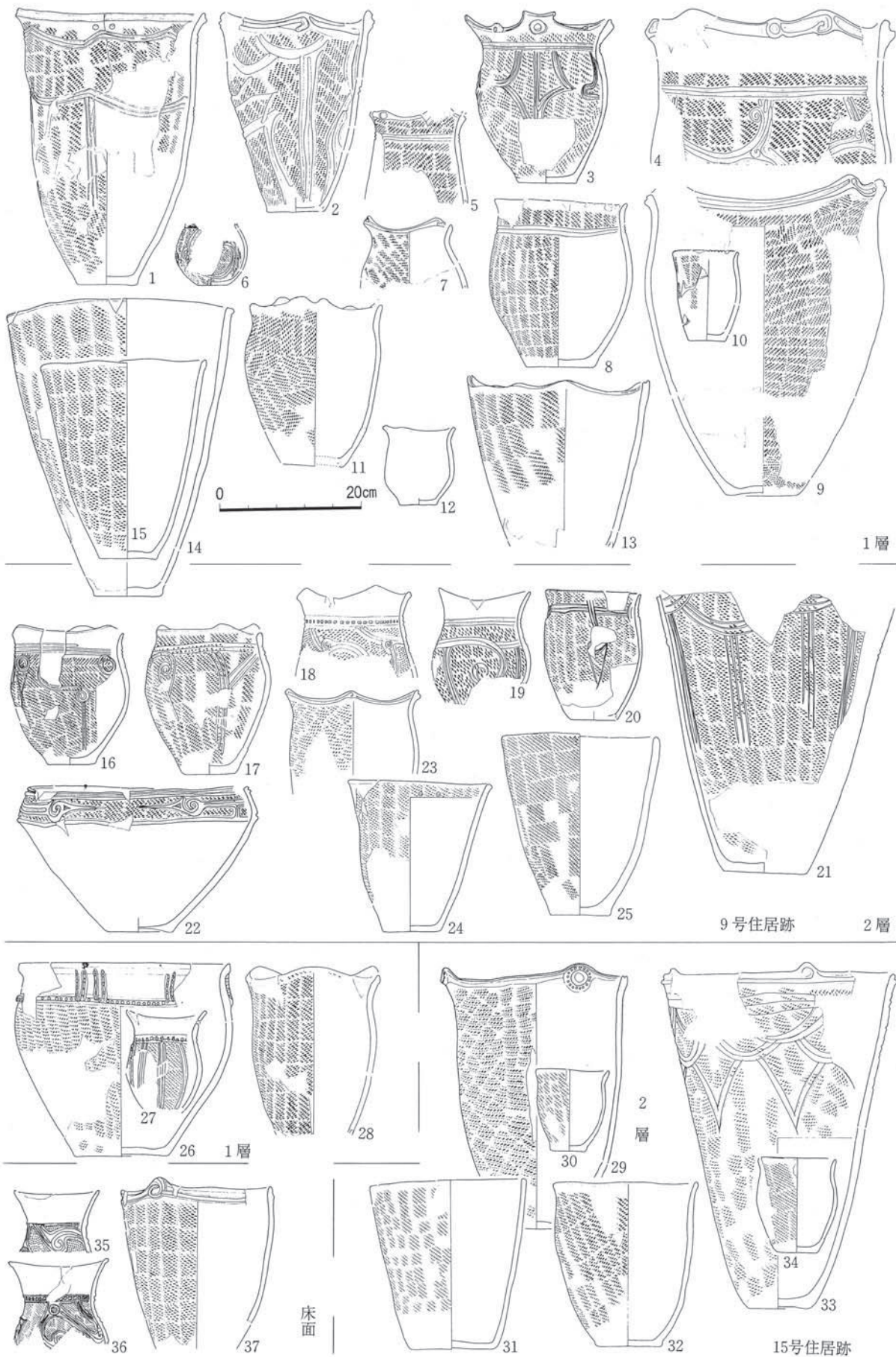


図14 八戸市西長根遺跡出土々器（4. 共伴関係）

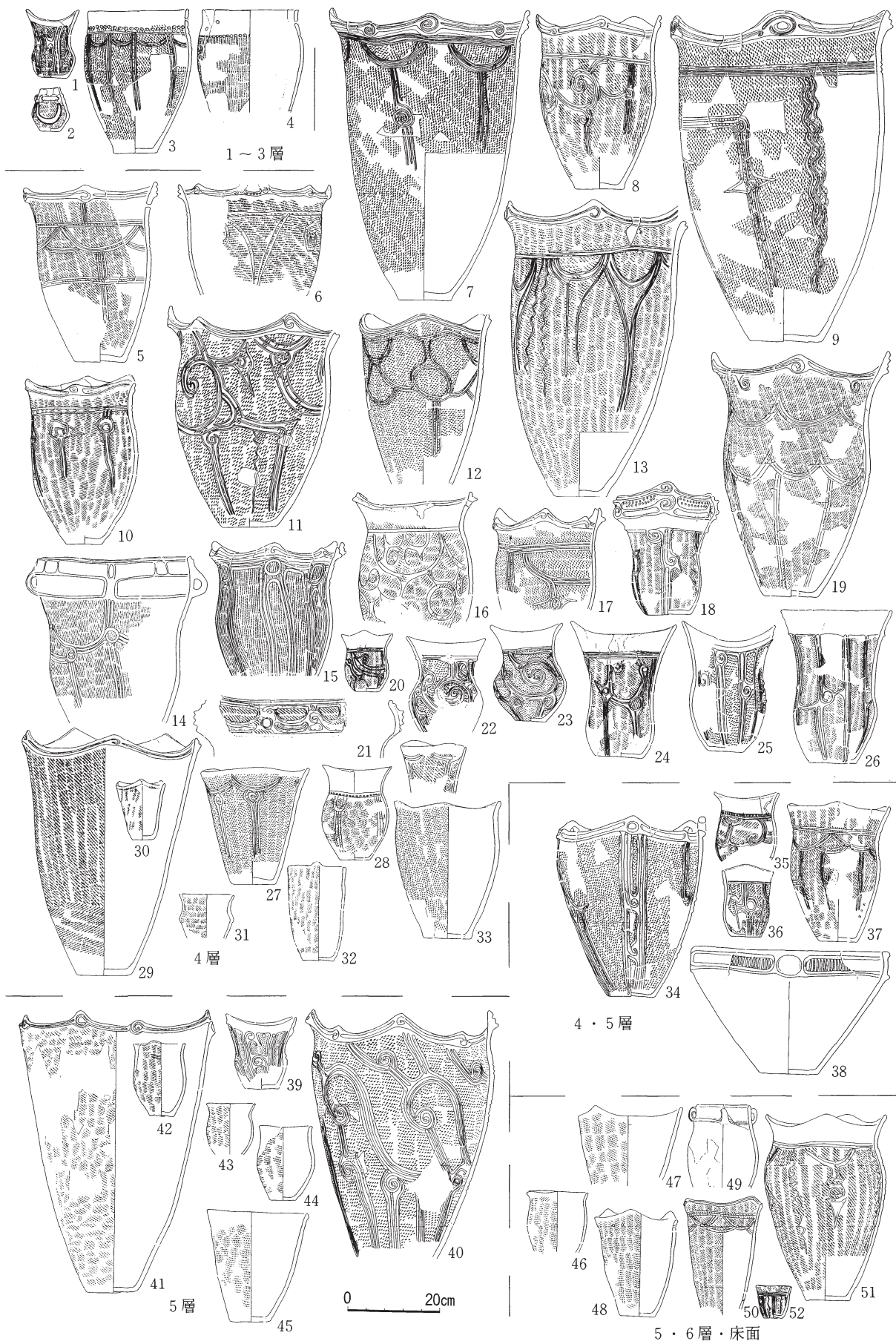


図15 八戸市西長根遺跡10号住居跡出土々器 (5. 共伴関係)

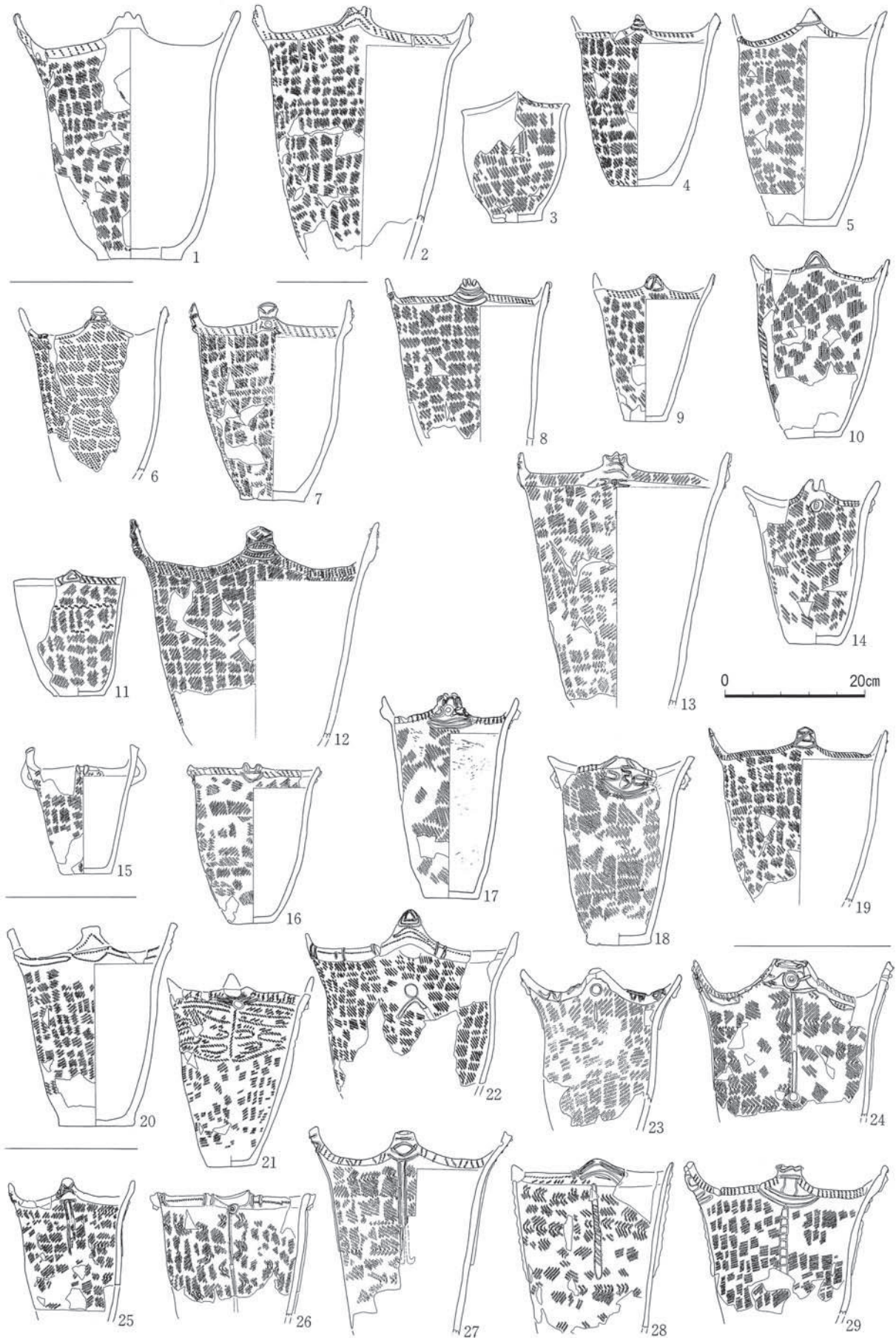


図16 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器（1）

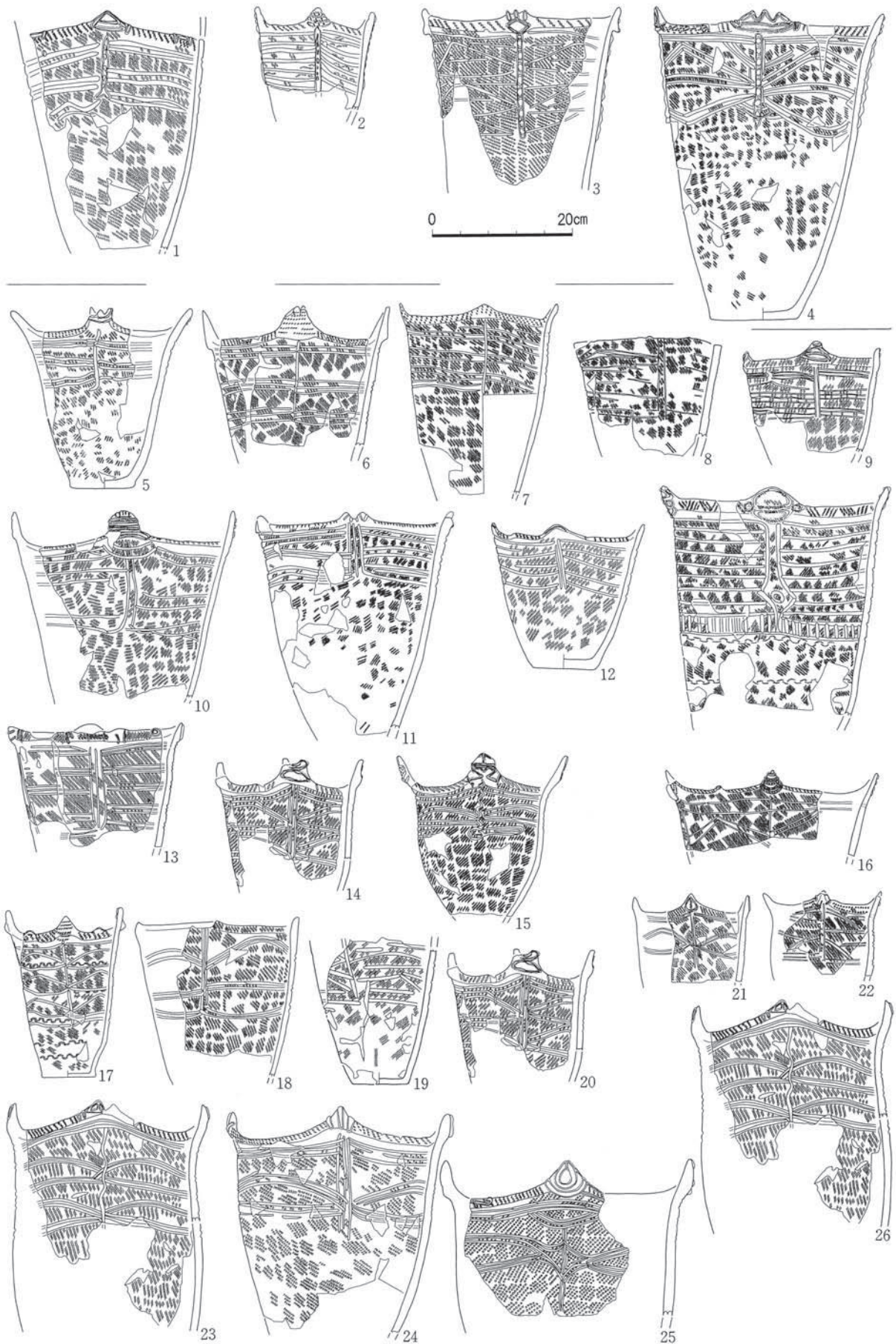


図17 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土土器(2)



図18 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器（3）



図19 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器（4）

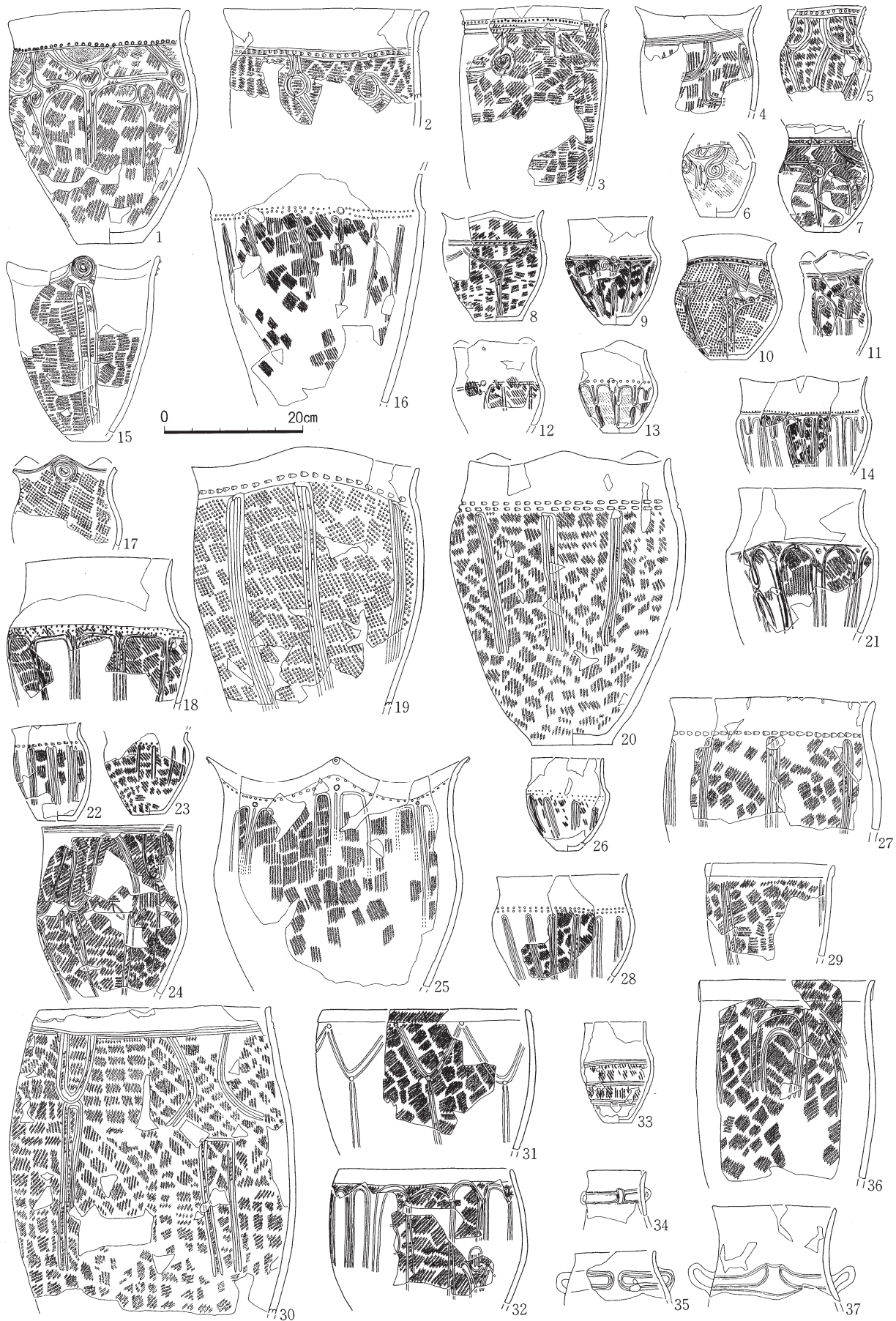


図20 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器（5）

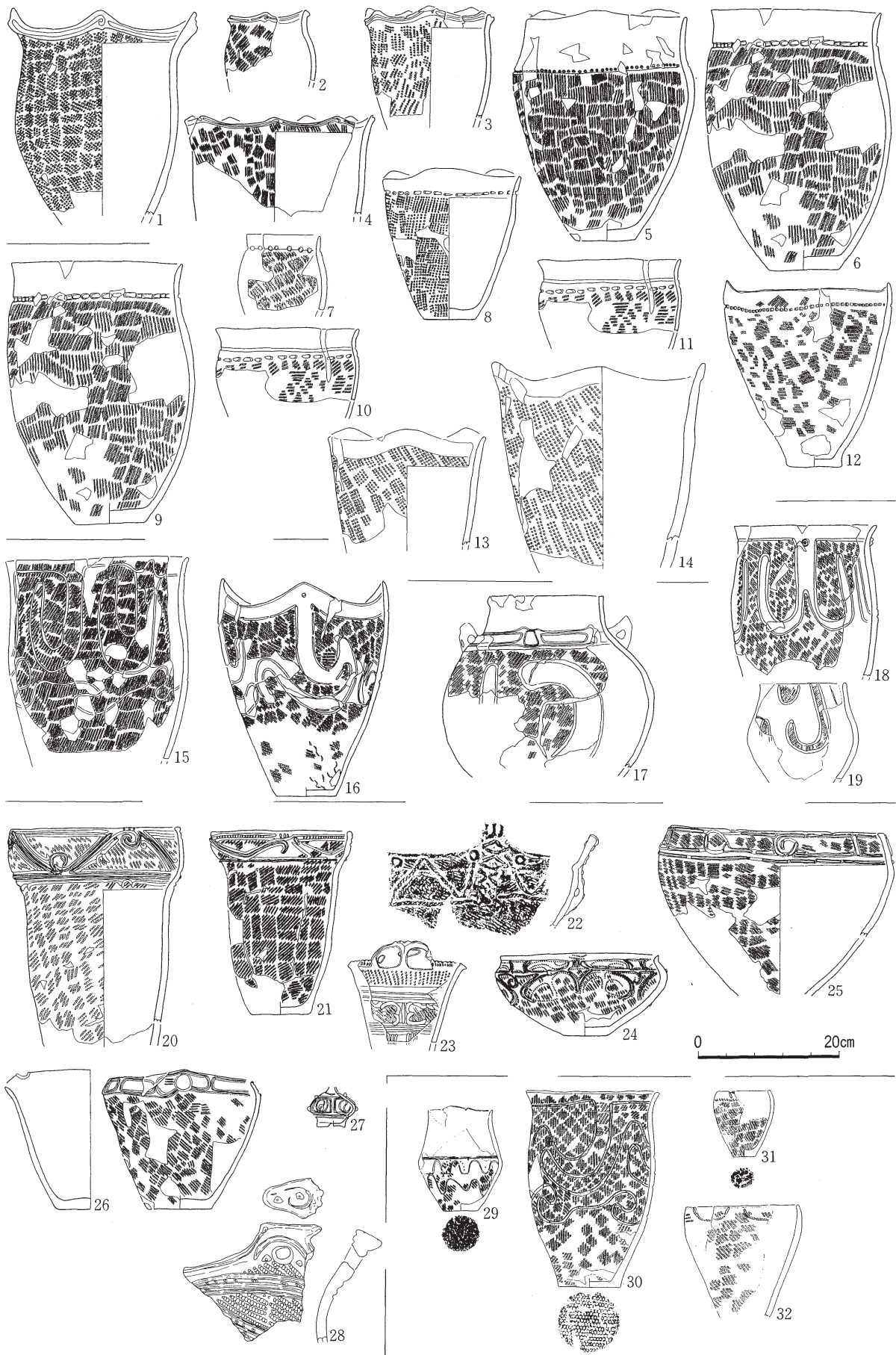


図21 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器(6)

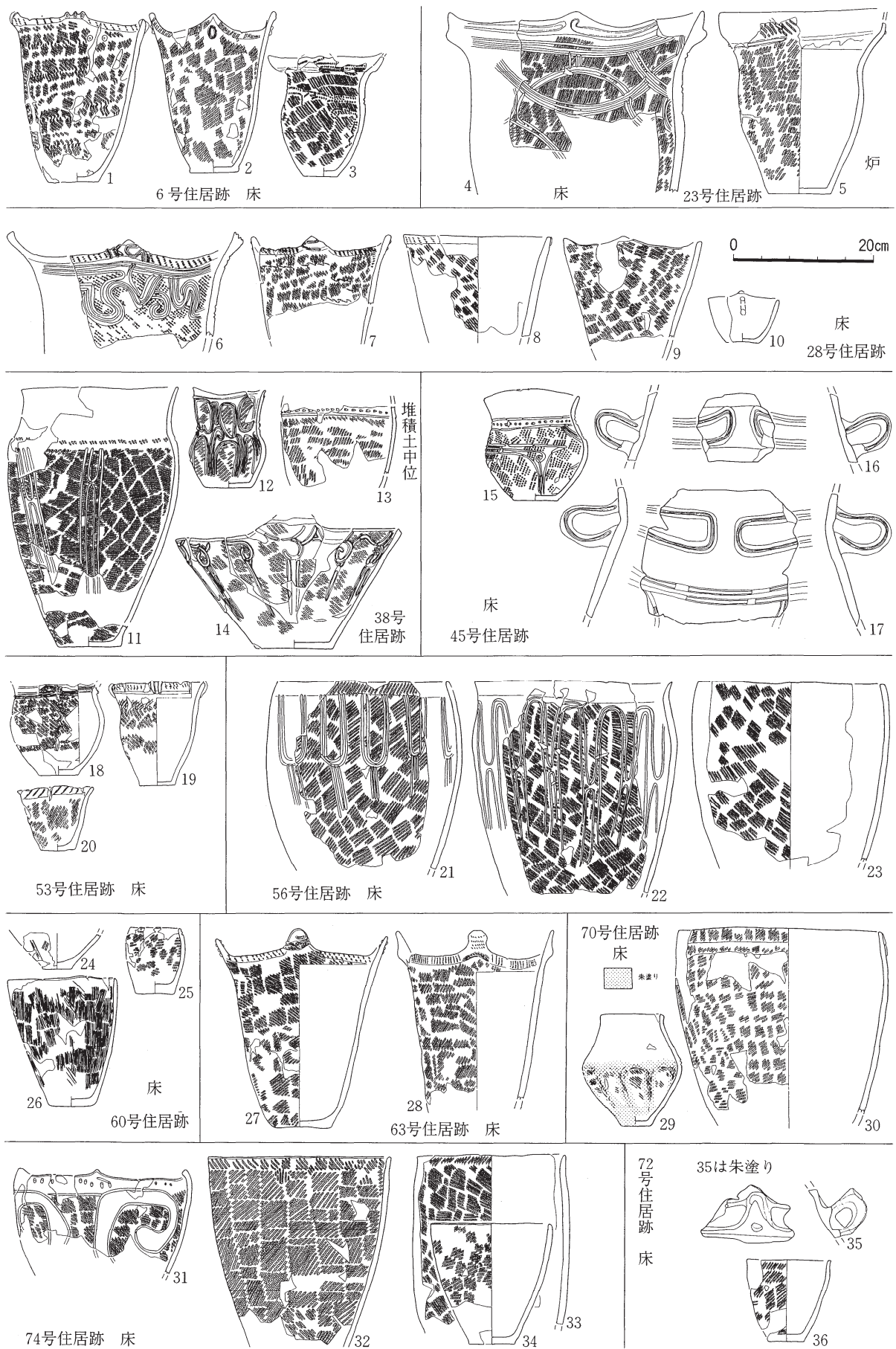


図22 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器（7. 共伴関係）

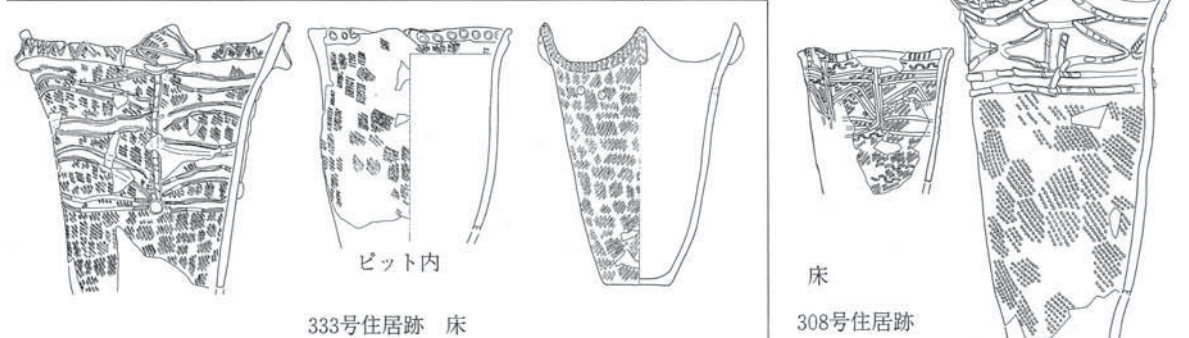
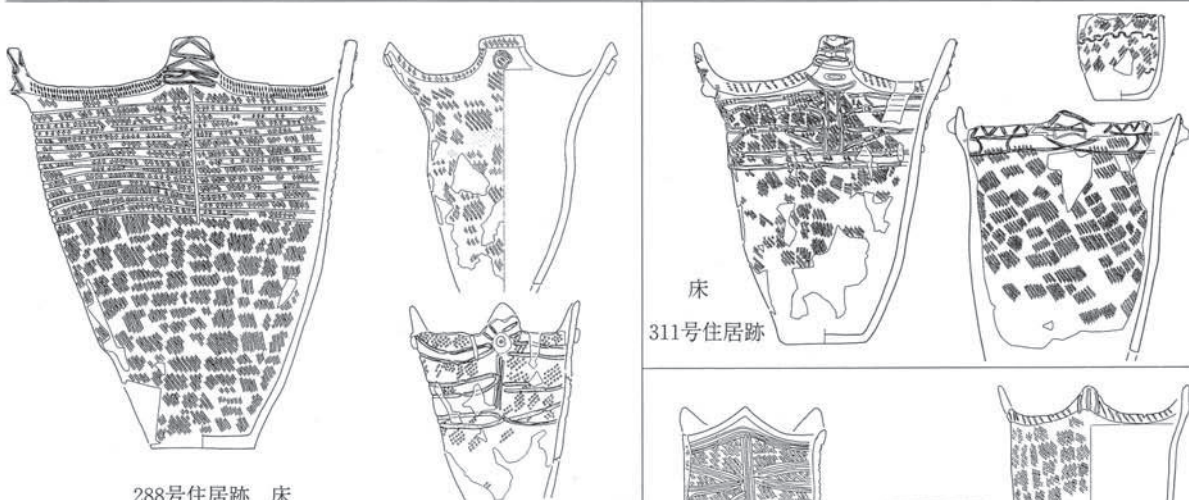
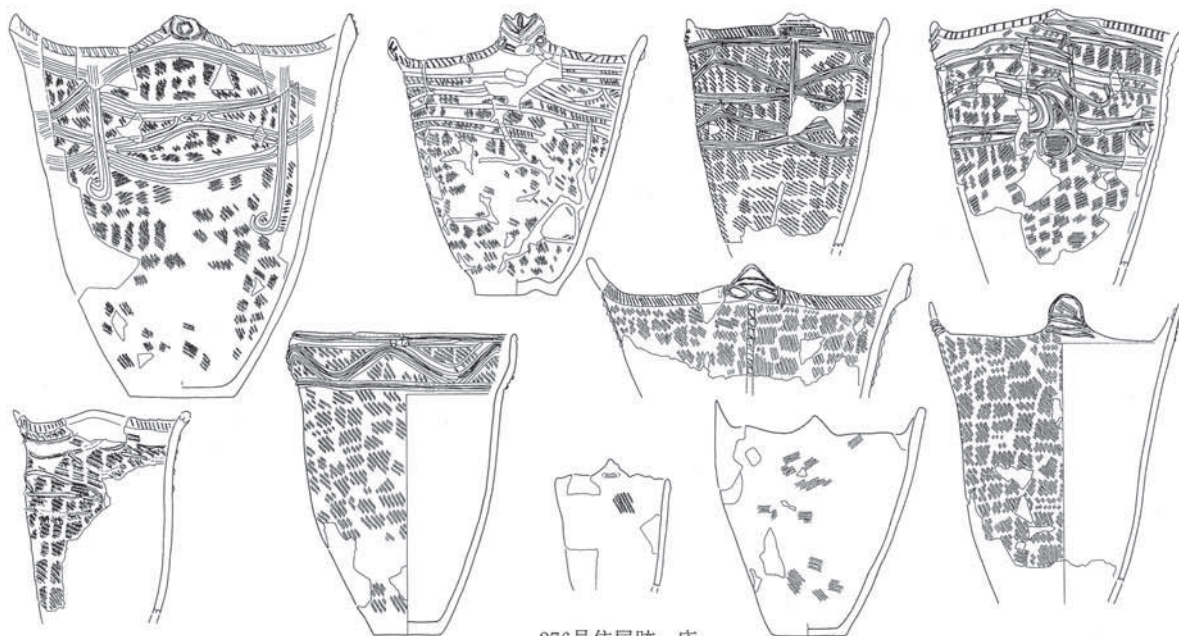


図24 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土土器（9. 共伴関係）

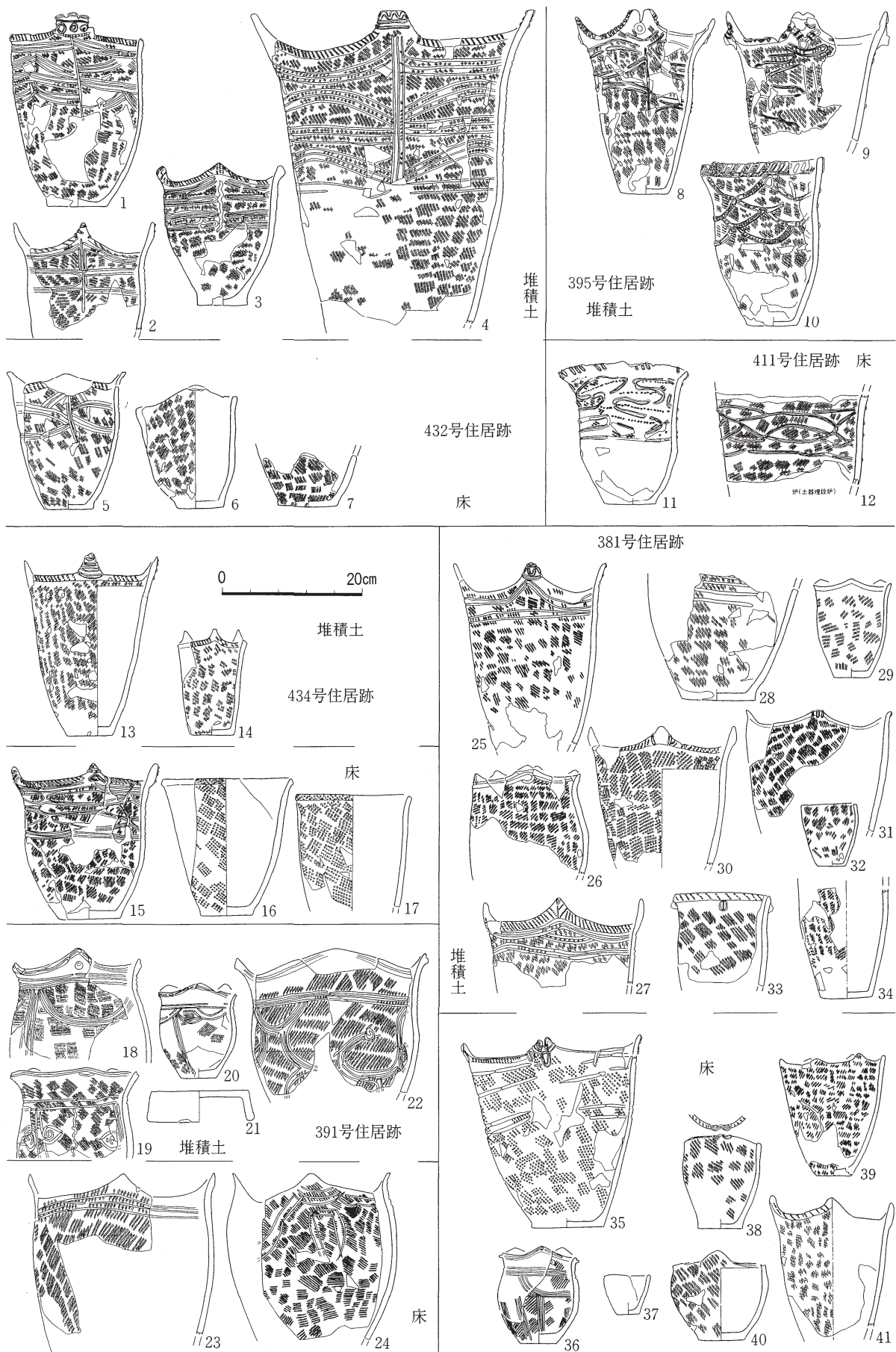


図25 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器 (10. 共伴関係)

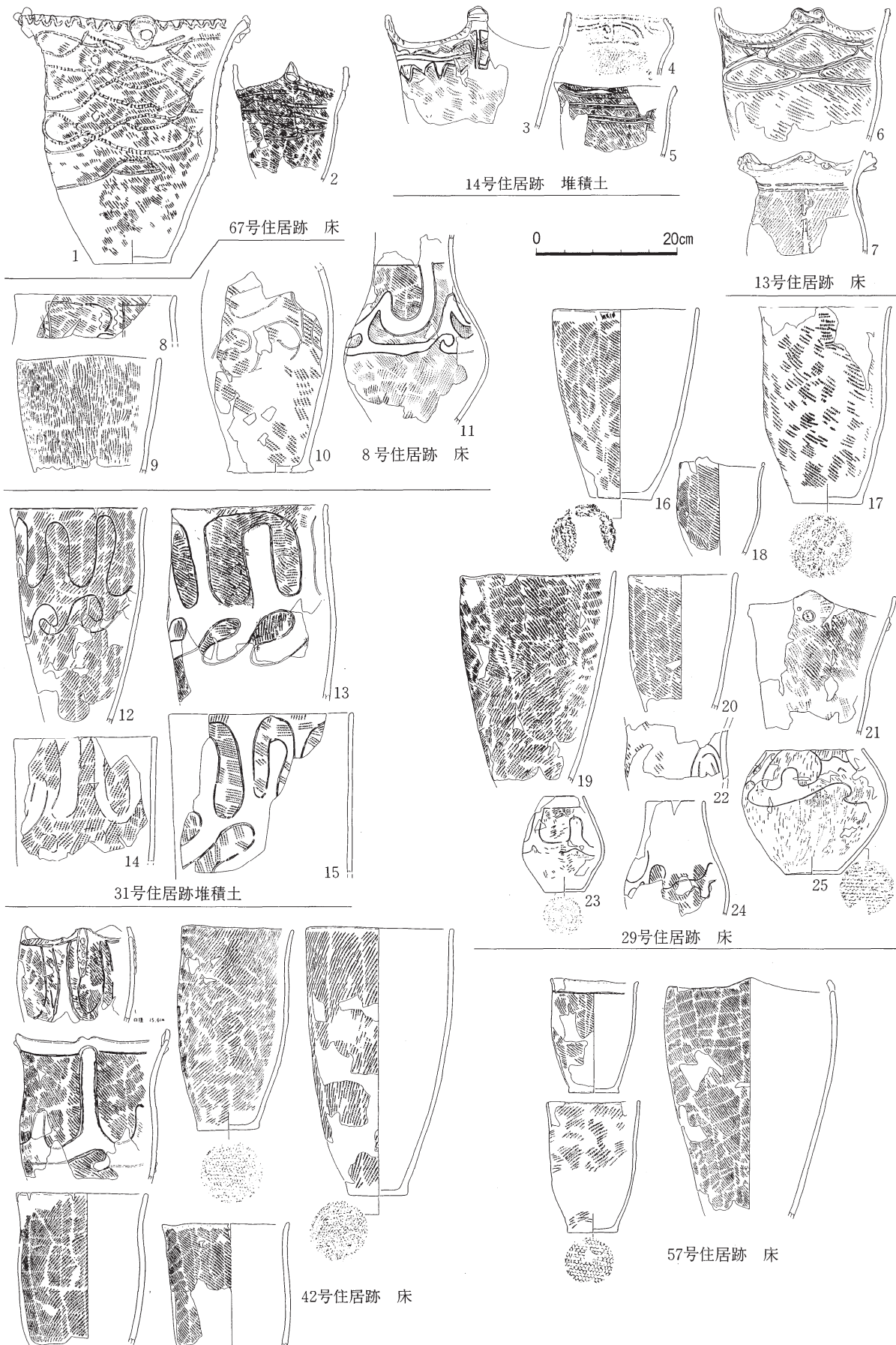


図26 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土土器 (11. 共伴関係)

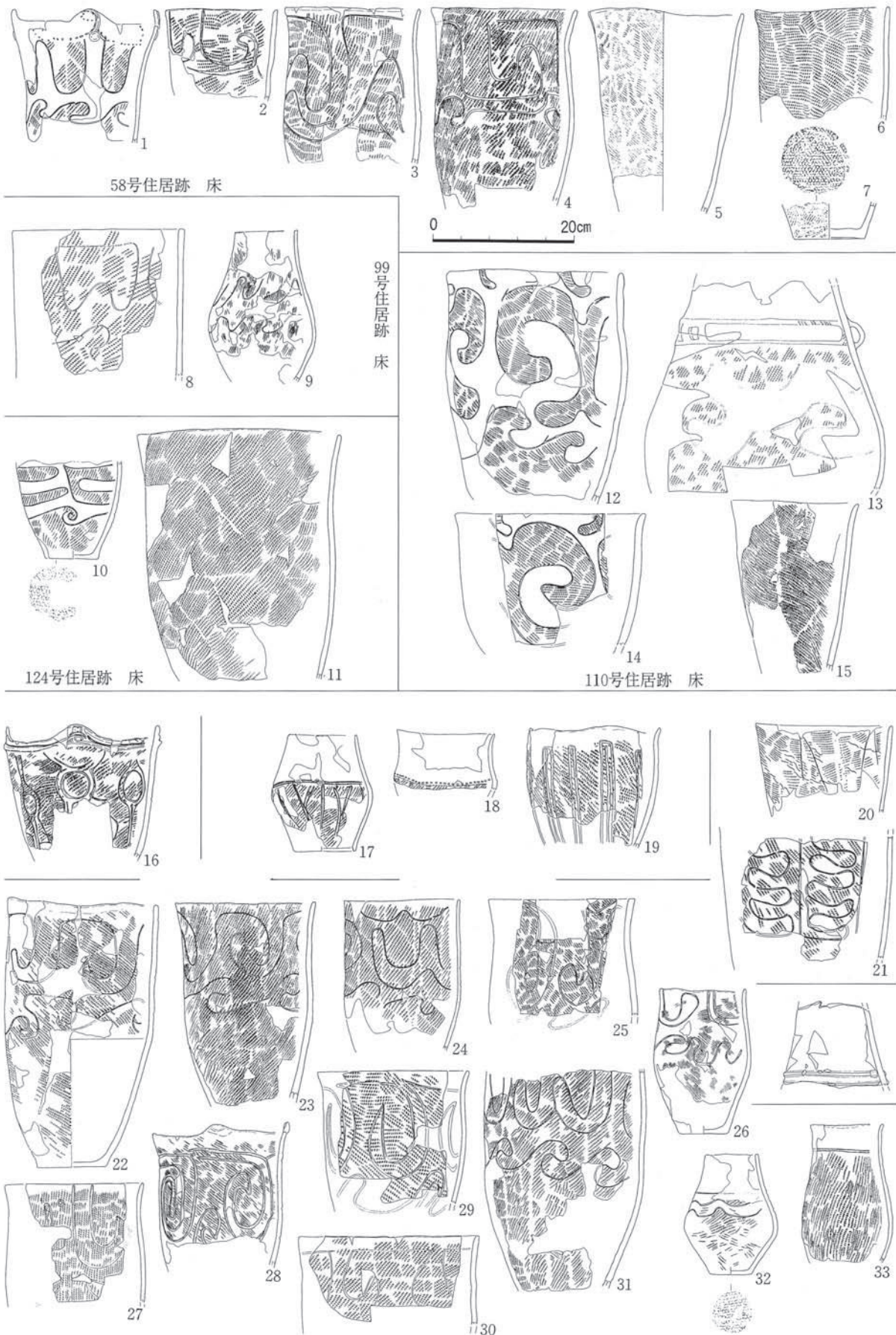


図27 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器 (12. 共伴関係)

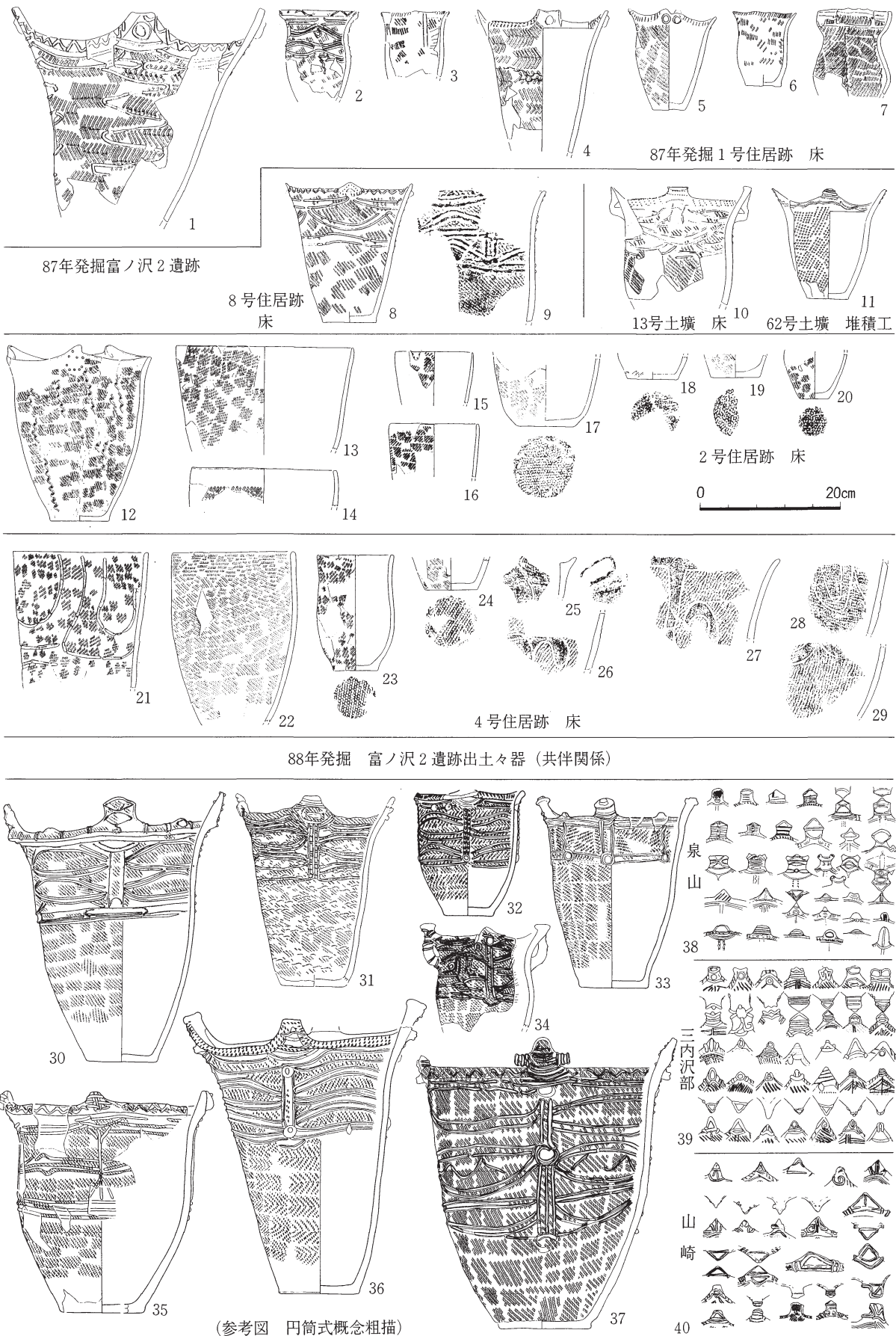
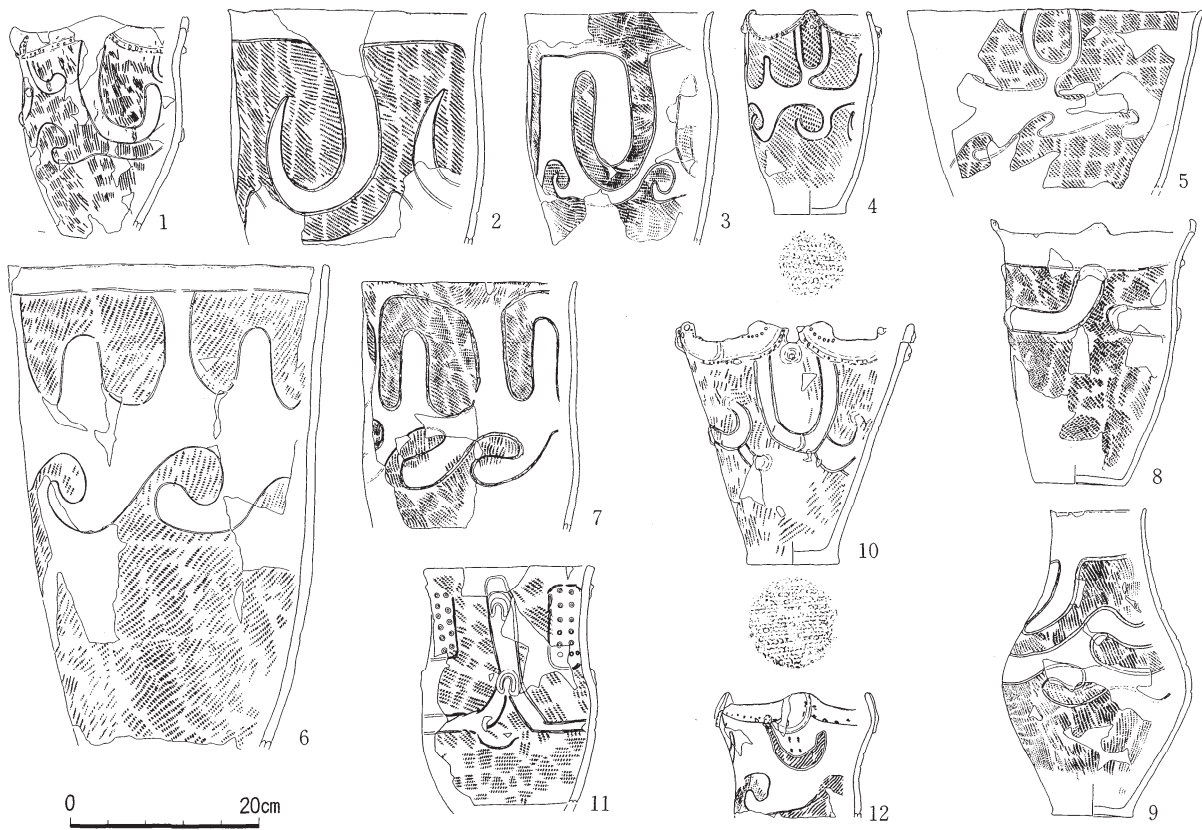


図28 青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡 (13. 共伴関係) 外出土々器



青森県六ヶ所村富ノ沢2遺跡出土々器 (14)

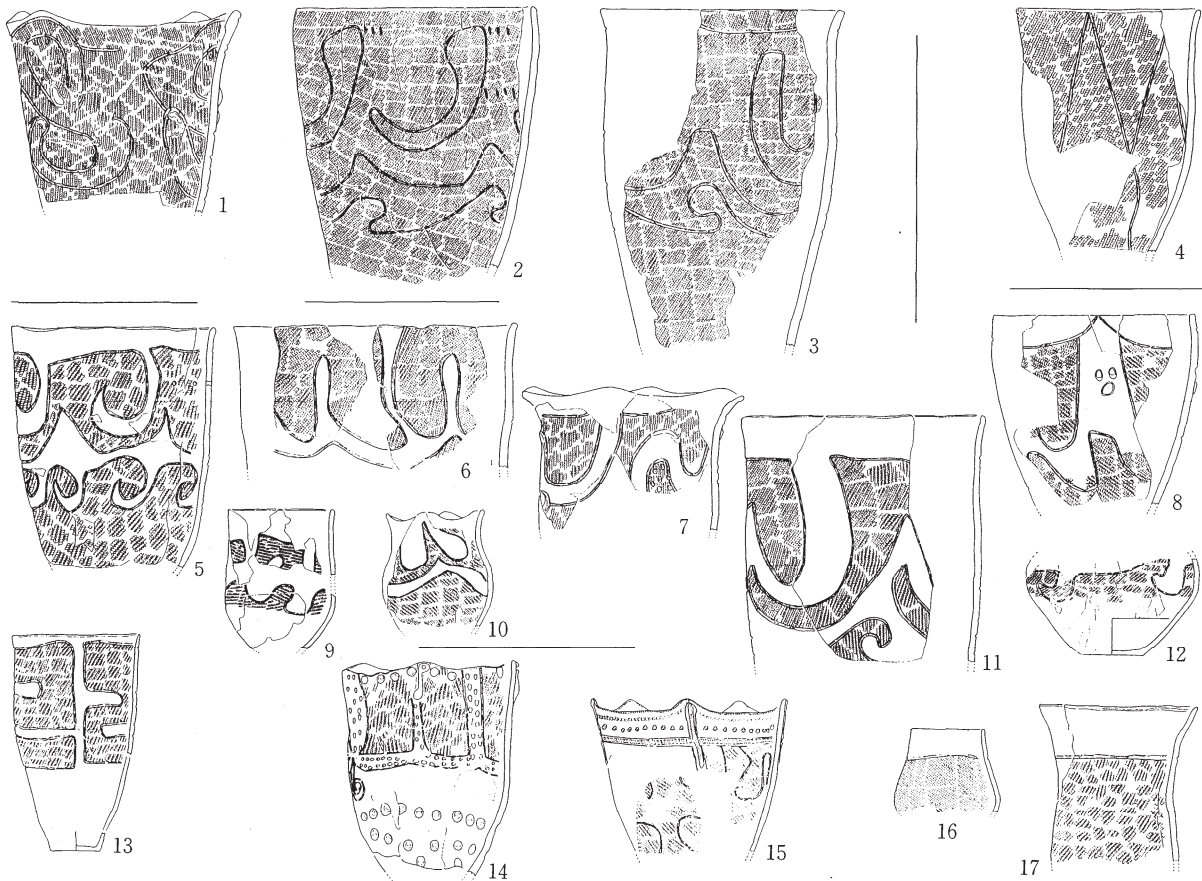


図29 青森県六ヶ所村弥栄平遺跡出土々器

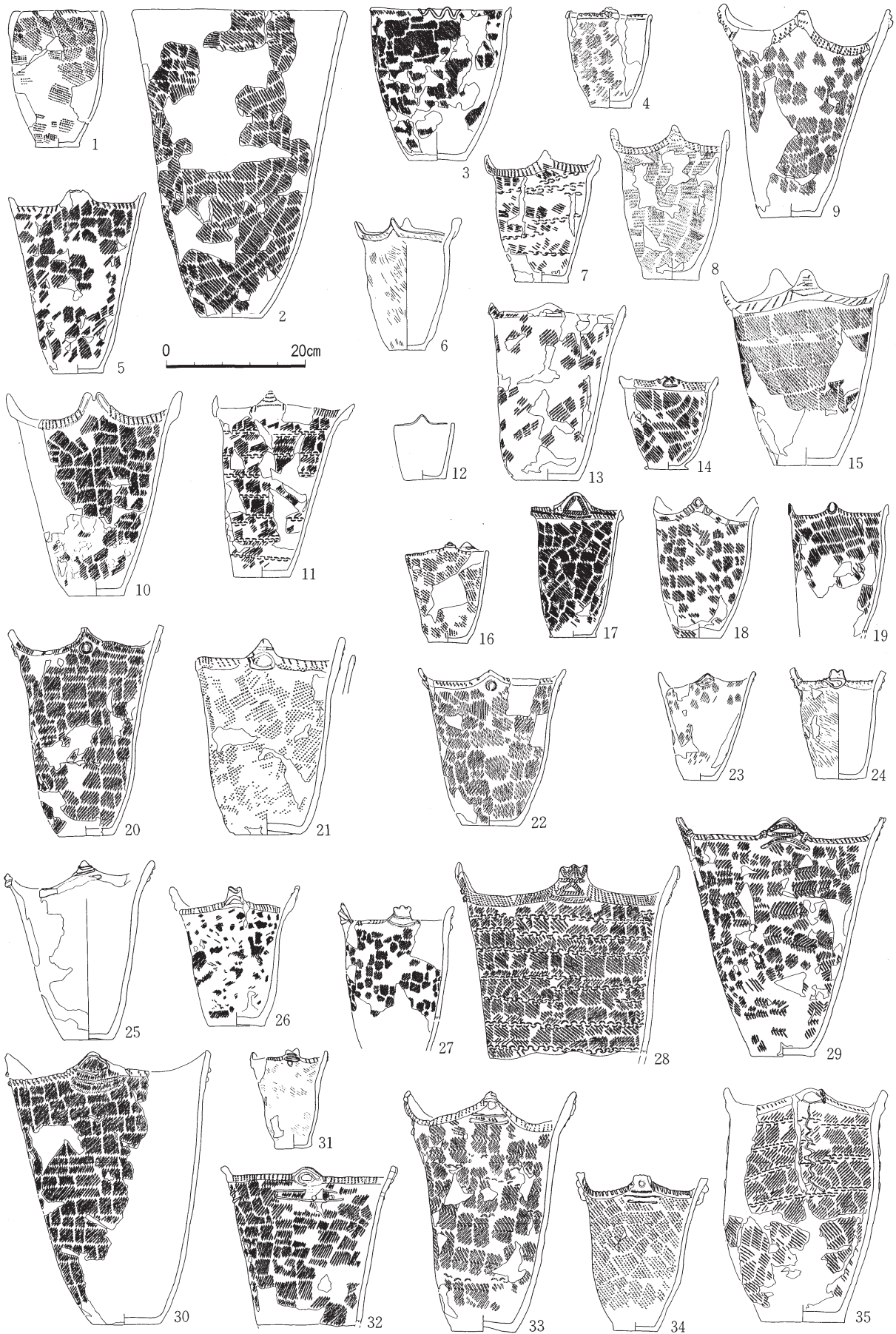


図30 青森市三内丸山2遺跡（小三内）出土々器（1）

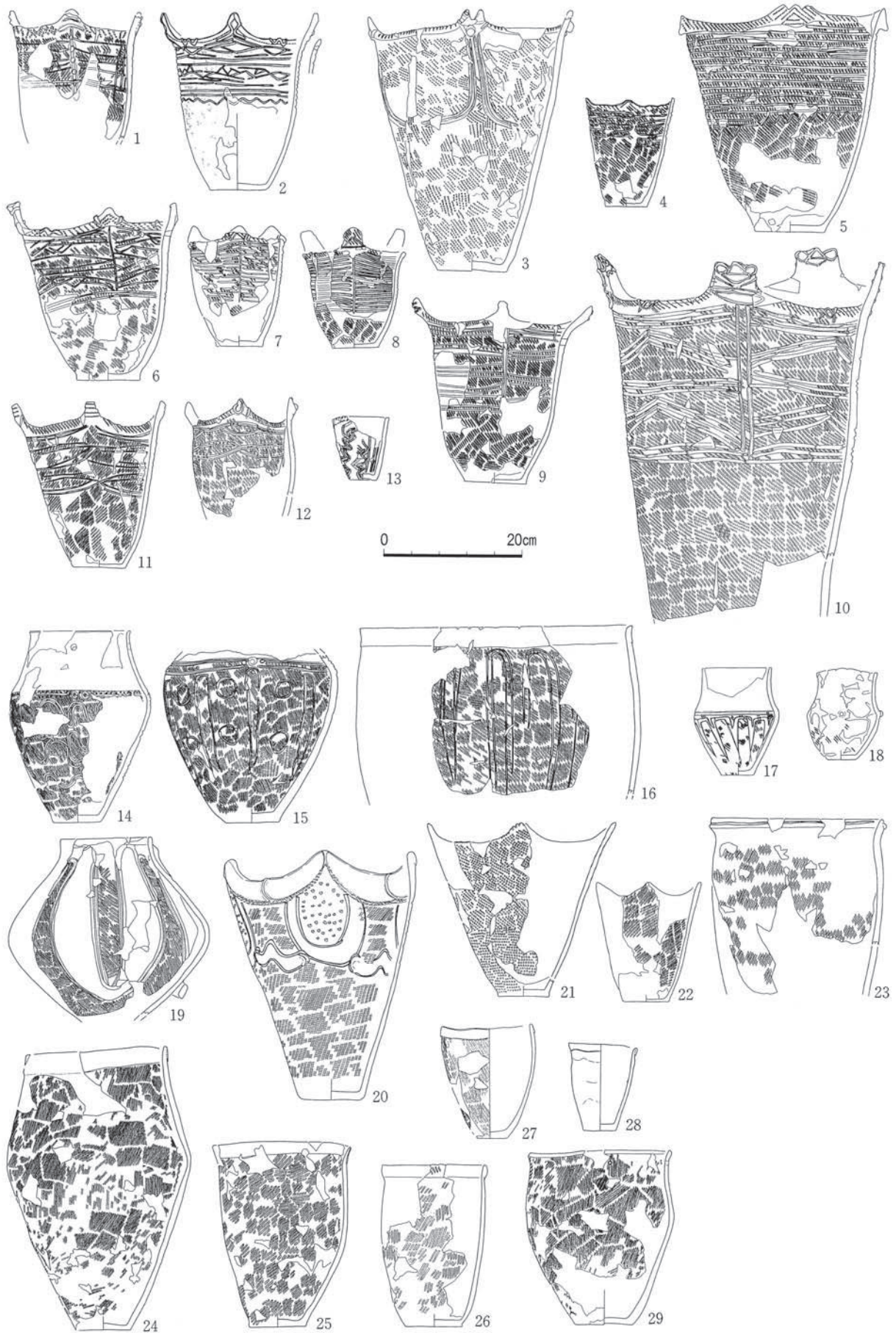
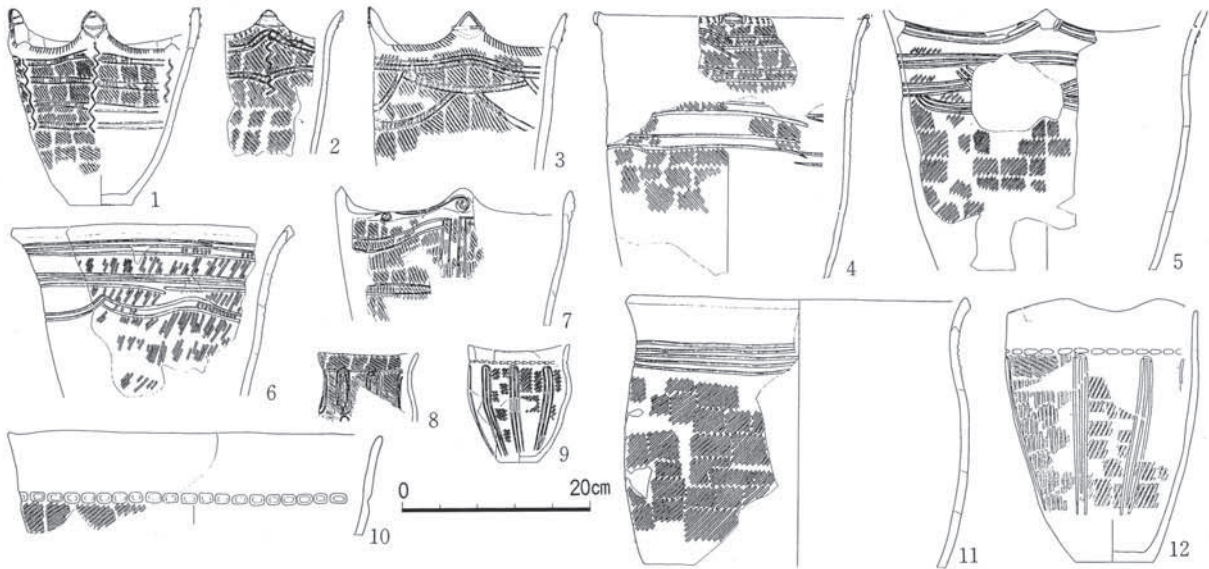


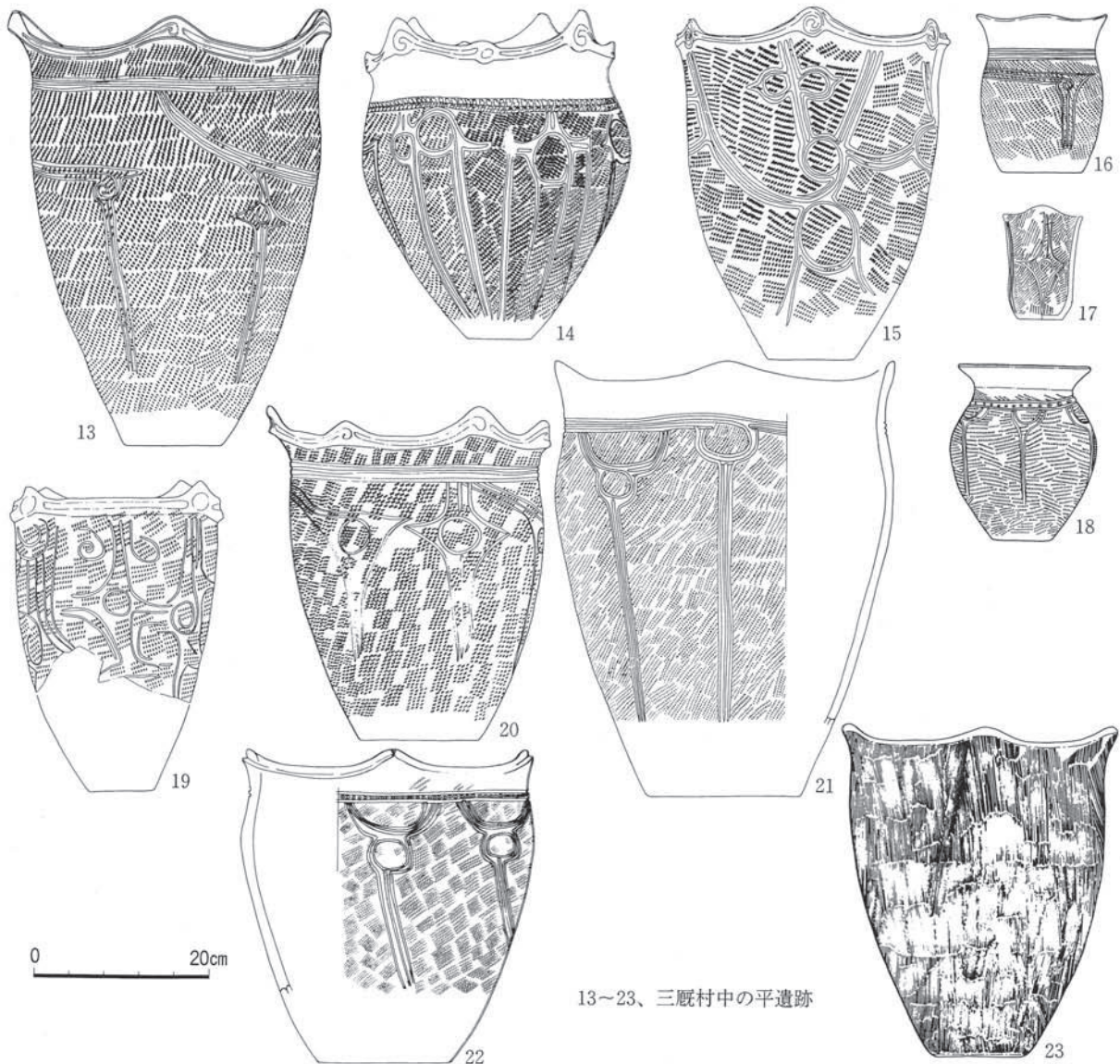
図31 青森市三内丸山2遺跡（小三内）出土々器（2）



図32 青森市近野遺跡出土々器 (1)



青森市近野遺跡出土々器 (2)



13~23、三厩村中の平遺跡

図33 青森市近野遺跡、青森県三厩村中の平遺跡出土々器

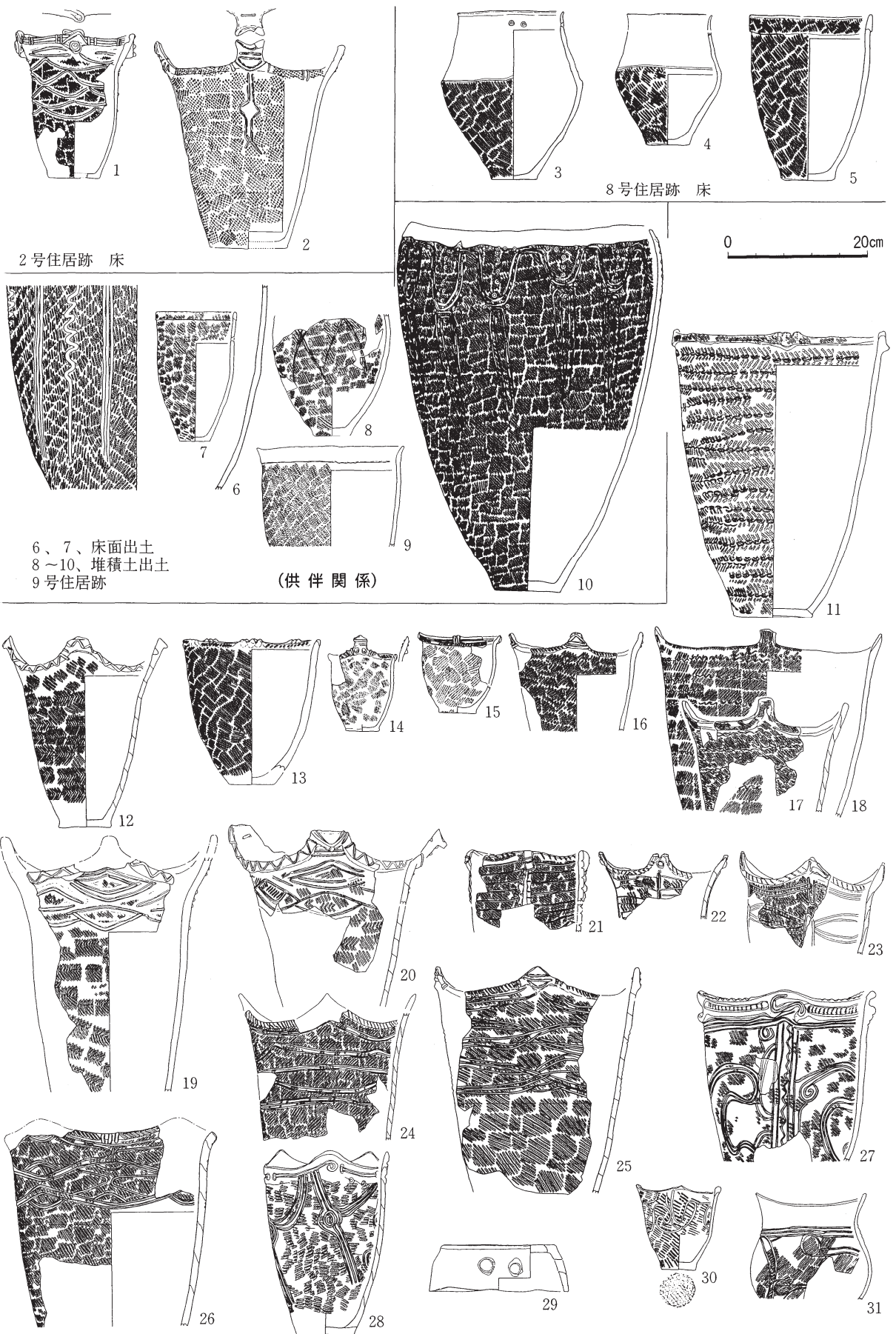


図34 青森県今別町山崎遺跡出土々器

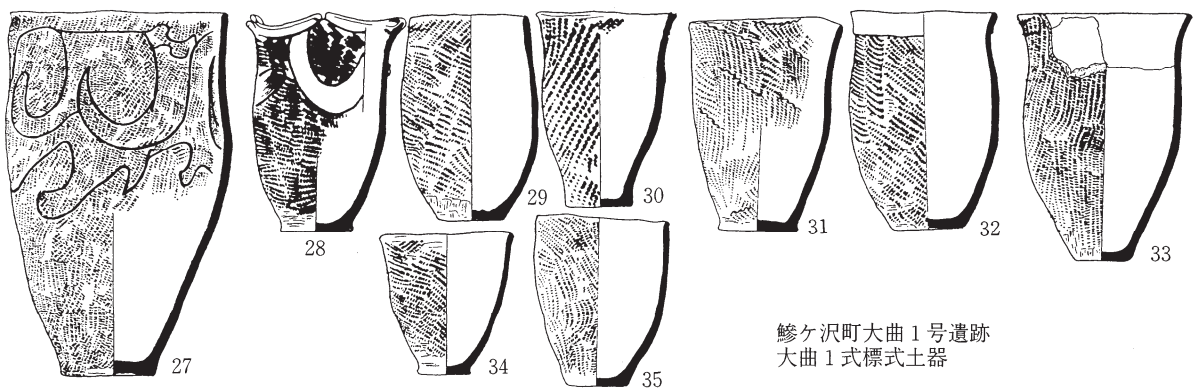
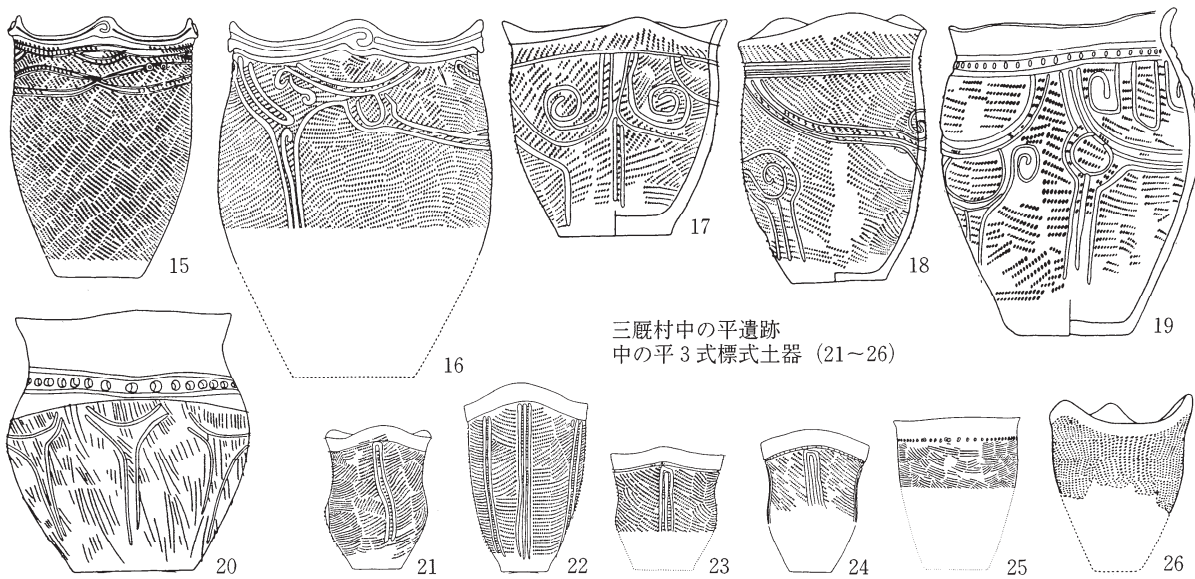
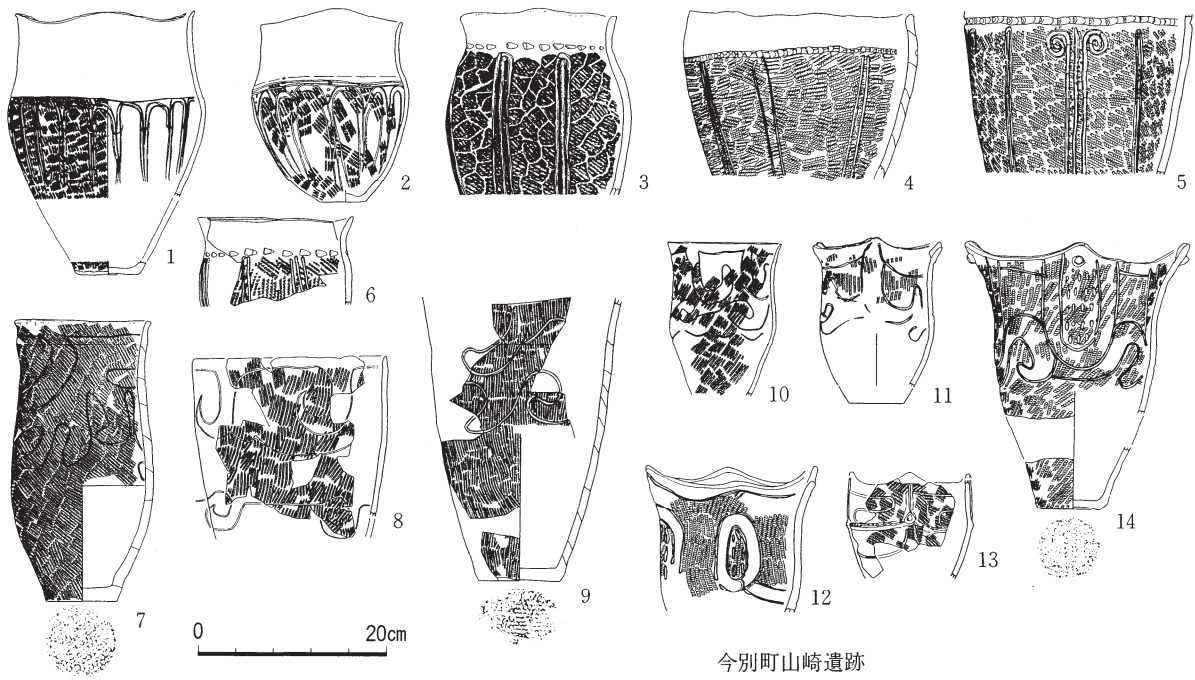
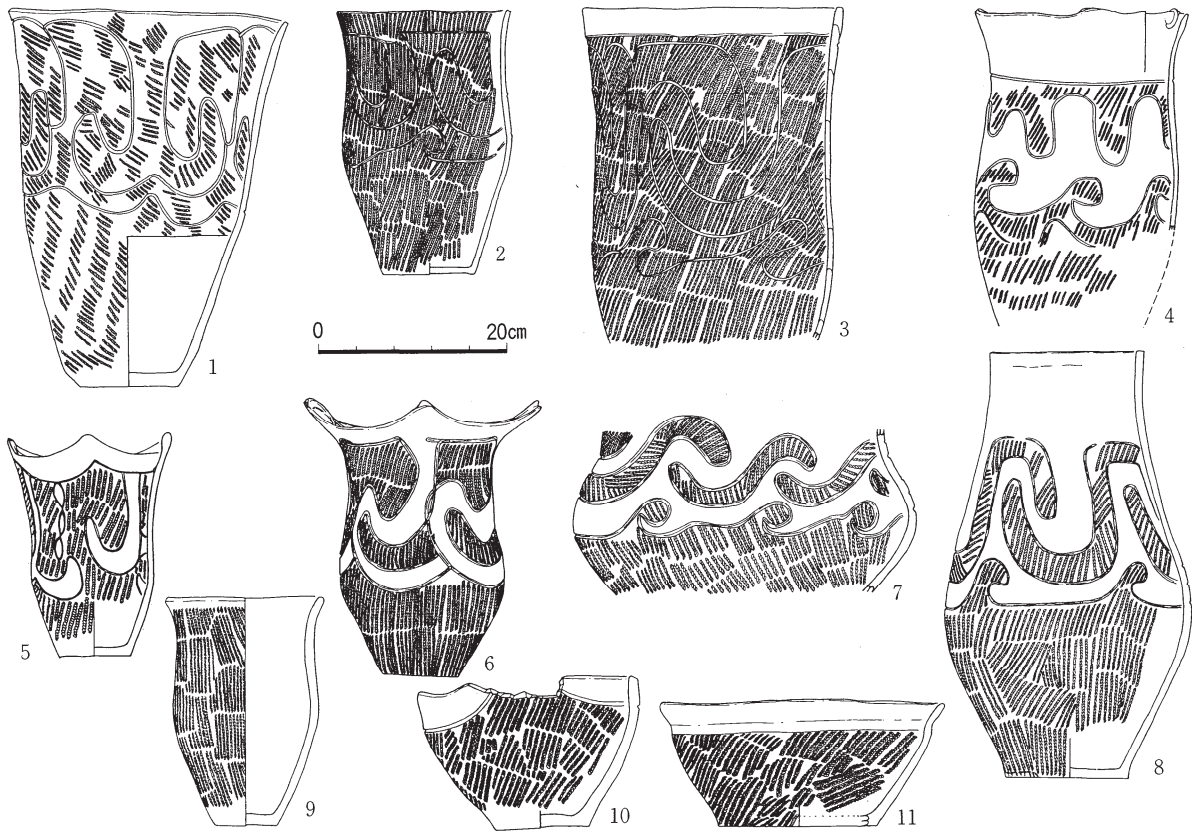
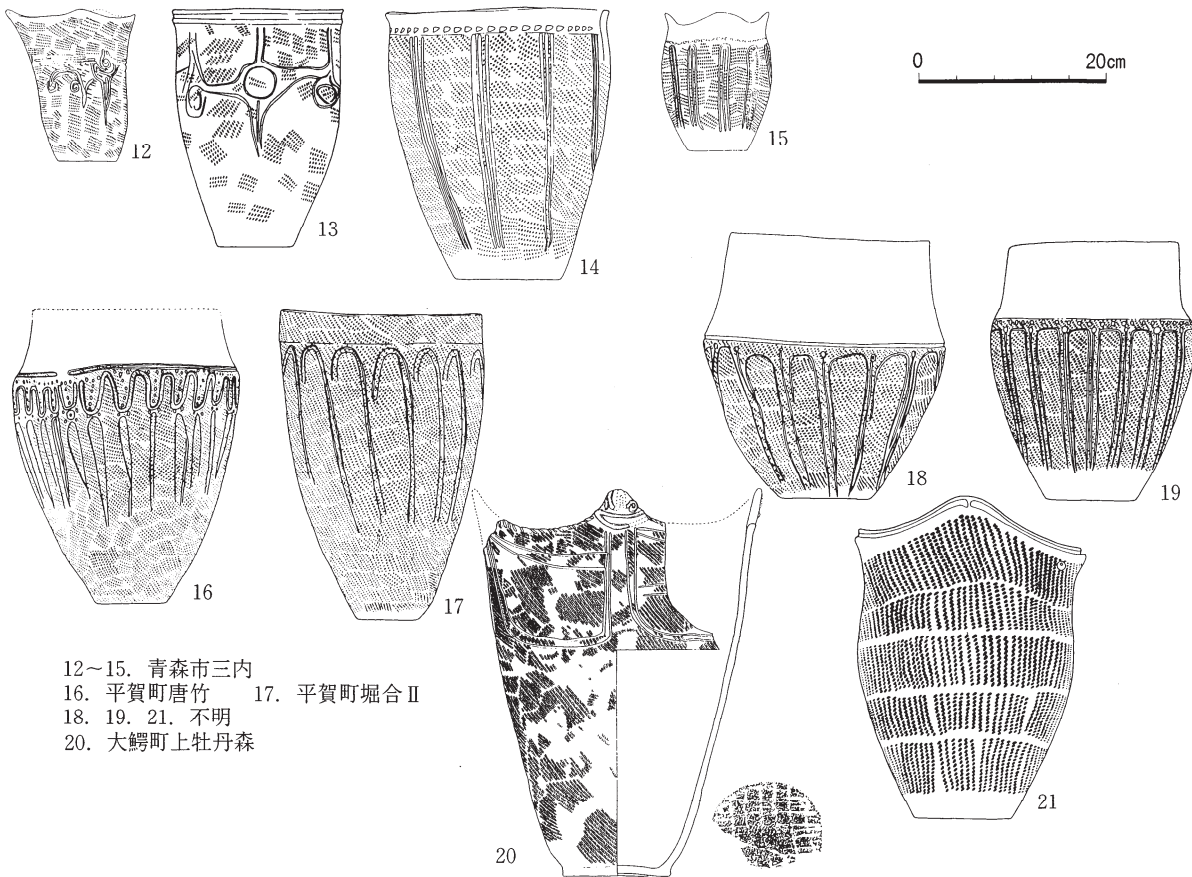


図35 青森県鱒ヶ沢町大曲1号遺跡出土土器



青森県平賀町井沢遺跡出土々器



- 12~15. 青森市三内
- 16. 平賀町唐竹 17. 平賀町堀合Ⅱ
- 18. 19. 21. 不明
- 20. 大鱈町上牡丹森

図36 青森県平賀町井沢遺跡、外出土々器

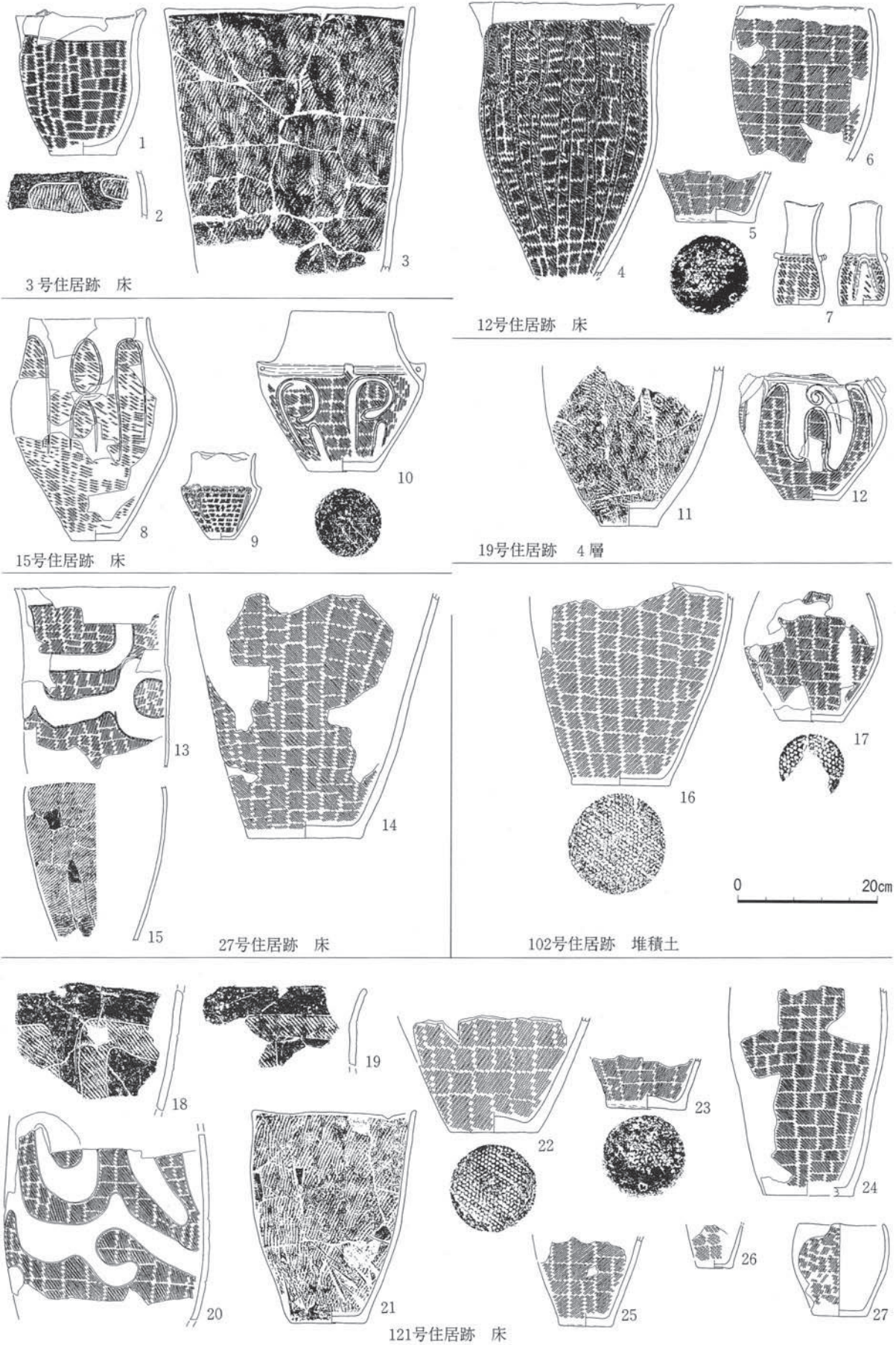


図37 青森県階上町野場5遺跡出土々器 (1. 共伴関係)

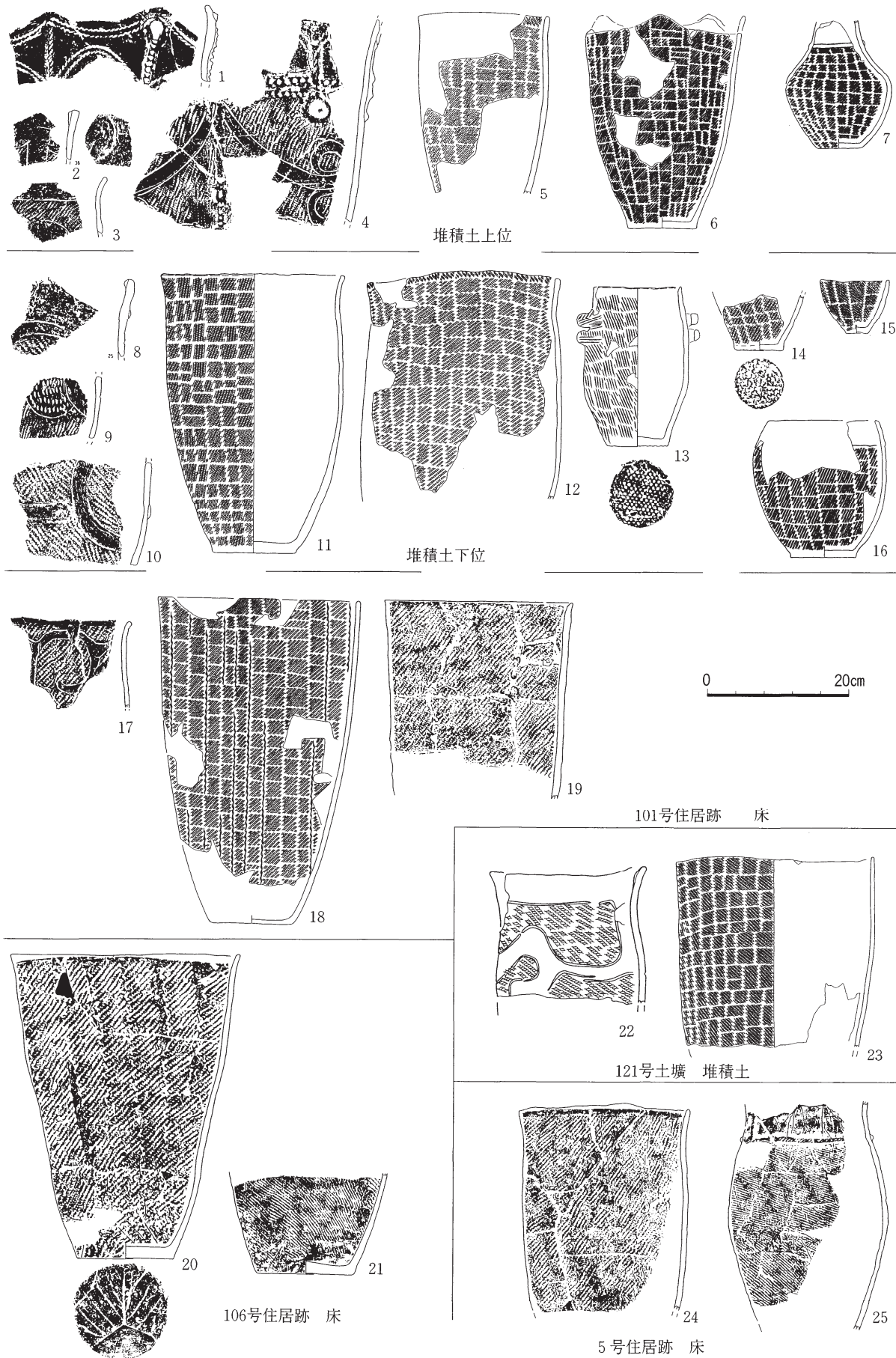
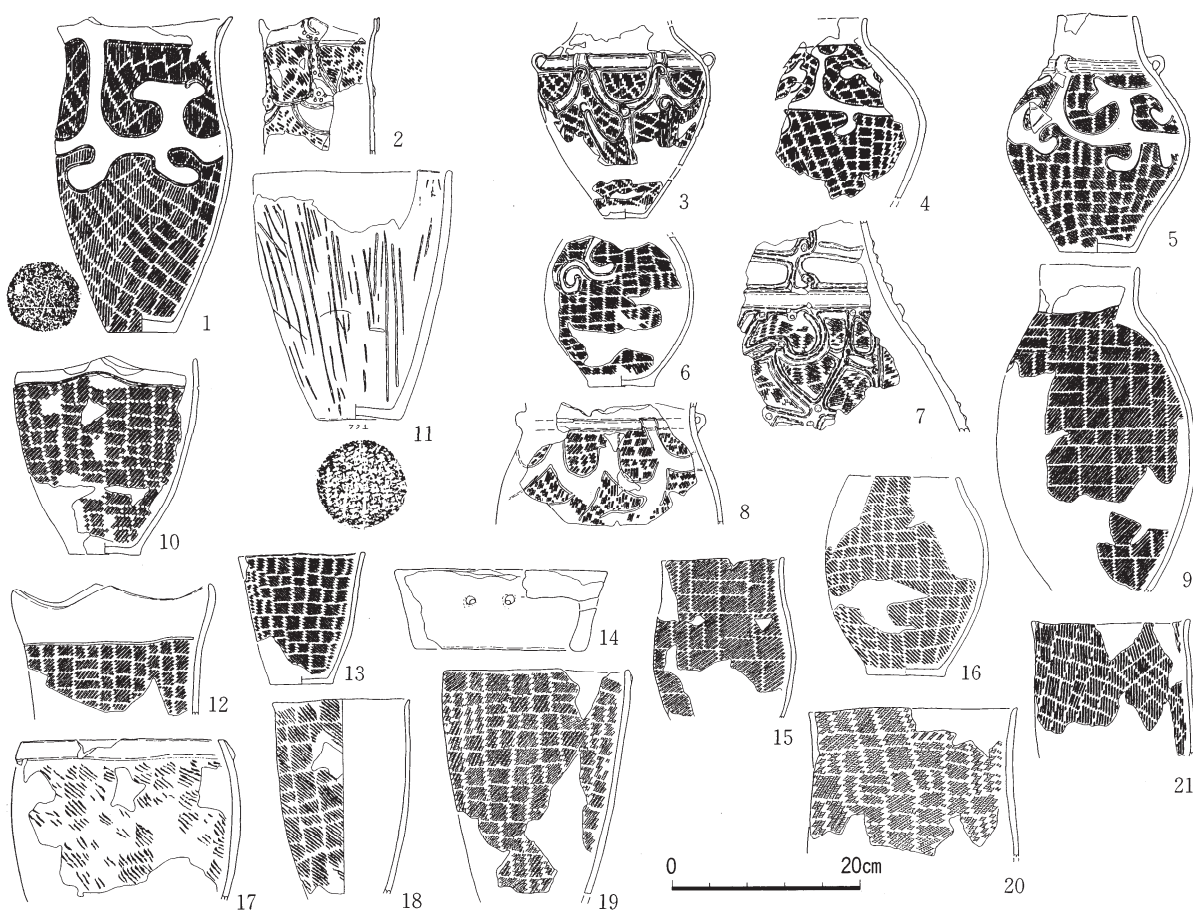


図38 青森県階上町野場5遺跡出土々器（2．共伴関係）



青森県階上町野場5遺跡外出土々器

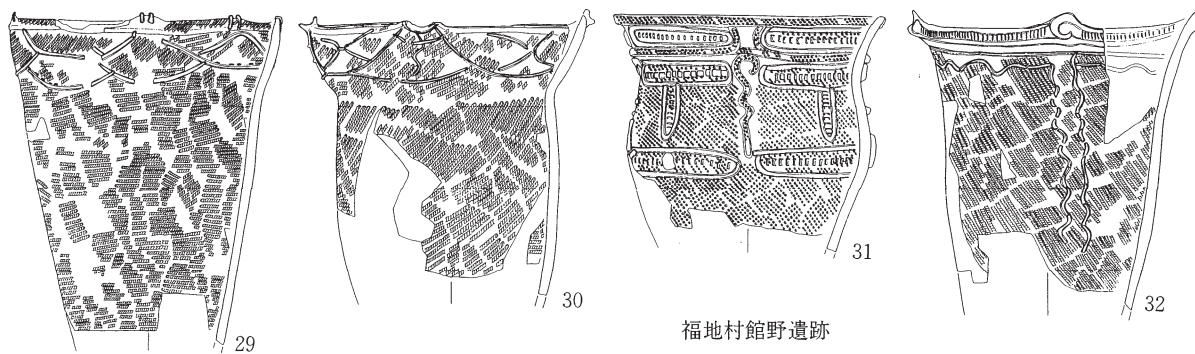
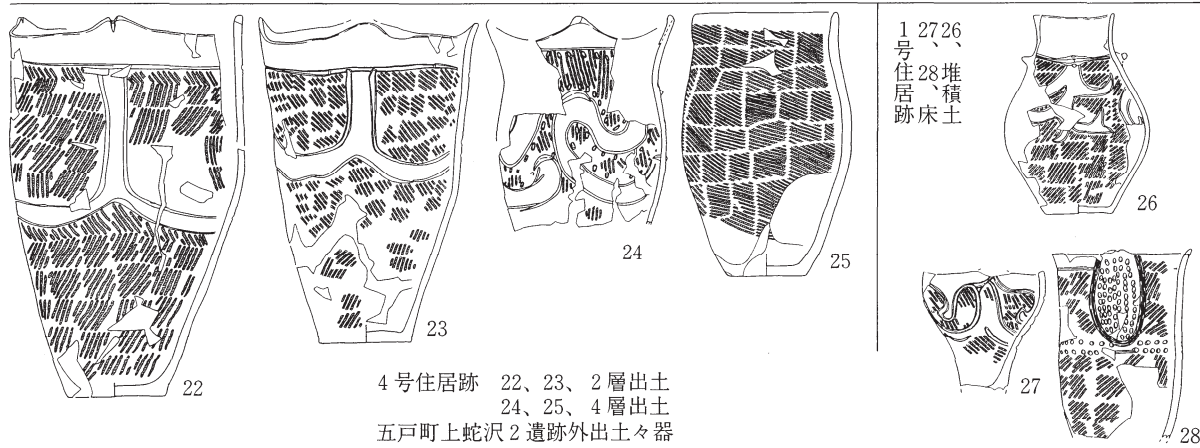


図39 青森県階上町野場5遺跡、外出土々器

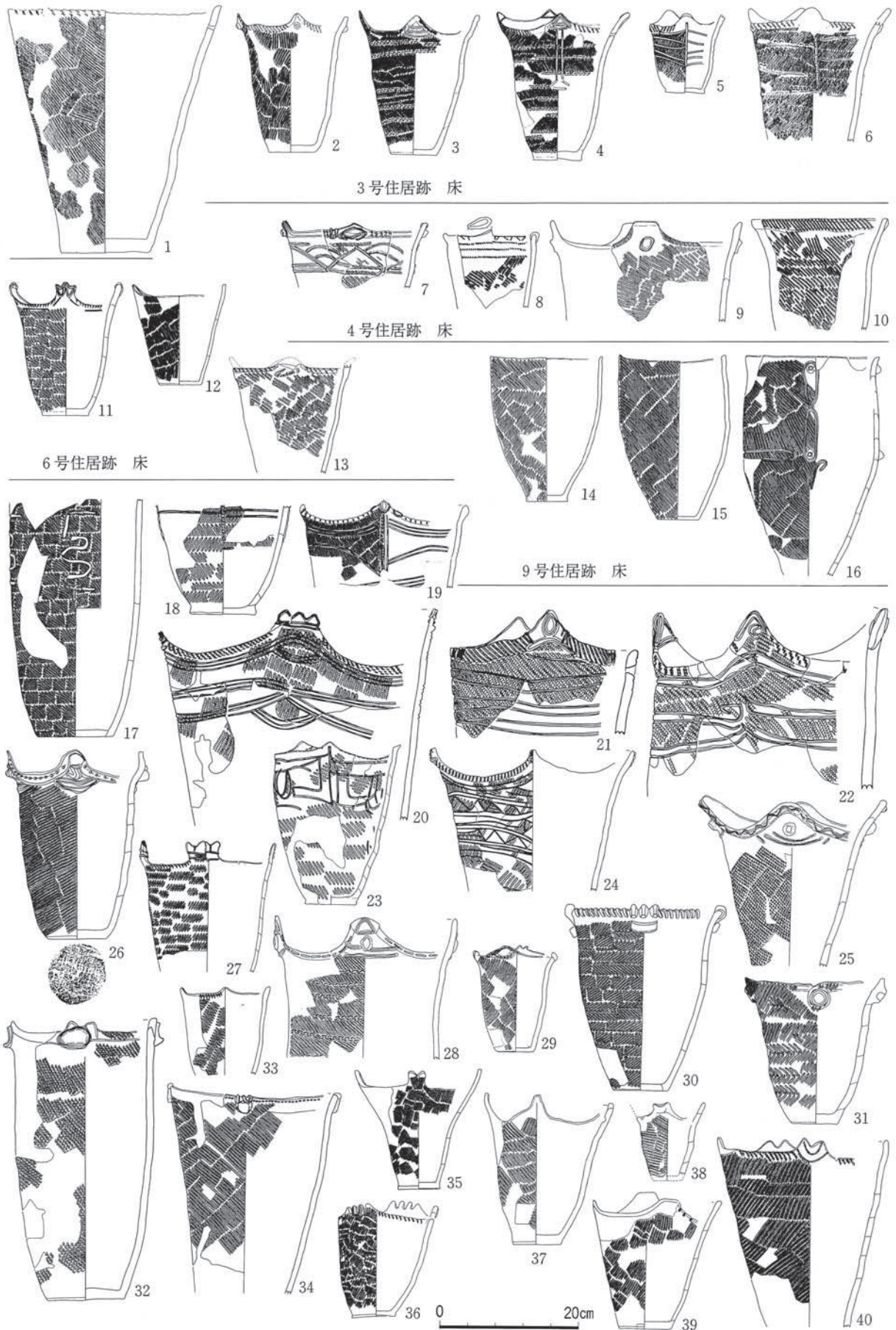
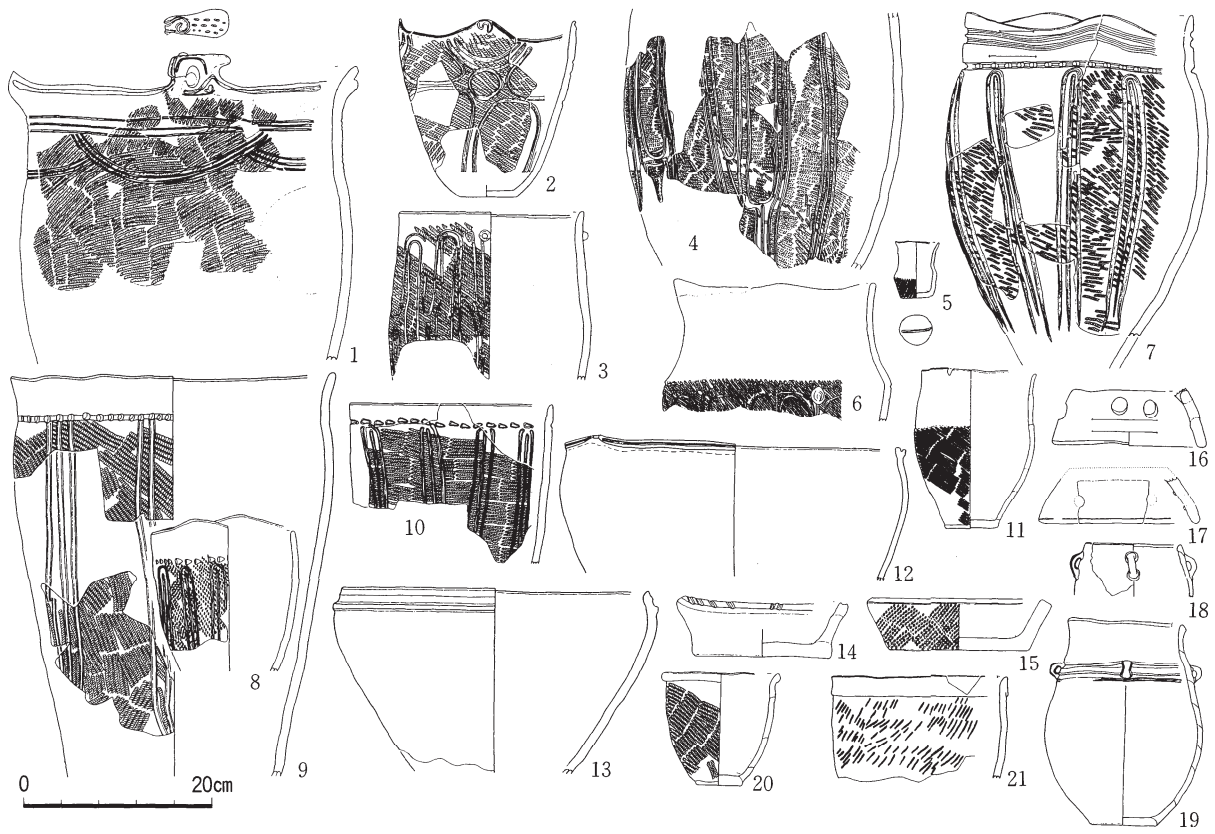


図40 青森市三内沢部遺跡出土土器（1. 共伴関係）



青森市三内沢部遺跡出土々器 (2)

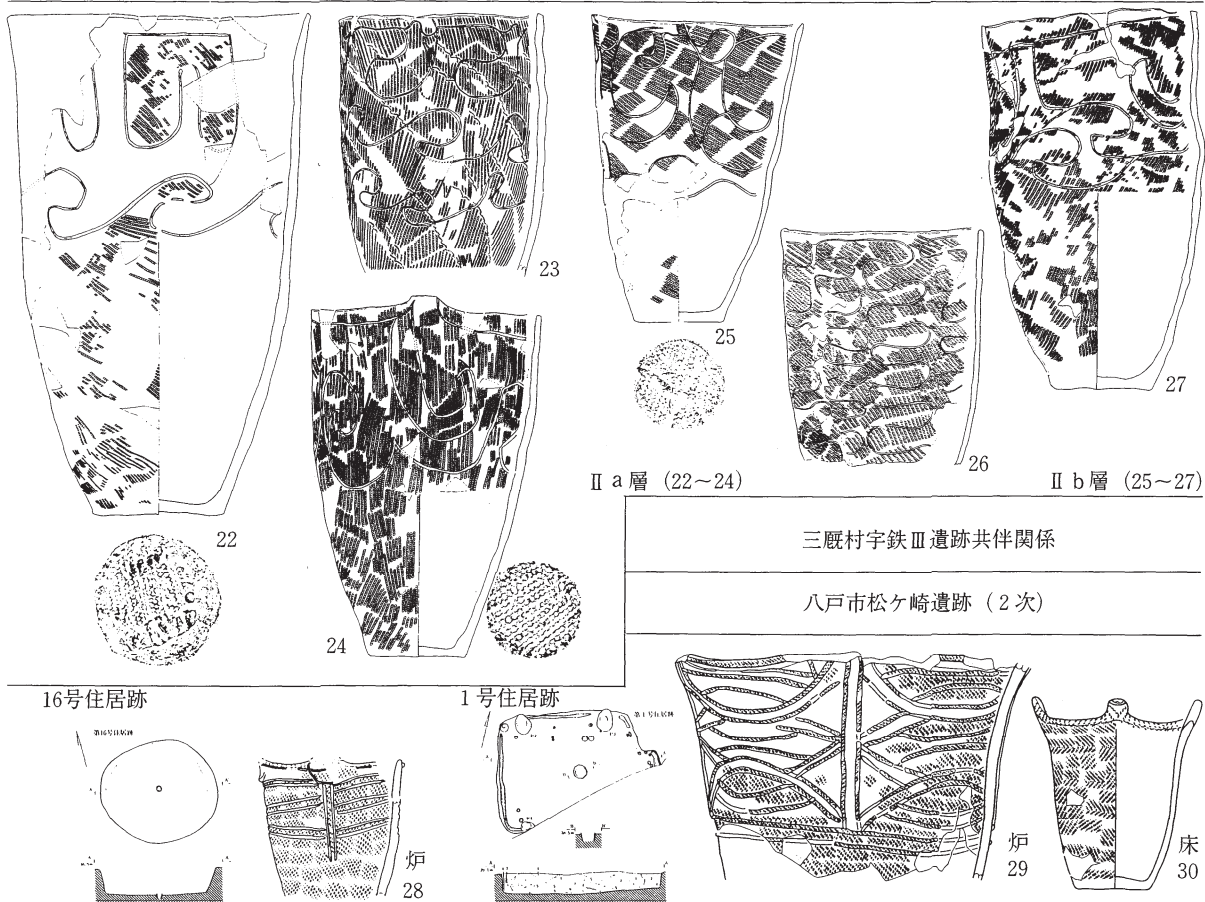


図41 青森県三内沢部、宇鉄Ⅲ、松ヶ崎遺跡出土々器



図42 青森県内諸遺跡出土の中期後半の土器

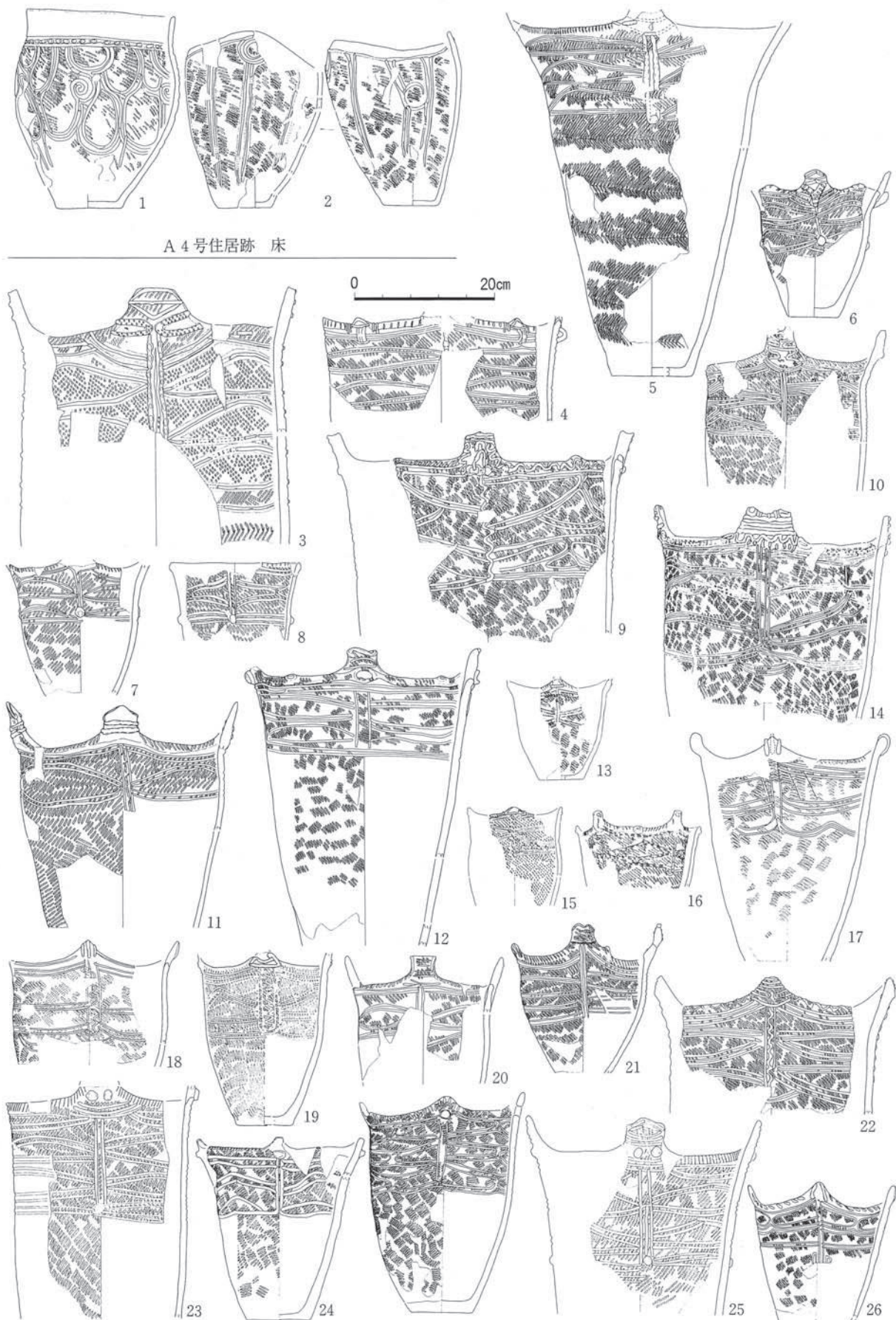


图43 岩手県九戸村田代遺跡出土々器(1)

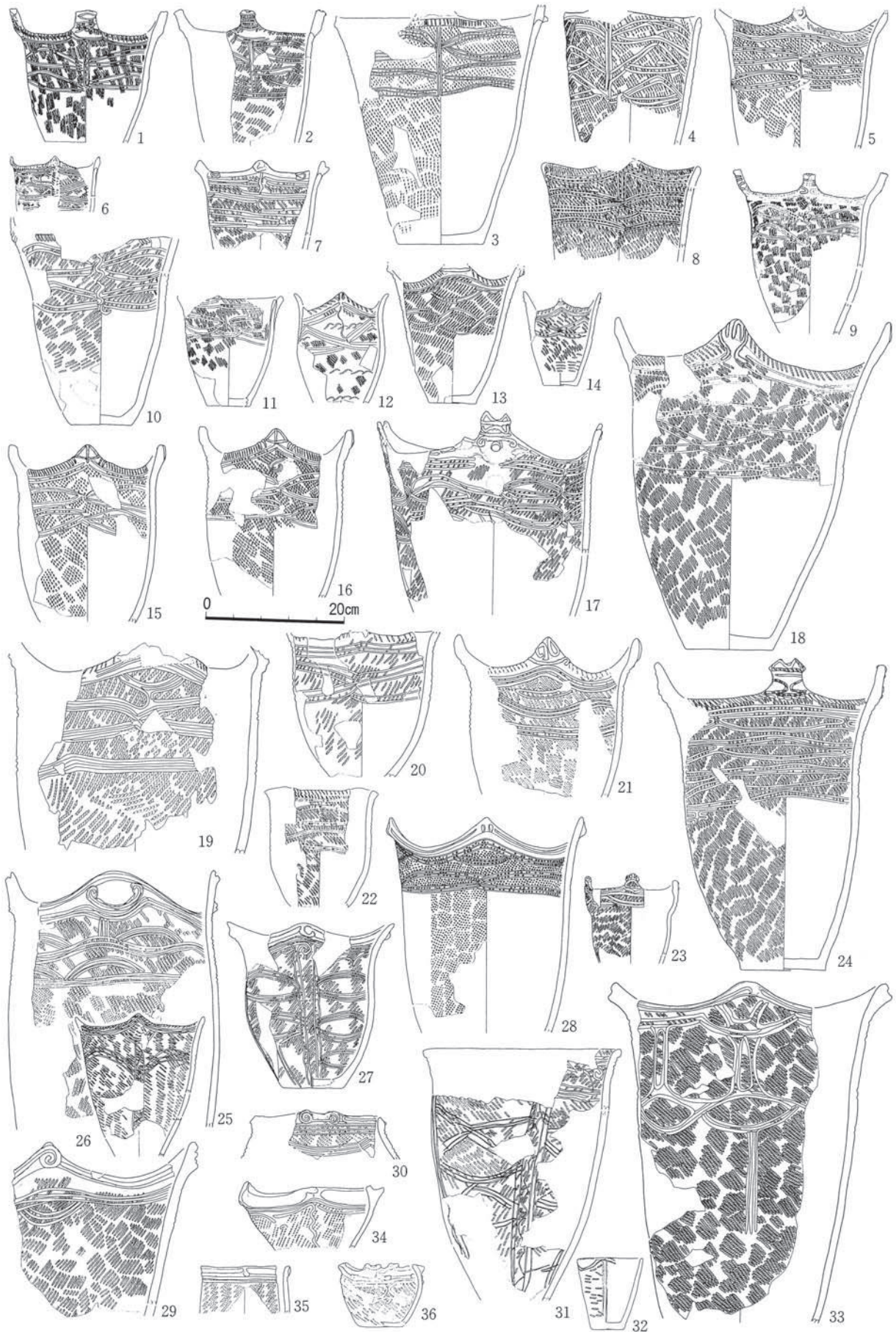


図44 岩手県九戸村田代遺跡出土々器（2）



図45 岩手県九戸村田代遺跡出土々器 (3)

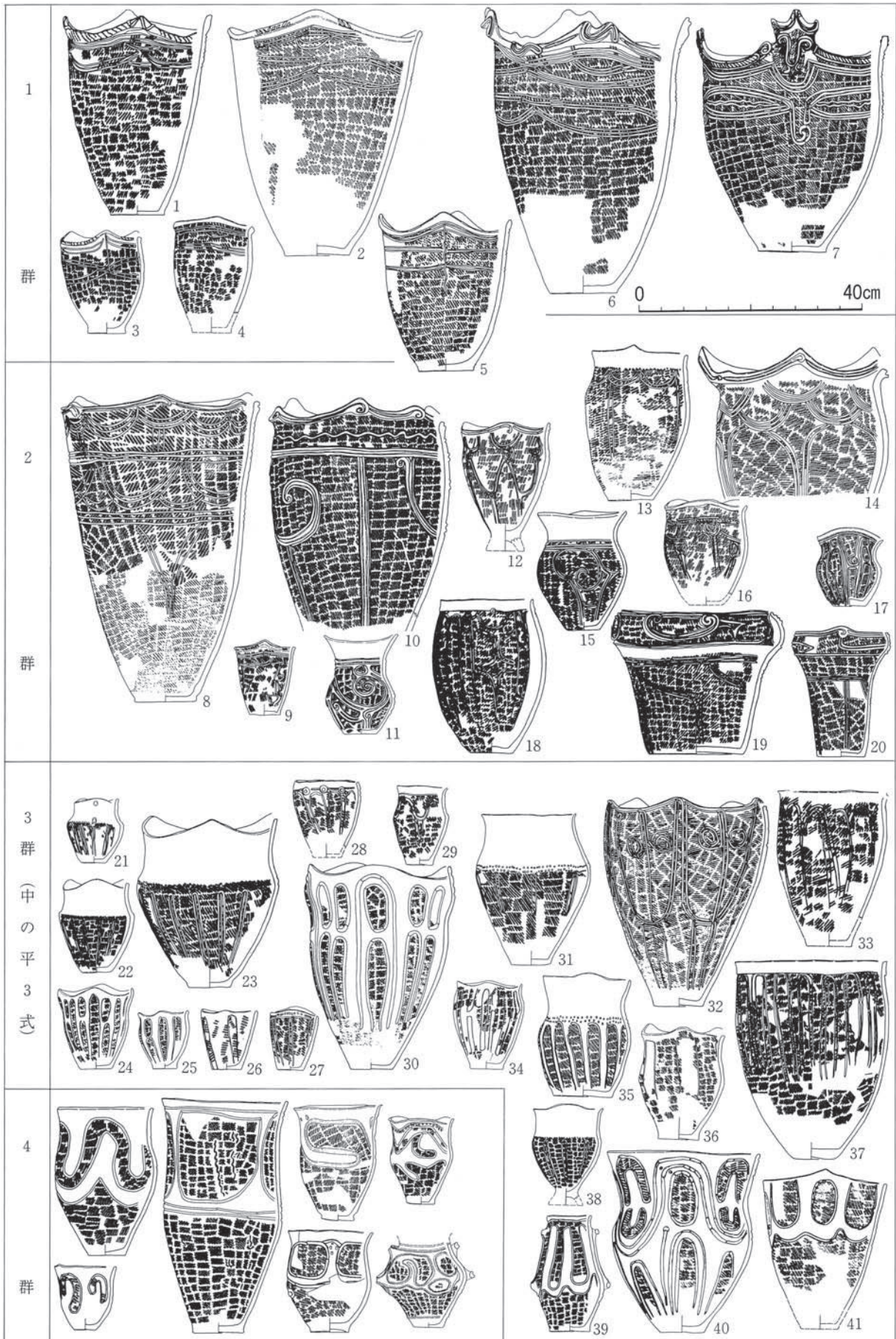


図46 秋田県鹿角市天戸森遺跡出土々器

青森県の縄文早期住居跡集成

中村哲也・坂本真弓

1 はじめに

近年、縄文時代の定住を巡っての論議が多くなされている。縄文時代早期中葉の北海道函館市中野A・中野B遺跡で検出された大集落や縄文時代早期の鹿児島県国分市上野原遺跡で検出された集落跡などの発見例が、定住の論議に火をつけたといえよう。翻って、青森県内での状況を見ると、下田代納谷B遺跡、長七谷地貝塚での早期住居群を初見として以来、縄文時代早期の集落論に深い追究がなされていなかった。県内において該期の資料不足は否めないが、今回、初期定住を考える上での基礎資料として縄文時代早期の住居集成を試みた。(1、3Ⅳ～Ⅶを坂本、それ以外を中村が執筆)

2 時期区分、分類

時期区分 時期は、既に認知されている、又は提唱されている型式をもとに以下のように区分した。

I期 日計式	V期 吹切沢式・鳥木沢式・蛭沢A2式
II期 白浜式・小舟渡平式	VI期 ムシリI式・売場Ⅶ群
III期 根井沼式・寺ノ沢式	VII期 赤御堂式・表館Ⅵ群
IV期 物見台式	VIII期 早稲田Ⅴ類・表館Ⅸ群

上述のⅧ期以降は前期初頭として取り扱うこととした。住居の時期が単一時期に限定できない場合、(例えば"Ⅳ～Ⅴ期")は最も新しい期に含めて考えることとした。対象としたのは、青森県内の住居跡である。住居跡は縄文時代早期～前期初頭までを対象とし、類例のない場合は、他地域のものを示した場合がある。

集成した住居跡は、前期初頭の長七谷地Ⅲ群のものも含めて142棟である。前葉・中葉・後葉・末葉の区分では前葉3、中葉59、後葉～末葉63、前期初頭13、時期不明5である。

分類 集成した住居の属性は表に示す。平面形は報告書の記載ではなく、筆者らの判断による。炉の分類のうち、灰床炉は、基本的に今村啓爾氏の定義(今村1985)によるが、住居跡中央付近に浅めのピットがある場合、灰床炉の可能性のあるものとして扱った。柱穴配置の分類は、本来上屋構造の復元に帰着することが望ましい。そこで、上屋構造が異なるであろうことを意識しつつ、柱穴の規模・配置により分類を行った。その分類は以下の通りである。なお、柱穴の規模は深さ30cm内外かそれ以上を大規模、20cm内外～10cm程度を中規模、10cm内外からそれ以下を小規模とした。

- 1類 柱穴をもたないもの
- 2類
 - a 規模の小さな柱穴が壁際にめぐるもの。
 - b 規模の小さな柱穴が壁際にめぐり、同程度の規模の柱穴が1～数个床面中央付近にあるもの。
 - c 規模の小さな柱穴が床面に1～数基あるもの。
- 3類
 - a 床面に中程度の規模の柱穴が3～数基存在するもの。
 - 1 壁際に小規模な柱穴を有するもの。
 - 2 壁際に小規模な柱穴を有さないもの。
 - b 床面に中程度の規模の柱穴が多数あるもの。
 - 1 壁際に小規模な柱穴を有するもの。
 - 2 壁際に小規模な柱穴を有さないもの。
 - c 中程度の規模の柱穴が床面・壁際に多数あるもの。
 - d 中程度の規模の柱穴が竪穴外または、竪穴壁際にあるもの。

- 4類 床面に柱穴が一直線に並ぶもの
 a 柱穴の規模が大きいもの
 1 壁際に柱穴がめぐるもの 2 壁際に柱穴がめぐらないもの
 b 柱穴の規模が中程度のもの。
 1 壁際に柱穴がめぐるもの 2 壁際に柱穴がめぐらないもの
- 5類 規模の大きな柱穴が方形に配されるもの。4基を基本とするが、中間に1～数基の柱穴が配されるものも含む。
- 6類 規模の大きな柱穴が3列、方形に並ぶもの。
- 7類 規模の大きな柱穴が5基以上、多角形に配置されるもの。
- 8類 規模の大きな柱穴が床面に多数配されるが明確なパターンを抽出できないもの。
- 9類 全形が不明のため、柱穴配置を明らかにできないもの。

3 各時期の概要

I期 3棟検出されている。規模は3m台が2棟、5m台が2棟である。柱穴配置はいずれも2類である。平面形は円形基調と方形基調の両者が認められる。炉は認められない。

II期 29棟検出されている。柱穴配置による分類では1類2棟、2類16棟、(うち、2a類8棟、2b類6棟、2c類1棟)、3a2類1棟、4類6棟、9類3棟である。平面形は円形基調のものと方形基調のものがある。規模は3m台～9m台まで連続し、13m台のものが1棟ある。住居の規模と柱穴配置には相関があると思われる。2類は3～6m台のものがほとんどであるのに対し、4類は5m以上のものがほとんどで、最大のもは13m台である。これは上屋構造の違い(具体的には棟木を持つか、棟木を持たない円錐形または方錐形の伏屋となるか)に起因するものと考えられよう。炉は1棟(幸畑(1)SI05:地床炉)を除けば検出例がない。また、屋外の焼土検出例も見当たらない。

集落構成の視点から見た場合、一集落が同一種類の住居のみで構成される集落(上尾駮(2)、幸畑(1)、表館(1)V)と、複数種類の住居跡で構成される集落(中野平)がある。住居跡間の距離・棟数は、複数棟が20m程度の距離をもって散在する例(西張(2))と、複数棟が近接し重複する例(中野平)がある。前者は2類単独で構成され、後者は2類と4類で構成される。前述のように2類と4類は規模が異なるものと考えられる。住居の規模が居住人数を、重複が居住期間の長さを反映するとすれば、後者は拠点的な集落としてとらえることが可能であろう。2棟程度が近接して認められる例(上尾駮(2)、幸畑(1)、表館(1)V)もあるが、他遺跡では20m程度の距離を持って散在する例(西張(2))があり、調査区外に同時期の住居が存在する可能性を否定できない。また一方で、複数棟が散在する場合、全てが同時に存在したかどうか明らかにできない。2棟程度の集落が重複した姿である可能性も否定できないのである。いずれにしても、拠点的な集落とそうでない集落が認められることは確かであろう。とすれば、拠点的な集落とそうでない集落の関係を如何にとらえるかが問題となる。具体的には、両者とも通年の居住が行われ、集落間で情報や物資の交換が行われたと解釈するのか、拠点的でない集落は季節的な居住が行われ、拠点的な集落からの出小屋的な存在と解釈するのかである。この問題を解決するには、集落構造の分析とともに、動・植物遺体の分析や石器の組成、周辺環境といった生業・環境に関する分析がのぞまれる。

III期 1棟のみ検出されている。全形が分からないため、規模・柱穴配置は不明である。III期の住居跡は、岩手県北部で数棟の確認例がある。二戸市長瀬B遺跡では3棟、小井田III遺跡では2棟が確認されている。小井田III遺跡では柱穴配置1類と5類、長瀬B遺跡では柱穴配置1類、5類、7類により

構成される。長瀬B遺跡SI02は梁・桁をもつ上屋構造が推定されている（宮本1996）。青森県下では、現在の資料では、このような例は早期後葉に出現する。これを地域差としてとらえるか、資料の絶対数の不足による見かけ上の差と考えるかは、今後の資料に待ちたい。

炉は、小井田Ⅲ遺跡2号住居跡で炭分が検出された例があるが、明瞭なものは認められない。

Ⅳ期 6軒検出されている。平面形態では、方形基調4軒（隅丸長方形3軒、隅丸方形1軒）、円形基調2軒（楕円形1軒、円形1軒）である。

柱穴配置による分類では、1類1軒、2類3軒（内、2a類2軒、2b1類1軒）3類2軒（3a2類1軒、3c類1軒）である。住居復元を試みた宮本氏によると、3つの柱穴配置は、柱を斜めに組んだ三脚の構造の可能性が高い。表館（1）遺跡V S I 0 4は、この上屋構造を持つ可能性もある。

規模は、長軸または1辺が3m台のものが2軒、5m台のものが2軒、6m台のものが1軒である。「灰床炉」と考えられる50cmから1.5mの規模を持つ円形のピットが検出されている。

Ⅴ期 4軒検出されている。平面形態は方形基調3軒（隅丸方形3軒）円形基調1軒（不整円形1軒）である。柱穴配置による分類では、1類1軒、2類1軒、3類2軒（3b2類）であり、様々である。規模は、長軸または1辺が5m台のものが3軒である。Ⅳ期に比べるとやや大型化する。また、下田代納屋遺跡の3軒の住居跡周辺では4基の屋外炉が検出されている。この遺跡が一時期のみの集落であったことを考えると、該期の屋外炉であったと推定されるが断定はできない。このほかに3軒の住居中央に「灰床炉」と考えられる方形ピットが検出されている。屋外炉・灰床炉が同時に機能していた可能性が高い。

Ⅳ期からⅤ期にかけての住居は岩手県北部の岩手県馬立Ⅰ遺跡で13軒の確認例がある。柱穴配列は1類、2類、3類で構成される。規模は3m台が多く、5m台もみられる。また、ほとんどの住居が内部に地床炉を持つ。青森県下で「灰床炉」に変わって地床炉が大部分を占めるのは早期後葉であり、時期が他地域と若干開きがある。

Ⅵ期 15軒検出されている。平面形態は円形基調12軒（楕円形5軒、円形7軒）、方形基調3軒（隅丸方形3軒）である。平面形態が方形から円形へと変化する。柱穴配列による分類は1類5軒、2類6軒（2a類4軒、2b類2軒）、3類1軒（3a1類）、8類1軒である。

規模は、長軸または1辺が2m台のものが5軒、3m～5m台のものが9軒、6m台のものが1軒である。炉形態は地床炉を持つもの4軒、灰床炉を持つものが1軒である。Ⅴ期に比べて地床炉の割合が灰床炉の割合よりも高い。

Ⅶ期 30軒検出されている。平面形態は円形基調23軒（楕円形18軒、円形5軒）、方形基調6軒（方形3軒、長方形2軒、隅丸長方形1軒）である。ほとんどが円形基調の住居跡である。

柱穴配置による分類は1類4軒、2類3軒（2a類2軒、2b類1軒）、3類9軒（3a1類3軒、3a2類1軒、3b2類4軒、3c類1軒）、4類3軒（4a2類1軒、4b2類1軒）、5類2軒、7類2軒、8類2軒、9類4軒である。規模は、長軸または1辺が7m以上ものが10軒で、10mを越えるものもある。7m未満のものは19軒である。この時期になると、梁と桁を渡す上屋構造を持つ5類が出現し、住居の規模も7m以上の住居の大型の住居とそれ以外の住居に分かれるようである。この時期が住居形態変化の一画期といえよう。

Ⅷ期 27棟検出されている。柱穴配置による内訳は1類7棟、2a類6棟、3a類3棟（3a1類2棟、3a2類1棟）、4類1棟、5類6棟、7類2棟、8類1棟、9類4棟である。住居の規模と柱穴配置の組み合わせは、2・3類のほとんどが5m台であり、5～8類が6m台以上である。このことから上屋構造と規模の相関がうかが

える。平面形は円形基調・方形基調ともに認められる。明瞭な地床炉を持つ例は3例ある。また、灰床炉を持つものが1棟ある。住居の規模と炉の有無に相関は認め難い。

前期初頭 2a類1棟、3類3棟(3a2類1棟、3b1類1棟、3c類1棟)、4類1棟、6類1棟、7類2棟、9類5棟である。平面形は方形基調、円形基調のものに認められ、明瞭な炉を有する例は検出されていない。

4 まとめ

住居の規模は、遅くともⅡ期には一般の住宅とくらべて飛び抜けて大きいものが出現し、複数の柱穴配置のものが見られるようになる。Ⅰ期の住居は現在検出例が少ないため、大型の住居が存在するか否か不明だが、大型住居の萌芽はⅠ期に認められる可能性もある。ⅥないしⅦ期には梁と桁を渡す上屋構造を持つと考えられるもの(柱穴配置5～8類)が出現する。柱穴配置において、新たなタイプが古いタイプを駆逐するという現象は見られない。新出のタイプをつけ加えながら、複数のタイプが集落を構成するようだ。複数タイプの同時併存という現象は、タイプ毎に機能あるいは文化的コンテキストが異なることを意味しよう。

炉はⅠ～Ⅲ期には明瞭な検出例はほとんどない。また、屋外の焼土検出例も知られていない。一方、焼礫の記述がある例がある。Ⅳ期には灰床炉が出現し、Ⅵ期以降地床炉が増加するようである。Ⅷ期には屋内炉の検出例は減少する。一方、ファイア・ピットなどと称されるもので、時期が限定できるものはⅧ期を中心とし、屋内炉の現象と関連する可能性がある。また、屋外焼土は時期を特定できるものはないが、早期後半からの遺跡に多いようだ。

引用・参考文献 (表の「文献番号」に対応する。)

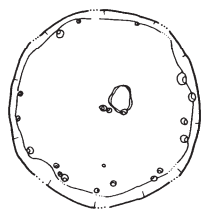
- 1 青森県教育委員会 1994 家ノ前遺跡Ⅱ・鷹架遺跡Ⅱ発掘調査報告書
- 2 青森県教育委員会 1980 桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書
- 3 八戸市教育委員会 1990 見立山(2)遺跡
- 4 青森県教育委員会 1998 幸畑(1)・(5)遺跡
- 5 三沢市教育委員会 1987 根井沼(1)遺跡発掘調査報告書Ⅲ
- 6 八戸市教育委員会 1983 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅳ
- 7 八戸市教育委員会 1983 史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ
- 8 青森県郷土館 1976 小田野沢 下田代納屋B遺跡発掘調査報告書
- 9 青森県教育委員会 1987 上尾駸(2)遺跡Ⅱ
- 10 青森県教育委員会 1981 新納屋遺跡(2)発掘調査報告書
- 11 青森県教育委員会 1998 西張(2)遺跡
- 12 八戸市教育委員会 1989 赤御堂遺跡
- 13 八戸市教育委員会 1986 丹後谷地遺跡発掘調査報告書
- 14 青森県教育委員会 1991 中野平遺跡
- 15 八戸市教育委員会 1982 長七谷地遺跡発掘調査報告書 長七谷地2・7・8号遺跡
- 16 青森県教育委員会 1985 長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書
- 17 青森県教育委員会 1985 売場遺跡発掘調査報告書
- 18 青森県教育委員会 1989 表館(1)遺跡Ⅲ
- 19 青森県教育委員会 1990 表館(1)遺跡Ⅳ・発茶沢(1)遺跡Ⅴ発掘調査報告書
- 20 青森県教育委員会 1990 表館(1)遺跡Ⅴ
- 21 青森県教育委員会 1991 弥栄平(6)・弥栄平(7)・弥栄平(8)遺跡
- 22 青森県教育委員会 1984 和野前山遺跡発掘調査報告書
- 23 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- 24 今村啓爾 1985 「縄文早期の堅穴住居址にみられる方形の掘り込みについて」『古代』第80号
- 25 岩手県埋蔵文化財調査センター 1985 『小井田Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 26 岩手県埋蔵文化財調査センター 1982 『二戸市長瀬B遺跡』
- 27 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988 『馬立Ⅰ・太田遺跡発掘調査報告書』

表 青森県内縄文早期住居跡一覧表

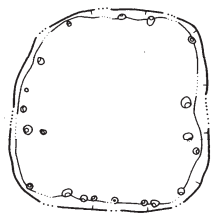
番号	遺構名	分類	時期分類	平面形態	規模(m)	床面積(㎡)	炉	備考	文献番号
1	長七谷地8号SI05A	8		楕円形	7.2×5.7				15
2	長七谷地8号SI05C	8		楕円形?	4.6×-				15
3	長七谷地8号SI05D	8			6.3×-				15
4	売場SI204	1	≦VI	不整形	4.2×3.6		無		17
5	表館(1)ⅢSI116	1	≦VI	隅丸方形	4.0×3.1		無		18
6	売場SI209	2a	≦VI	楕円形	2.4×2.1		無		17
7	売場SI208	3a1	≦VI	円形	3.0×-		無		17
8	赤御堂SI12	8	≦VI	隅丸方形	6.65×-		無		12
9	長七谷地2号SI04	3b2	≦VII	楕円形	6.18×5		地床炉		15
10	長七谷地2号SI05	3b2	≦VII	楕円形	6.2×4.8	20.56	地床炉	地床炉2	15
11	長七谷地2号SI06	4b2	≦VII	楕円形	3.9×2.6	7.69	地床炉		15
12	長七谷地2号SI02	9	≦IV	楕円形	8.9×?		無		15
13	売場SI311	2a	≦VIII	隅丸方形	(4.15)×(3.90)		無		17
14	売場SI207	2b	≦VIII	隅丸長方形	3.5×2.6		無		17
15	長七谷地(1次)SI04	2a	≦前期初頭	楕円形	4.4×3.6	10.2			16
16	長七谷地(2次)SI05	3c	≦前期初頭	楕円形	5.36×4.58	14.76	無		16
17	長七谷地(1次)SI05	5	≦前期初頭	円形	4.8				16
18	長七谷地(1次)SI01	7	≦前期初頭	隅丸長方形	9×7.2	30.7			16
19	長七谷地(1次)SI02	7	≦前期初頭	方形	4.2		無		16
20	長七谷地(1次)SI06	7	≦前期初頭	円形	5.2×4.4		無		16
21	長七谷地(1次)SI03	9	≦前期初頭	?	?				16
22	売場SI08	9	≦前期初頭	不明	-				17
23	見立山(2)SI02	2a	I	隅丸方形	3.22×3.15		無		3
24	売場SI404	2b	I	楕円形	5.30×4.70		無		17
25	見立山(2)SI01	2b	I	円形	3.15×3.05		無		3
26	中野平SI110	1	II	隅丸長方形	6.9×4.8	28.1	無		14
27	上尾駱(2)ⅡCJ-65	1	II	楕円形	6.2×4.5		無		9
28	長七谷地8号SI01	2a	II	楕円形	4.05×3.25	18.8	無		15
29	中野平SI108	2a	II	隅丸方形	3.0×2.2	5.08	無		14
30	表館(1)V SI06	2a	II	隅丸長方形?	4.32×3.20	9.92	無		20
31	西張(2)SI01	2a	II	隅丸方形	3.34×3.50	6.3	無		11
32	西張(2)SI02	2a	II	楕円形	3.86×3.26	8.3	無		11
33	西張(2)SI03	2a	II	楕円形	(4.90)×(4.54)	10.8	無		11
34	西張(2)SI05	2a	II	楕円形	3.30×2.07	4.7	無		11
35	西張(2)SI07	2a	II	隅丸方形	5.2	13.1	無		11
36	表館(1)V SI05	2a	II	隅丸長方形?	4.90×4.30	18.35	無		20
37	中野平SI112	2b	II	隅丸長方形	4.0×2.2	7.15	無		14
38	幸畑(1)SI04	2b	II	楕円形	4.1×2.5		無		4
39	幸畑(1)SI05	2b	II	隅丸方形	3.62×2.72		地床炉		4
40	西張(2)SI06	2b	II	長方形+半円形	6.64×6.3	23.3	無		11
41	中野平SI107	2c	II	不整形	4.2×4.0	11.98	無		14
42	根城跡SI53	3a2	II	楕円形?	5.45×-		無		6
43	中野平SI102	4a1	II	楕円形	8.5×5.5	36.49	無		14
44	中野平SI104	4a1	II	隅丸長方形	5.4×4.4	18.64	無	短軸上2本	14
45	中野平SI101	4a2	II	方形	5.90×4.10	22.44	無		14
46	中野平SI103B	4a2	II	隅丸長方形	4.7×3.8	19.1	無		14
47	中野平SI106	4a2	II	不整形	6.1×5.0	22.47	無		14
48	中野平SI105	4a2	II	隅丸長方形	13.50×4.5	48.09	無		14
49	中野平SI103A	9	II	隅丸長方形	7.5×4.0		無		14
50	中野平SI109	9	II	不明	9.0×-				14
51	根井沼(1)SI01	9	II	不明					5
52	上尾駱(2)(3)CJ-66	1	早期中葉	楕円形?	6.0×5.0	17	無	II期の可能性	9
53	根城跡SI54	2?	早期中葉	隅丸方形	7.76×-				6
54	売場SI315	2a	早期中葉	不整形隅丸方形	3.82×3.34		無		17
55	根城跡SI67	2b	早期中葉	隅丸方形	3.84×2.90		無		7
56	新納屋(2)SI02	3a2	早期中葉	楕円形	4.5×3.5	11.5	無	楕円形ピット	10
57	根城跡SI66	3b1?	早期中葉	隅丸方形	6.23×-		無		7
58	丹後谷地SI43	3b2	早期中葉	楕円形	3.85×3.0		無		13
59	長七谷地1号(試掘)	3b2	早期中葉	楕円形	5×2.75		灰床炉		2
60	赤御堂SI07	3a2	早期中~後葉	隅丸方形	4.6×4.0		地床炉		12
61	根井沼(1)SI02	9	III	不整形	2.27×-				5
62	弥栄平(7)SI01	1	IV	隅丸長方形	5.33×4.50		灰床炉	溝状の施設	21
63	表館(1)V SI02	2a	IV	隅丸長方形	5.90×4.40	20.6	灰床炉	テラス	20
64	鷹架遺跡H5試掘SI01	2a	IV	円形	3.84×3.69		灰床炉		1
65	表館(1)V SI01	2b1	IV	隅丸長方形	3.32×2.82	7.35	無		20
66	表館(1)V SI04	3a2	IV	楕円形	6.0×4.64	18.35	灰床炉		20
67	売場SI202	3c	IV	隅丸方形?	-		無		17
68	下田代納屋BSI02	1	V	隅丸方形	5.65×5.20		灰床炉		8
69	下田代納屋BSI03B	2b	V	隅丸方形	5.8×5.1		灰床炉		8
70	下田代納屋BSI01	3b2	V	隅丸方形	5.7×5.0		灰床炉		8

番号	遺構名	分類	時期分類	平面形態	規模(m)	床面積(㎡)	炉	備考	文献番号
71	新納屋(2)SI03	3b2	V	不整円形	不明		地床炉		10
72	売場SI201	1	VI	楕円形	5.1×4.2		無		17
73	売場SI307B	1	VI	円形?	4.5		無		17
74	表館(1)ⅢSI102	1	VI	楕円形	2.75×2.5		地床炉		18
75	売場SI310	2a	VI	円形?	5.80×5.20		無		17
76	売場SI312	2a	VI	円形?	(5.20)		灰床炉		17
77	売場SI316	2a	VI	隅丸方形	2.70×2.80		無		17
78	売場SI203	2b	VI	円形	4.2		無		17
79	売場SI206	2b	VI	円形	3.6×-		無		17
80	売場SI15	9	VI	不整楕円形	2.6×2.0		地床炉		17
81	赤御堂SI13	9	VI~VII	隅丸方形	5×-		無		12
82	表館(1)ⅢSI103	3d	VII≦	楕円形	2.5×1.5		地床炉	地床炉2	18
83	表館(1)ⅣSI302	5	VII	長方形?	9.96×4.38	33.08	地床炉	地床炉2	19
84	表館(1)ⅢSI106	1	VII	楕円形	3.18×2.91		地床炉		18
85	表館(1)ⅢSI115	1	VII	楕円形	3.3×2.5	5.82	地床炉		18
86	表館(1)ⅢSI117	1	VII	長方形	3.5×2.4	6.03	無		18
87	表館(1)ⅢSI301	1	VII	隅丸方形	7.5×8.0	50.71	地床炉	地床炉4	18
88	長七谷地2号SI03	2a	VII	楕円形	3.8×3.2	10.1	無		15
89	売場SI313	2a	VII	不整円形	5.20×4.70		無		17
90	売場SI11	2b	VII	円形	3.7×-		無		17
91	長七谷地2号SI08	3a1	VII	不整円形	4.4×3.9	13.49	地床炉		15
92	長七谷地2号SI11	3a1	VII	楕円形	3.2~3.3		無		15
93	表館(1)ⅢSI119	3a1	VII	楕円形	4.2×3.3	11.8	地床炉	地床炉2	18
94	長七谷地2号SI10	3a2	VII	不整楕円形	6.70×4.40	11.38	地床炉	地床炉2	15
95	長七谷地2号SI07	3b2	VII	不整楕円形	4.6×3.7	12.66	地床炉		15
96	表館(1)ⅢSI101	3b2	VII	不整円形	4		地床炉		18
97	売場SI04	3c	VII	楕円形	7.0×5.0				17
98	表館(1)ⅣSI303	4	VII	隅丸長方形	7.8×5.14	34.25	地床炉		19
99	長七谷地2号SI09	4a2	VII	楕円形	7.7×3.6		地床炉	地床炉2	15
100	長七谷地2号SI13	5	VII	不整楕円形	7.1×4.5	23.61	無	張出部	15
101	表館(1)ⅢSI118	5	VII	隅丸方形	3.52×3.30	9.4	無		18
102	長七谷地2号SI12	7	VII	楕円形	10.4×8.3	61.07	地床炉	地床炉3	15
103	表館(1)ⅢSI113	7	VII	楕円形	3.7×2.8			特殊施設	18
104	長七谷地2号SI01	8	VII	円形	7.4×6.9	36.56	無		15
105	長七谷地2号SI14	8	VII	楕円形	10.7×8.2		無		15
106	売場SI10	9	VII	円形	4.2×4.0				17
107	売場SI13	9	VII	楕円形	2.7×-				17
108	赤御堂SI09	9	VII~VIII	隅丸方形	-×3.8				12
109	長七谷地8号SI03	2a	VIII	不整円形	3×-		地床炉		15
110	売場SI307A	1	VIII	円形?	4.3		無		17
111	和野前山SI07	1	VIII	不整円形	3.5		無		22
112	表館(1)ⅢSI112	1	VIII	楕円形	3.0×2.55		無		18
113	表館(1)ⅢSI111	1	VIII	不整円形	3.5×2.9		無		18
114	表館(1)ⅢSI123	1	VIII	隅丸方形	2.30×2.0		無		18
115	表館(1)ⅢSI109	1	VIII	不整円形	4.2×-		地床炉		18
116	長七谷地8号SI04	2a	VIII	隅丸方形	4.4×4		無		15
117	売場SI309	2a	VIII	不整円形	2.84×2.32		無		17
118	売場SI314	2a	VIII	隅丸方形	(6.0)×4.85		無		17
119	長七谷地8号SI02	3a1	VIII	不整円形	5.4×4.95	18.8	無		15
120	表館(1)ⅢSI110	3a1	VIII	不整円形	3.9×3.4		無		18
121	売場SI317	3a2	VIII	楕円形	2.90×2.60		無		17
122	和野前山SI05	4b2	VIII	楕円形	7.0×5.70		無		22
123	長七谷地(2次)SI02・03	5	VIII	不整円形	6.2×5.6		無	SI03と同一の住居	15
124	和野前山SI08	5	VIII	隅丸方形	6.7×5.4		灰床炉	テラス	22
125	新納屋(2)SI01	5	VIII	隅丸方形	4.5×4.3	15.2	無		10
126	表館(1)ⅢSI108	7	VIII	隅丸長方形	9.7×7.4		無		22
127	長七谷地8号SI05B	8	VIII	楕円形	11.7×7.3				18
128	売場SI308	9	VIII	楕円形	11×7.60				17
129	和野前山SI06	9	VIII	円形?	3.6				22
130	表館(1)ⅢSI107	9	VIII	楕円形?	5.7×-				18
131	表館(1)ⅢSI121	9	VIII	長円形?	(7.0)×(3.0)		地床炉	地床炉2	18
132	和野前山SI09	5	VIII?	隅丸方形	6.80×7.30		無		22
133	売場SI06	9	VIII~前期初	不整円形	3.6×3.6				17
134	長七谷地(2次)SI01	3a2	VIII~前期初頭	楕円形	3.32×2.68		無		16
135	長七谷地(2次)SI04	4b1	VIII~長七谷地Ⅲ群	不整円形	6.94×5.2		無		16
136	売場SI205	6	VII~長七谷地Ⅲ群	隅丸長方形	8.5×5.6		無		17
137	長七谷地(2次)SI07	3b1	早期	円形	4.8×4.32				16
138	長七谷地7号竪穴状遺構	3b2	早期	楕円形	3.15×2.02		無		15
139	長七谷地(2次)SI06	3b1	早期末~前期初頭	楕円形	4.88×4.32				16
140	売場SI03	2a	長七谷地Ⅲ群	不整形	6.0×4.5		無		17
141	売場SI05	9	長七谷地Ⅲ群	楕円形	5×4		無		17
142	売場SI09	9	長七谷地Ⅲ群	不明					17

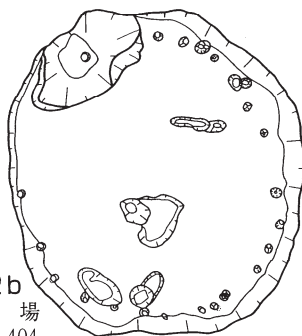
I期の住居



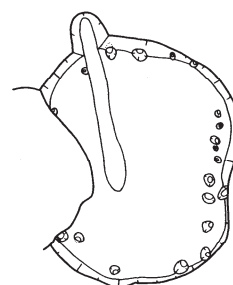
見立山(2)
SI 01
2b



見立山(2)
SI 02
2a

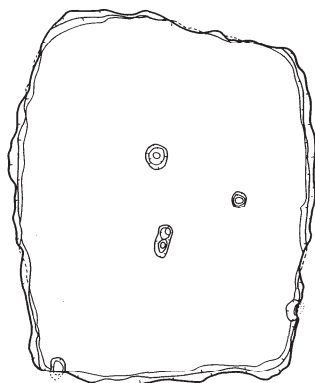


2b
売場
SI 404

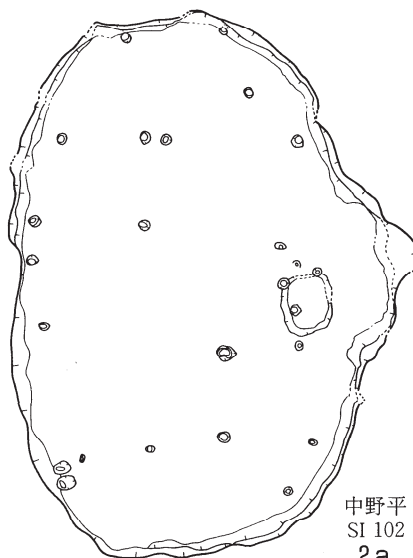


2a
長七谷地8号
SI 01

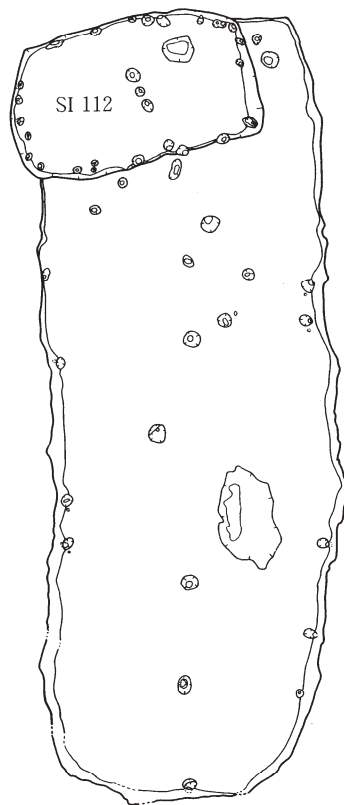
II・III期の住居



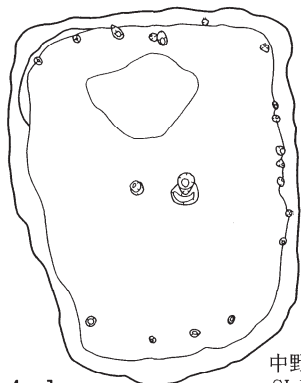
2a
中野平
SI 101



中野平
SI 102
2a

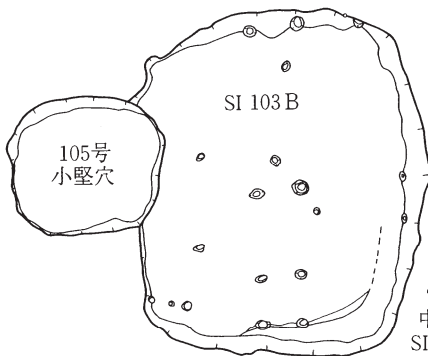


中野平
SI 112
4a2

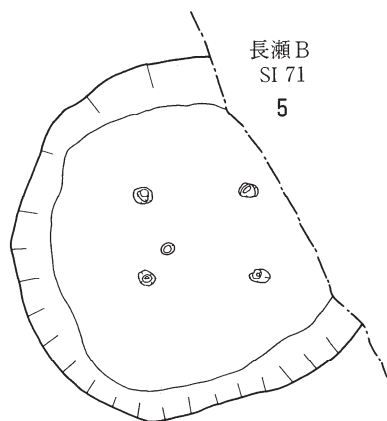


4a1

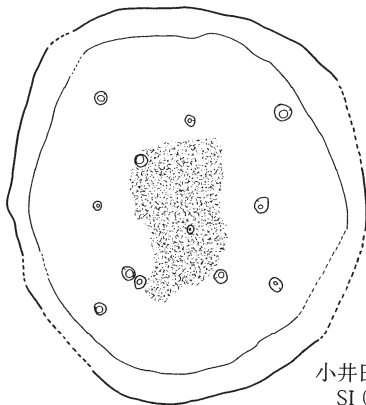
中野平
SI 104



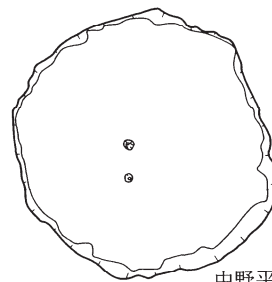
4a2
中野平
SI 103B



長瀬B
SI 71
5



小井田III
SI 02
5

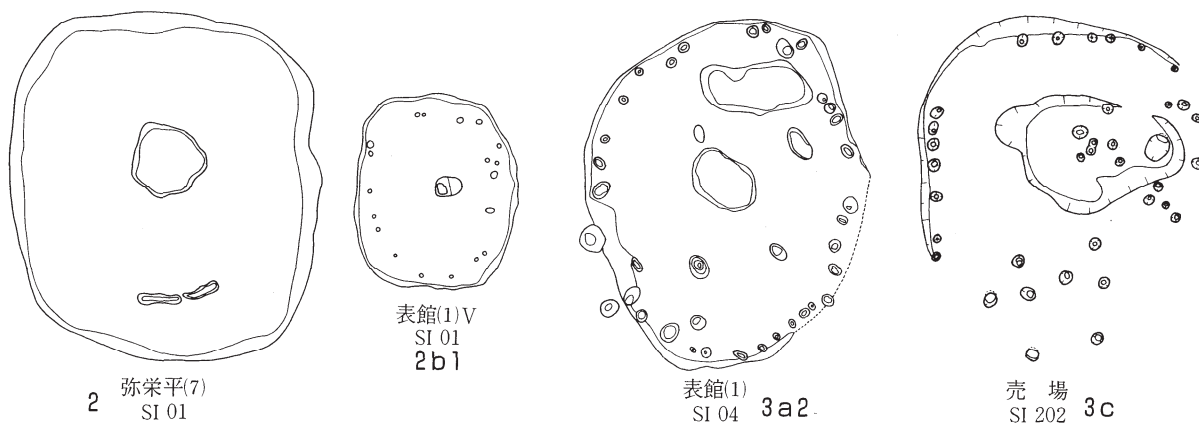


2c
中野平
SI 107

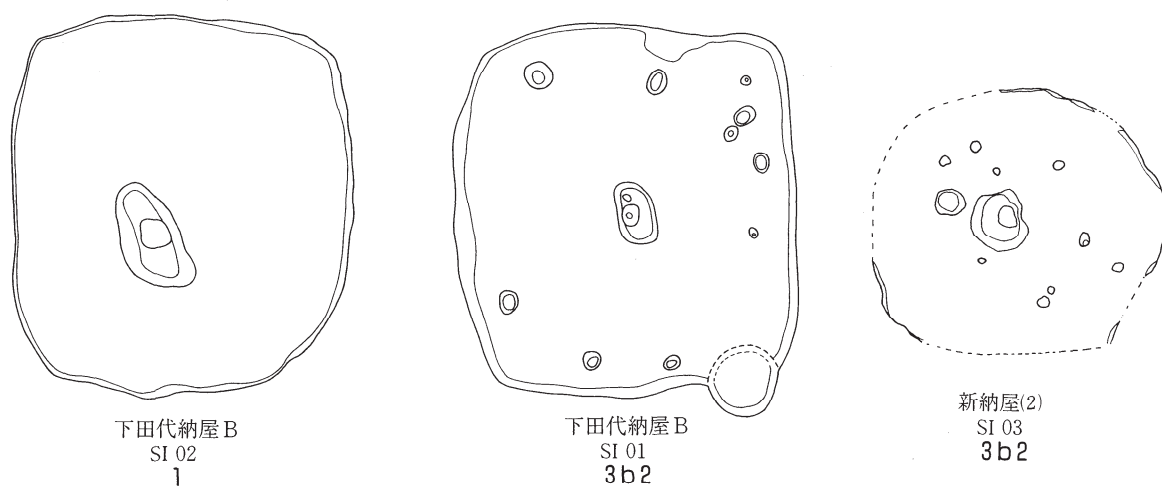


図2 I～III期の住居跡

IV期の住居



V期の住居



VI期の住居

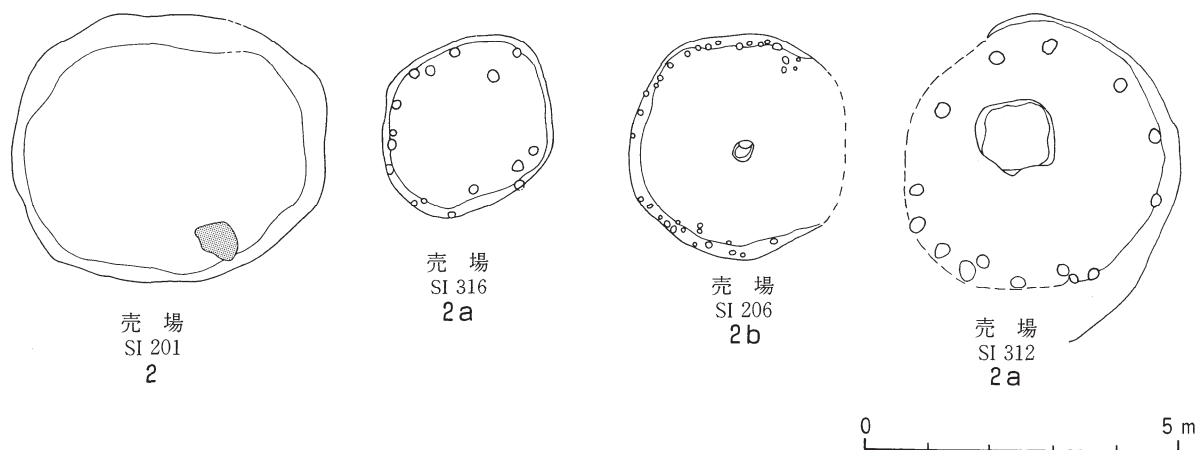


図3 IV～VI期の住居

Ⅶ期の住居

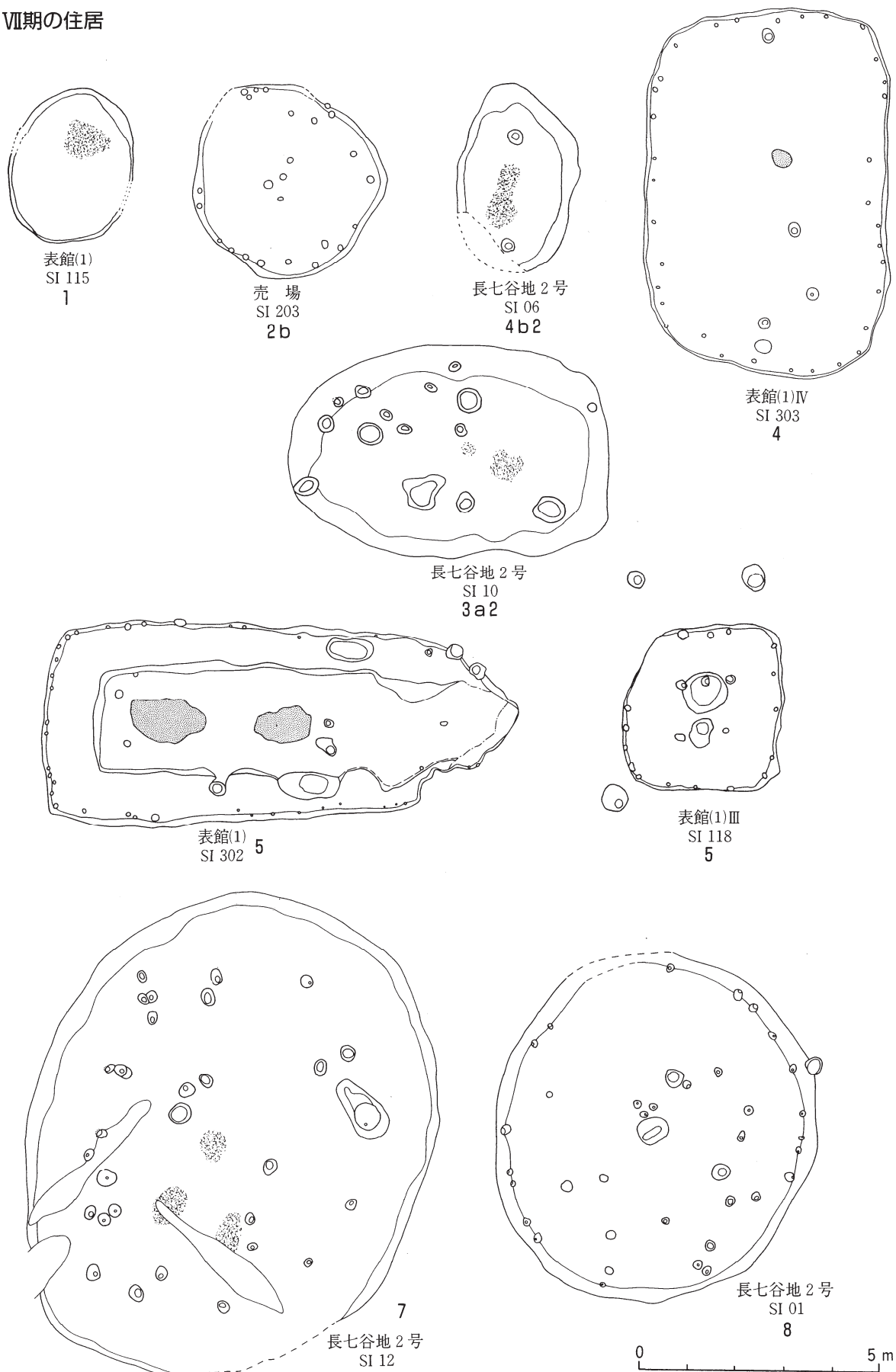


図4 Ⅶ期の住居

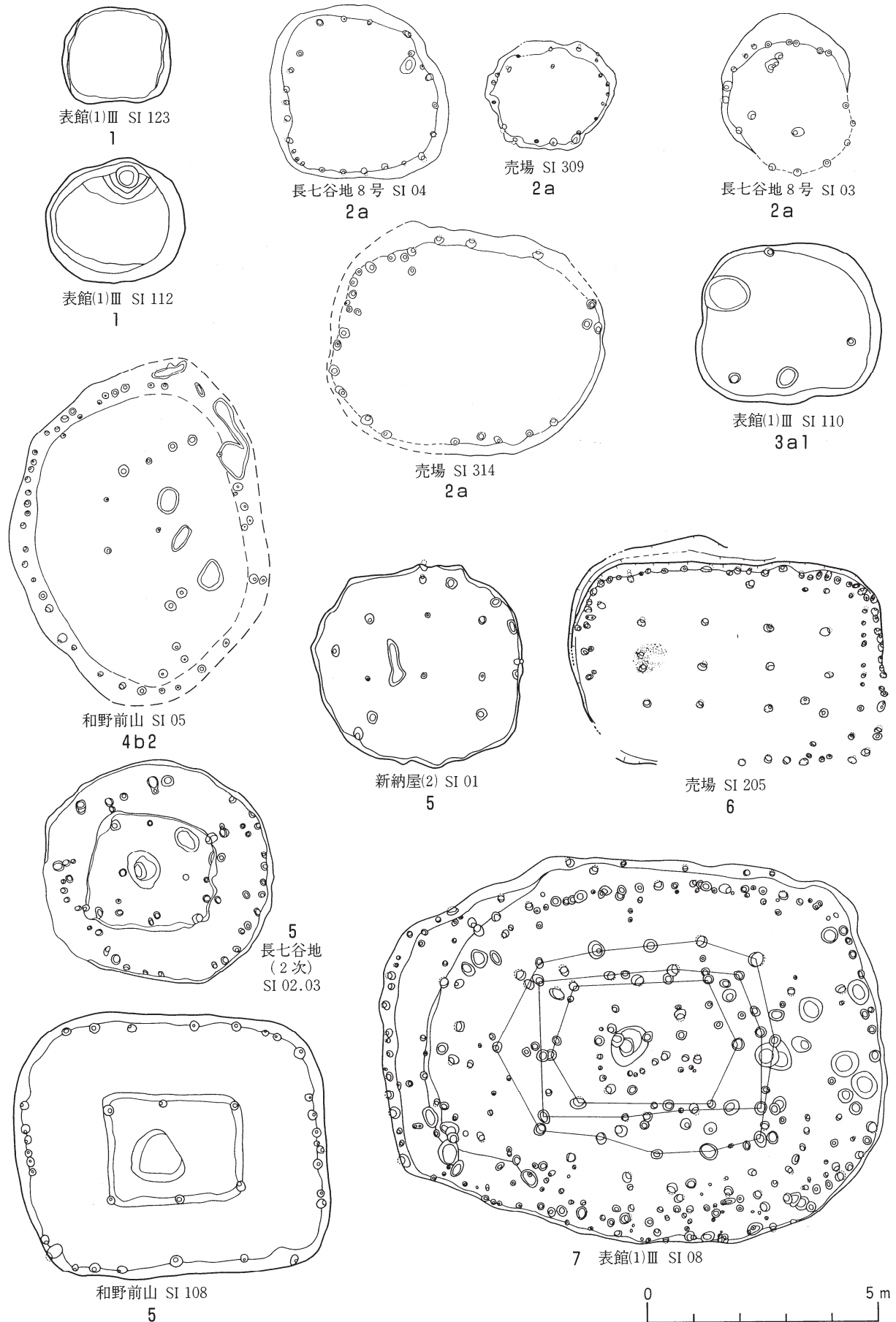


図5 VII期の住居

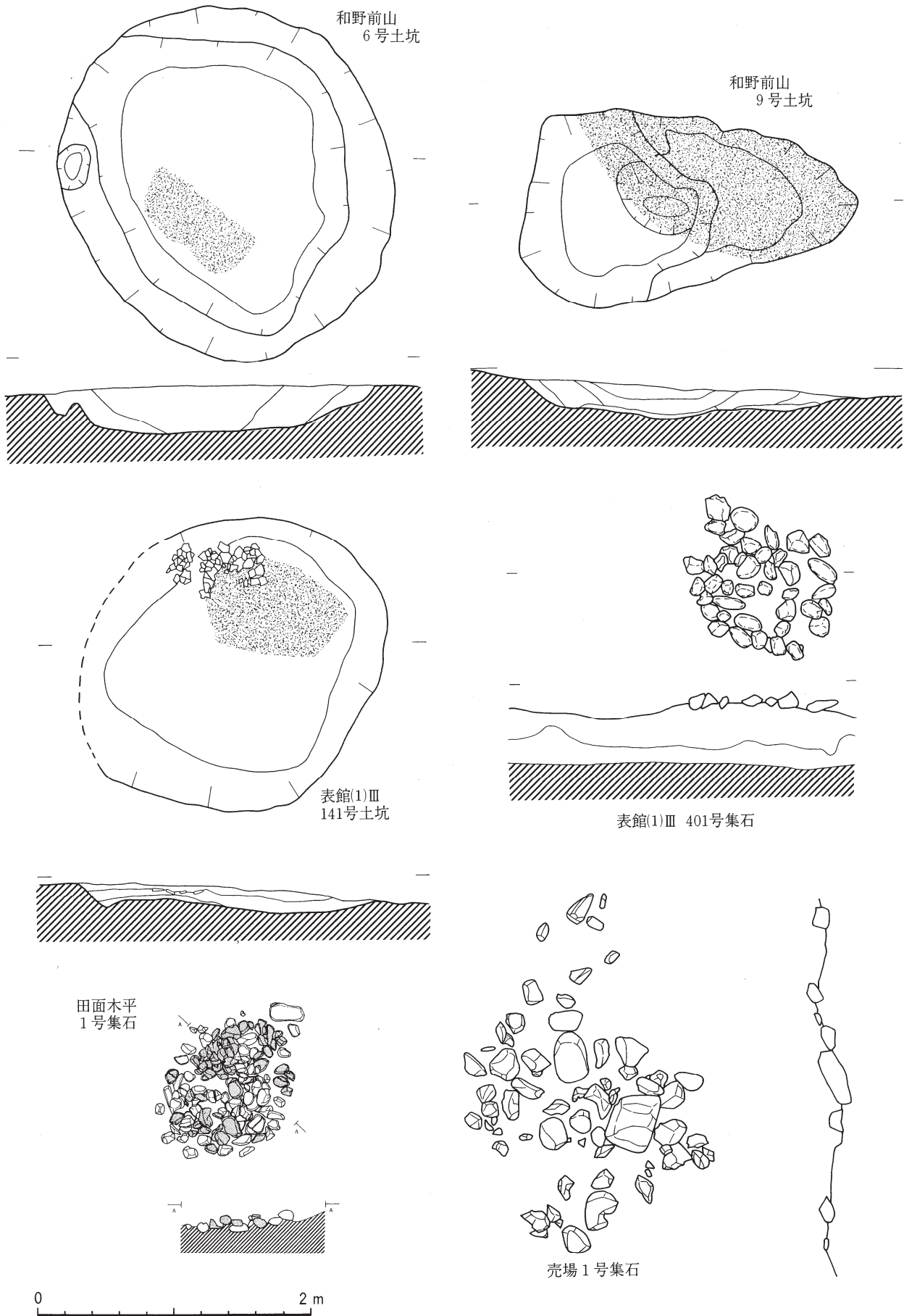


図6 土坑（ファイア・ピット）・集石

キノコ形土製品について

工藤 伸一・鈴木 克彦

1 はじめに

青森県を始め東北地方各地の縄文時代の遺跡から茸の形に似た「キノコ形土製品」と呼ぶ遺物が出土している。類似した遺物に「スタンプ形土製品」がある。

キノコ形土製品は、通常後期前葉の十腰内1式に伴うことが多い。しかし、1式というごく限られた時期だけに製作されたものなのか、また、十腰内圏内にだけ出土するものなのか、スタンプ形土製品との関係、という考古学的な研究は十分行われているとは言い難い。当然、この遺物の用途すなわち何のために作られ、使われたかという用途論さえ十分に議論されていないのである。以前、筆者の一人である鈴木はこの遺物が茸そのものを模して作られていることに着眼して、それが縄文時代に茸が食用にされていたことを証明するものである（鈴木克彦1991）という所見を述べたことがある。そこで、本稿で考古学の立場と茸を研究する者が異分野協同でこの遺物を観察した場合、どのような所見を引き出すことができるのか、試考してみることにした。

2 キノコ形土製品の考古学的概要

(1) 時期について

以前からこの遺物は十腰内1式に伴うことは大方に注意されていたが、1式の前後にはないのか、或いは盛行する時期の幅などについては検討されることがなかった。

青森県階上町野場5遺跡（青森県教育委員会1993）で中期末（大曲1式）から後期初頭（上村式）の類例2点が出土した。時期や共伴土器型式を正確に特定できないが、十腰内1式は出土していないので1式以前のものであることが分かる。1式以後の問題を解く確実な類例はないが、秋田県鹿角市大湯環状列石にも見るので1式を細分した場合その後半には伴う可能性が高い。しかし、2式の確実な類例はまだ無い。しかも、2式ないし2式に平行する時期にはこれに類似したスタンプ形土製品が盛行することから、2式には伴わないと見てよいという傍証にはなりそうだ。

このように、この遺物は考古学的な観察では、出自（初現時期）は確定できない。中期末から後期初頭としておく。今後の課題である。その終末は、概ね十腰内2式以前、と見てよいであろう。この間、最大の時間幅を考慮すると中期末葉から後期前葉までの4～5型式の間に存在したことになる。

なお、後述するように平安時代の類例が青森県から出土している。

(2) 分布

キノコ形土製品に類似するスタンプ形土製品は、北は北海道から南は関東地方まで見られるが、明かに茸を模したと見られるキノコ形土製品は、現在のところ筆者の知見では北海道函館市石倉遺跡を北限として南は福島県まで知られている。その中でも、最も多いのは青森県で次いで岩手県、秋田県の順になるが、両県でも北部に多いので、質量ともに青森県を中心にした地域に分布すると見て大過ないと思われる。特に、青森県では六ヶ所村大石平遺跡や八戸市丹後谷地遺跡（25点）で多数出土している。

最近、福島県内で行われたキノコ形についての研究（目黒吉明1997、大竹憲治1997）によると、福島県では10遺跡20例のようだ。したがって、分布範囲は函館市から福島県の中に収まるであろう。

(3) 分類（図1）

さて、「キノコ形土製品」を茸の分類学的な視野で詳細に観察すると、その中には茸そのものをリアルに模倣したと思われるものがあることに気づく。これらはいずれも実物の茸ではないので、生物学的に種を決定することはできない。しかし、その形状からある程度の推定は可能だと考える。今まで「キノコ形土製品」は、「茸に似た」という位置付け程度であったが、「茸そのもの」の模造品と思われるものも含まれていると考えるのである。

この遺物について、光井文行（岩手県埋蔵文化財センター1996）は、その形状から、傘の部分が凸状を呈する1類、平状の2類、凹状を呈する3類に分類した。この機械的分類は採用されてよいが、2類が無文のスタンプ形の可能性がないのか、そして、この遺物名が茸を模倣したという観点からすれば、2類は茸とは言い難い。したがって、まず対象を、茸を模倣したと考えられるA型（写実型）と茸の形に類似したB型（類似型）に分別したい。A型は傘の形状によって、a類：凸面のもの、b類：凹面のものに区分でき、光井分類の1、3類に相当する。B型として、a類：茸の形に近いもの、b類：スタンプ形の一つかそのように判断した方がよいもの、に分類したい。A型とB型のa類は茸との関係が考えられるが、B型b類はスタンプ形との関連性を強調したい。例えば、B型b類には傘と柄（茎）の形などの判断から、大型で傘が厚く平らなもの、柄が極めて短いもの、柄に穴が空けられているもの、模様が施されているもの、などが相当し、当然に役割が異なるものであろう。

(4) 用途

この遺物がどのような目的で作られたものなのか、その製作目的である用途の問題が、最も興味深い。これには単なる類推だけではなく、出土状態などの発掘による考古学的な観察に基づいて考察しなければならないことと、それをキノコ形と呼ぶ以上、茸を模したものだということコンセンサスがある訳だから、当然茸そのものを粘土で作った遺物として、食用ないし非食用すなわち毒茸なのかの判断は求められて方法論上問題はない。したがって、この二つの側面からこの遺物を考えることが必要である。

かつては、つまみ（柄に相当する部分）のあるものを「蓋形土製品」とする考えもあった。しかし、同時期に見られるT字を呈する蓋形土製品とは形状、大きさなどが異なるので、同一視できない。発掘では、包含層から出土することが多く、明確に遺構に伴った事例を寡聞にして知らない。となると、現状で観察できることは、その形から茸つまり現在のどのような茸に形が最も似ているか、ということを類推することと何故敢えて茸を模造したのか、という問題を考えて見ることであろう。後者の問題については、茸である以上食用か非食用しかない訳だから、美味で栄養化の高いもの、季節性によって確実に入手可能な食糧資源、或いは食べた結果の犠牲による反面教師的な扱い、などが考えられる。或いは、縄文時代の動物形土製品などのように食糧資源確保の豊穰を祈願するための信仰に係る遺物と同じような考えを与えることもできよう。いずれにしても、もはやこの問題は茸研究の専門家に委ねることが説得力がありそうだ。（以上は、工藤と協議の上での鈴木執筆）

3 キノコの歴史と民俗学

(1) 日本の古典に見るキノコ

日本におけるキノコの出現は書き物としては『日本書紀』、『万葉集』の歌の中に見られるものが最古で、平安前期の『古今集』にはキノコ狩りの様子が歌われている。十一世紀頃に書かれた『今昔物語』にはキノコによって中毒した話が出現するが、特に幻覚性のキノコを意図して用いた様子は見られない。

(2) 古代のキノコの作り物

① 中米マヤ文明のキノコ石

紀元前1,000年頃から中米のグアテマラを中心として栄えたマヤ文明の遺跡からキノコの石像が発見されている。この石像は火山岩などで作られたもので、キノコの下に獣や顔を彫っている。幻覚性キノコ信仰の象徴という見方もあるが、はっきりとしたことは不明である。

② イタリアポンペイ遺跡のきのこの壁画

紀元79年に火山で埋没したイタリアのポンペイ遺跡の壁からアカモミタケと思われる食用のキノコが描かれている絵が見つまっている。紀元50年頃の作りといわれ、壁画としては最古のキノコの絵とされる。

③ 蒙古ノイン・ウラ遺跡のキノコの綴れ織り

蒙古のノイン・ウラ遺跡から発見された綴れ織りに描かれた絵である。考古学者の梅原末治博士によると忍冬（カラクサ）の模様化したものとされるが、この模様はアメリカのキノコ民俗学者G. Wasson博士及び菌類学者小林義雄博士によると「レイシ（霊芝）、つまりマンネンタケだ」という「キノコ画」説があり、こちらが有力である。キノコを扱った綴れ織りとしては最古のものである。

以上がキノコに関する作り物として有名であるが、これらはせいぜい紀元前後のものである。縄文時代のキノコ形土製品は紀元前2,000年頃のものであり、今のところキノコの作り物としては世界最古のものとなる。

(3) 古代マヤ文明の民俗学

アメリカの菌類民俗学者B. Lowy博士によると、紀元前1,000年頃から中米のグアテマラを中心として栄えたマヤ文明における古写本聖書の中から神に貢ぎ物をしている図を見つけだし、その貢ぎ物をベニテングタケであると推定している。また、キノコ民俗学者G. Wasson博士は、インドのガンジス川流域に定着したアーリアン族に紀元前500年頃に芽生えたバラモン教で幻覚を起こす神の飲み物Somaについて、ベニテングタケであると報告している。

(4) 現代のキノコ民俗学

G. Wasson博士によると、幻覚性キノコを利用する文化圏は3つあるという。第一は中央アメリカのマヤ・アステカ文化圏であり、シビレタケの仲間を利用している。第二はニューギニア島北部の高地人であり、オニグチ科のキノコを利用している。第三はシベリア東部の原住民で、ベニテングタケを利用している。いずれも幻覚性のキノコを聖なる食べ物として呪術を行ったり儀式に使ったりしているが、シベリアの原住民では興奮により寒さを防ぐためにも使われている。特に、ベニテングタケは赤い色もあいまって幸福の象徴として飾り物にされている地方が多く世界中に広まっている。中国では古くから霊芝（マンネンタケ）が不老長寿の漢方薬として利用されているほか、縁起物として重宝されている。日本でもベニテングタケを酩酊薬として利用している一地域があるというが、一般的ではない。マンネンタケは中国と同じく不老長寿の漢方薬として利用されているほか、縁起物としての飾り物にされ、また、魔よけとして軒先に吊り下げている地方もある。

4 平安時代のキノコ形土製品

平安時代からは現在のところ青森県浪岡町野尻4遺跡から出土した1点のみである。傘及び柄の部分から形成されており、傘の下面が平面に仕上げられているものの、傘の厚さから考えてひだのあるキノコを模倣したことは明らかであることから、この土製品は「担子菌類ハラタケ目」のキノコを模倣したものと思われるが、傘の部分の造りは単調であり、キノコの識別を意識して造られたものとは思われず、種の推定までには至らない。

平安時代から出土した土製品は、今のところ同時代からの他の出土例はなく、その製作意図を考察するには少々危険であるが、この時代には和歌や物語りに既にキノコ狩りなどが登場し、茸が一般的に浸透していることが推察されるところから、豊穰儀礼や装飾として用いられた要素が強いものと考えられる。

5 縄文時代のキノコ形土製品

(1) 青森県から出土した類例についての茸の分類学から見た所見

これらのキノコ形土製品はいずれも本物の茸を意識して造られているものが多く、かなりの部分まで推定できるものが多い。傘及び柄の部分から形成されていること、更に、傘の厚さ及び形状から推定して「ひだ」または「管孔」のある茸を模倣したことは明らかであり、「ハラタケ目」のきのこを模倣したものであることは確実である。この「ハラタケ目」の茸には、現代、我々が食用としている茸の大部分を占めている。

八戸市韭窪遺跡の類例は傘が丸山形で柄が細く仕上げられ、全体のバランスがよく「ホンシメジ」のようなキシメジ科の典型的なシメジ属の茸を思わせる。柄が傘にやや斜めに取り付けられているが、材に発生しているものではなく、斜面に発生している状態を現している。

六ヶ所村大石平遺跡の類例は、傘がやや反り返った形で傘の下面が柄に垂生状に仕上げられているところから、「ハツタケ」などのベニタケ科の茸と思われる。

六ヶ所村大石平遺跡の類例は、傘の縁が鈍角に仕上げられており、イグチ科の茸を思わせるが、傘の下面が凹状に仕上げられていることから、それこそシメジタイプであろうか。特徴をよく現そうとする意図は感じられるが、種の推定までには至らない。

階上町野場5遺跡の類例は2点ある。一つは傘の部分が平たい丸山形で、全体にやや肉厚、傘の下面の凹状態の仕上げが弱く、イグチ科の茸を思わせるが、種の推定までには至らない。もう一つは傘が肉厚で、キシメジ科の典型的なキシメジ属の茸を思わせる。柄が傘にやや斜めに取り付けられており、斜面に発生している状態を現している。この土製品は特に傘の状態から青森県で知られている「バカマツタケ」によく似ている。

南郷村水吉遺跡の類例も2点ある。どちらもキシメジ科のタイプの茸で、いずれも基部が意識的に曲げられていることは、倒木や枯れ木などに付着していたものを表現していると推測されるが、両者は種類が違うものである。一つは傘の肉が薄く仕上げられており、比較的深い丸山形であることから、「サマツモドキ」のようなタイプのきのこのようである。もう1つは幼菌を模倣したようで、見た目は「シイタケ」のような肉厚のタイプの茸のようである。

(2) 使用目的の考察

従来、キノコは、「食用だけで、幻覚作用をおこすきのこで呪術や祭の儀式に用いられた」と考えられていた。しかし、縄文時代から今まで出土したキノコ形土製品のA型を精査する限りにおいて、その形状は傘の下面の「ひだ」や「管孔」の表現はないものの、種までもを推測できるほどに精巧なものが見受けられる。それはいずれもハラタケ目のキシメジ科、イグチ科、ベニタケ科などの食用茸と思われ、幻覚作用をおこすと思われる茸は見つかっていないので、上記の学説の確証は得られない。また、民俗学的に考察してもこのことは限定された地域の例であり、縄文時代のキノコ形土製品に当てはめるには無理がある。

縄文時代において、茸も当然に貴重な食糧になり得たことは推測できる。しかし、茸の食毒の判断は現代の科学をもってしても先人の貴重な体験によるところがほとんどである。このことは縄文時代

においても例外ではない。茸を食糧としたことによって毒茸による犠牲者もかなり出たものと推測される。茸の種類は1万種を越えるといわれており、中毒を防止するためには茸の中から毒茸を知ることよりも、身近に多数発生する食用の茸を覚える方が確実である。

今までのことから縄文時代のキノコ形土製品は、A型からB型a類に移行したものと思われるが、A型の目的に限って言えば、現代の『図鑑』に相当するものではないかと考える。茸は腐敗しやすく、植物のように長期にその場に発生してはくれない。また、採取しても原形を止めさせておくことは不可能である。そのため、貴重な体験から食用と判明した茸を模倣し、人々が茸を採集する際などの指針としたのではないだろうかと推定する。結論として村人や家族たちへの伝説の手段、つまり、『縄文版キノコ図鑑』であると推定するものである。

青森県内キノコ形土製品出土例

遺跡名	時代	所在地	点数		文献
野尻4遺跡	平安	浪岡町	1	キシメジ科?	青森県教委 1996
是川遺跡	縄文	八戸市	3		八戸市教委 1972
四ツ石遺跡	縄文	青森市	3		青森市教委 1965
葦窪遺跡	縄文	八戸市	1	キシメジ科ホンシメジ類似	青森県教委 1984
丹後谷地	縄文	八戸市	25	B型a類	八戸市教委 1986
大石平遺跡	縄文	六ヶ所村	5	ベニタケ科類似ほか	青森県教委 1985
野場5遺跡	縄文	階上町	2	バカマツタケ類似ほか	青森県教委 1993
水吉遺跡	縄文	南郷村	2	サマツモドキ、シイタケ類似	青森県教委 1998
上尾駸遺跡	縄文	六ヶ所村	1	傘のみ、キシメジ科類似	青森県教委 1988
鷹架遺跡	縄文	六ヶ所村	1	不完全	青森県教委 1981
近野遺跡	縄文	青森市	1	B型a類	青森県教委 1976

参考文献

- 伊藤誠哉 1958 深槽録(その1) 日本菌学会会報
 小林義雄 1983 日本中国菌類歴史と民俗学 広川書店
 横山和正、今関六也 1978 幻覚性キノコとキノコ民俗学 週刊朝日百科「世界の植物」116
 鈴木克彦 1991 特集・縄文文化のふるさと青森県 青森県暮らしの歳時記 東奥日報社
 目黒吉明 1997 キノコ形土製品について 福島考古38
 大竹憲治 1997 スタンプ形土製品とキノコ形土製品をめぐって 史峰23
 岩手県埋蔵文化財センター 1986 駒板遺跡発掘調査報告書

図1の掲載遺物の出土遺跡

1 青森県八戸市葦窪遺跡	7 青森県六ヶ所村大石平遺跡	13 福島県原町市羽山遺跡
2 青森県南郷村水吉遺跡	8 青森県六ヶ所村大石平遺跡	14 青森県六ヶ所村大石平遺跡
3 青森県南郷村水吉遺跡	9 青森県青森市近野遺跡	15 青森県青森市近野遺跡
4 青森県階上町野場5遺跡	10 青森県八戸市丹後谷地遺跡	16 青森県青森市近野遺跡
5 青森県階上町野場5遺跡	11 青森県六ヶ所村大石平遺跡	17 青森県浪岡町野尻4遺跡
6 青森県六ヶ所村大石平遺跡	12 青森県六ヶ所村大石平遺跡	

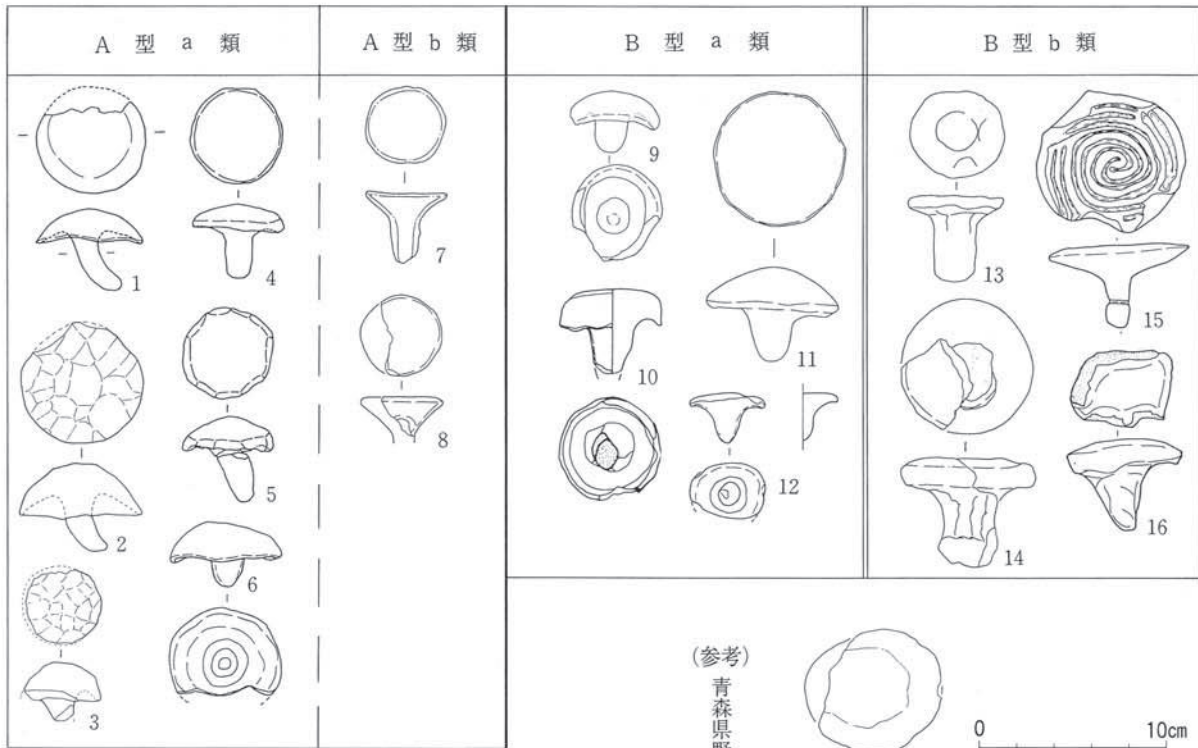
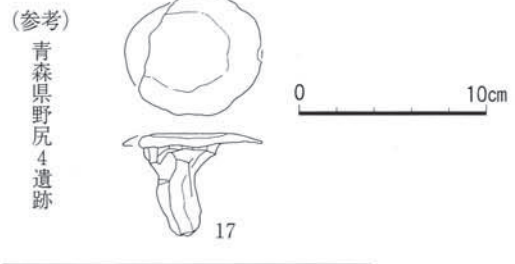


図1 キノコ形土製品分類



- 写真の出土遺跡
1. 青森県南郷村水吉遺跡
 2. 青森県階上町野場遺跡
 3. 青森県六ヶ所村大石平遺跡
 4. 青森県階上町野場遺跡
 5. 青森県南郷村水吉遺跡

写真 キノコ形土製品の類例

青森県内で検出された「畠跡」について

—南郷村^{すなご}砂子遺跡の資料整理にあたって—

木村 鐵次郎

1 砂子遺跡について

1995年5月から8月にかけて三戸郡南郷村砂子遺跡を発掘調査し、かなりの面積の畠跡を検出することができた。これから報告書作成のための整理作業を進めるにあたり、青森県内の畠跡及び関連する遺構について一通り整理してみたいと思う。

砂子遺跡は、岩手県北に源を発し八戸市で太平洋に流れる新井田川右岸の低位河岸段丘上に立地し、青森県三戸郡南郷村大字島守字下世増に所在する。遺跡の調査は、八戸平原開拓建設事業（世増ダム建設）に伴うもので、1995年に試掘調査がなされ、畝状遺構と皿状の土坑が検出された。それらの記録保存を図るため、1997年5月から8月まで発掘調査を実施した。当初、5,000㎡の調査を予定していたが、畝状遺構の検出の拡大とともに約15,000㎡の面積を調査し、検出した畝状遺構の面積は概算で約3,000㎡に上る。また、皿状の土坑と捉えたものは、実際は埋もれきれない平安時代の竪穴住居跡であることがわかり、畝状遺構の営まれていた時代には既に平安時代の集落が埋もれていたわけである。この平安時代の集落は1998年度に改めて発掘調査される予定である。

砂子遺跡の畝状遺構は、畝と畝間をもつもので、その性格として畠跡であることが明瞭なものと観察されるものであった。

2 「畠」と「畑」について

辞書で「はたけ」をみれば「畠」と「畑」という2つの字がみえ、どちらも同じ意味である。

諸橋轍次の『大漢和辞典』によると

畑—国字。水田の対。草を焼いて開墾した陸田。乾田の義、畠ともかく。

畠—国字。白と田の合字。白は水無く乾いている意で、乾田の義とする。畑に同じ。

とあり、共に漢字ではなく国字であることわかる。同じく乾田の義であり、意味的に差はないように思われる。「畑」は開墾のさいに草木を焼くことからきたものであろうし、「畠」は耕作時の状況を現しているように思われる。

現在では、「畑」の字を用いることの方が一般的と思われるが、歴史的にみるとどうなるのか。吉川弘文館『国史大辞典』「田畑」の項では、「字の作られた経緯からもその使用は本来的には区別されていたようであるが、中世末期に次第に混用されるようになり、近世初期になると「畑」と「畠」の字の区別はなされなくなり、「畑」の方が検地帳などで一般的になった。・・・焼畑は常畠化が可能であれば畠地化され、畠地は灌漑条件が整えば水田化されていったし、水田も乾田化の方向に進行した」とみえる。

これからみれば、発掘調査で検出される「畠跡」関連の遺構の性格を示すとき、焼畑が語源となる「畑」より水田と対比する形状を示す「畠」の語を使用した方が適切ではないかと思われる。よって、今後「畠」の語を使用していきたいものと考えている。

3 青森県内の畠跡関連遺構検出例

青森県内で検出された畠跡に関連する遺構の検出された例は、14遺跡に上る。最も古い調査例で

も1994年の野尻（4）遺跡・往来ノ上（1）遺跡・中野平遺跡の3遺跡、1996年の隠川（4）・（12）遺跡、残りの8遺跡は本年度の1997年というように、畠跡関連遺構検出例はここ数年のものである。

分布をみると、津軽地方に7例、県南地方に7例というように下北半島を除いてほとんど全県的に分布しているといえる。下北地方にまだ例をみないのは開発に伴う調査数の少なさに関係するものと思われる。

遺構の年代観からみると、最も古いもので10世紀前葉が中野平遺跡の1遺跡、10世紀前半が5遺跡、15・16世紀頃が2遺跡、17世紀頃が1遺跡である。平安時代が9遺跡、中世が2遺跡、近世が1遺跡というようになっている。

検出状況では、10世紀前葉は十和田a火山灰、10世紀前半となっているのは白頭山苦小牧火山灰ないしは十和田aか白頭山苦小牧かのどちらかに覆われている例である。砂子遺跡は川の氾濫による土砂の堆積による埋没した例、他は堆積土の違いなどで検出されたものである。

4 遺構の名称について

「並列溝状遺構」は、隠川（4）・（12）遺跡のみで使用される。

「耕作遺構」は、貝ノ口遺跡のみで使用される。

「畝状遺構」は、8遺跡で見られ、用語としては最も多く使用されている。

「畠跡」（「畑跡」）を使用しているのは、中野平遺跡・砂子遺跡・十三湊遺跡であるが、報告書が刊行されて使用されているのは中野平遺跡のみである。

これらの遺構の名称は、その検出状況によることが大きい。

①「並列溝状遺構」は等間隔に並列する溝が検出されたことからの名称（注1）であり、畠跡の関連遺構という観点では、畝は後世の削平によって存在しないか、あるいは極めて類似する土壌のために畝が確認できず、畝間（畝と畝の間の溝状に窪んだものを呼称する）だけが検出されたものという捉え方がなされる。

②「耕作遺構」は、その残された遺構が耕作によって残されたものであるとすれば、「耕作遺構」＝「畠跡」を指すものではないだろうか。形状を呼称するのに「耕作」という機能論的な用語を用いており、使用する用語としてはやや不適切ではないかと思われる。

③「畝状遺構」は、畝と畝間がともに検出されたものと捉えることができよう。しかし、畝間と考えられる溝だけの存在で「畝状遺構」を使用していないか、より厳密に検証してみる必要があるようである。

④「畠跡」は、畝状遺構がある程度の範囲にわたって面的に認められ、「畠跡」として捉えられる面に対して使用する。

5 今後の問題点

①用語と形状について

青森県内での畠跡関連遺構の名称としては、現在「並列溝状遺構」「耕作遺構」「畝状遺構」「畠跡」の各用語が使用されている。しかし、用語の使用を考える際に形状から呼称する場合は、正確に形状を説明する用語を用いるべきと考える。畝間と思われる溝だけの把握からは「畝状遺構」を用いるべきではないし、形状を呼称するのに機能を示す用語を用いるべきではないと思う。

畠跡関連遺構を呼称する場合は、その形状から並列する溝だけの場合「並列溝状遺構」、畝と畝間

が検出された場合「畝状遺構」、畝と畝間が面的に把握され畠跡と捉えられる場合「畠跡」というように段階的に呼称した方が適切ではないかと考える。

②時代について

畠跡に限らず、生産遺構が検出されるのは何らかの理由により、その生産活動がストップし、その段階での形状を留めるものである。その多くは、自然的な災害によることが多いのは、十和田aあるいは白頭山苦小牧の火山灰による検出例、洪水による土砂堆積、ということからもいえよう。

火山灰による年代の決定は、その火山灰の年代がおおよそ確定しており、どの火山灰か同定されているならば比較的容易に年代的な位置づけが決定されるが、それ以外は年代の決定には困難なものがある。元来、生産遺構は遺物を伴うことが少ないものであるが、畠跡にもそのことは当てはまる。そのことから、その数少ない出土遺物、出土状況、他の遺構との重複関係等から総合して把握していかなければならない。

③栽培作物について

畠跡と認められたとしても、その栽培された作物を知ることは考古学的にはほとんど不可能に近く、自然科学的な方法に頼らざるを得ない面がある。現在のところ、自然科学的な方法にはプラントオパール分析・花粉分析・種実分析等が実施されているが、なかなか決め手になりうる成果が認められる例は少ない。今後ともいろいろな方法・手段を追求する必要があるだろう。なお、資料の採取のさいは後世の影響がないことを厳密に確認する必要があることはいうまでもない。

注1 隠川(4)・(12)遺跡の調査担当者である木村高氏による呼称である。平成8年度青森県埋蔵文化財発掘調査報告会レジュメでは「連続溝状遺構」という呼称を用いたが、「連続」では横に連続するのか、縦に連続するのか明確でないということで、横に連続するということから平成9年度刊行の報告書では「並列溝状遺構」を使用するとのことである。

参考文献

- 青森県教委1996 『野尻(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書186
 青森県教委1997 「平成9年度十三湊遺跡現地説明会資料」
 鱒ヶ沢町教委1997 「平成9年度種里城址発掘調査現地説明会資料」
 遠藤正夫1997 「青森県における農耕関連遺構の現況と課題」第7回東日本の水田跡を考える
 会資料集
 七戸町教委1997 『貝ノ口遺跡V』七戸町埋蔵文化財調査報告書19
 下田町教委1996 『中野平遺跡』下田町埋蔵文化財調査報告書7
 東北町教委1996 『往来ノ上(1)遺跡』東北町埋蔵文化財調査報告書6
 八戸市教委1997 「平成9年度新井田古館現地説明会資料」

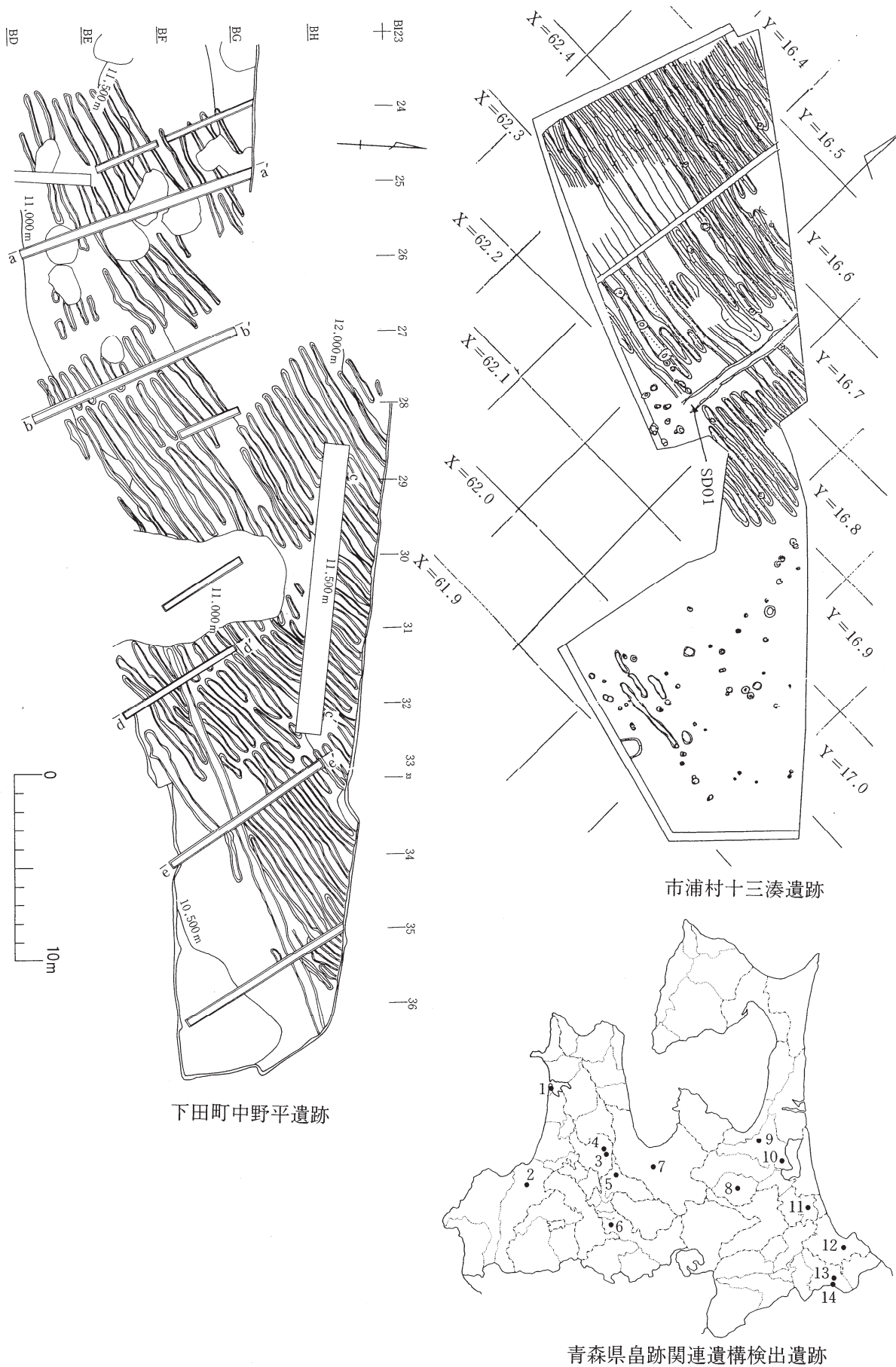


図1 青森県内の畠跡関連遺構例(1)

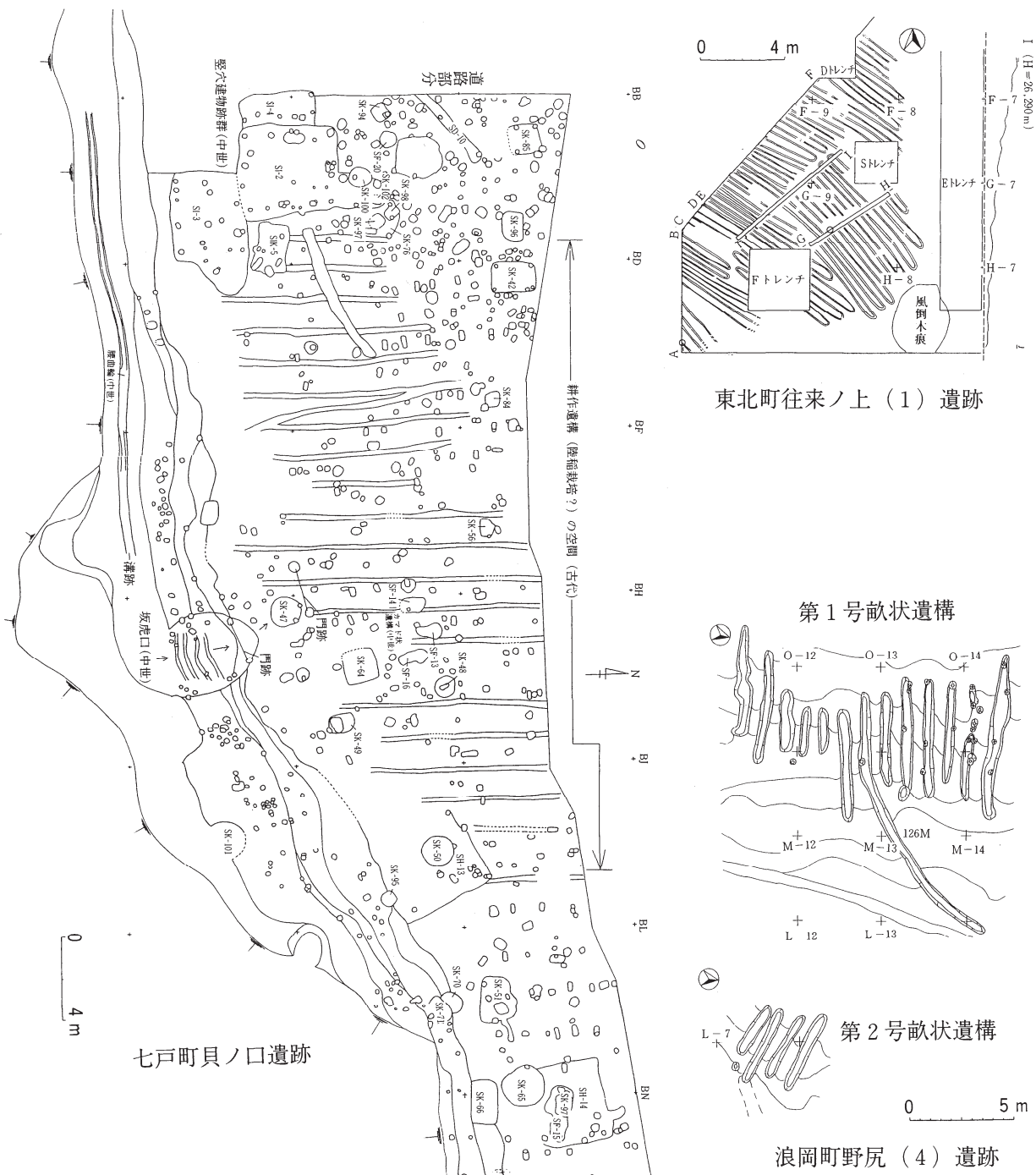


図2 青森県内の畠跡関連遺構例(2)

表 青森県における畠跡関連遺構検出遺跡

番号	遺跡名	遺構名称	所在地	調査年	時代	備考
1	十三湊遺跡	畑跡	北津軽郡市浦村十三字琴湖岳	1997	15世紀前半?	
2	種里城跡	畝状遺構	西津軽郡鱒ヶ沢町大字種里町	1997	15・16世紀?	
3	隠川(4)遺跡	並列溝状遺構	五所川原市大字持子沢字隠川	1996	10世紀前半	
4	隠川(12)遺跡	並列溝状遺構	五所川原市大字持子沢字隠川	1996	10世紀前半	
5	野尻(4)遺跡	畝状遺構	南津軽郡浪岡町高屋敷字野尻	1994	10世紀前半	
6	大光寺新城跡	畝状遺構	南津軽郡平賀町大光寺字三村井	1997	17世紀?	
7	野木遺跡	畝状遺構	青森市合子沢字松森	1997	10世紀前半	
8	貝ノ口遺跡	耕作遺構	上北郡七戸町字貝ノ口	1996	平安時代	
9	空久保(4)遺跡	畝状遺構	上北郡東北町字空久保	1997	平安時代?	
10	往来ノ上(1)遺跡	畝状遺構	上北郡東北町字往来ノ上	1994	10世紀前半	
11	中野平遺跡	畠跡	上北郡下田町中野平	1994	10世紀前葉	
12	新井田古館遺跡	畝状遺構	八戸市新井田字古館	1997	平安時代?	
13	砂子遺跡	畠跡	三戸郡南郷村鳥守字下世増	1995・7	中・近世	
14	畑内遺跡	畝状遺構	三戸郡南郷村鳥守字畑内	1997	10世紀前半	

平成9年青森県内発掘調査動向

1 はじめに

平成9年度、県内で発掘された遺跡は、付表・平成9年度青森県内遺跡発掘調査一覧に示したとおりである。以下、主要な遺跡の発掘成果について簡明に紹介する。

2 縄文時代

八戸市櫛引遺跡から縄文時代草創期の多縄文土器が破片数で約500点ほど出土した。これに伴い石斧、削器などの石器、住居跡2軒と土坑4基、集石2基が確認された。

青森市三内丸山遺跡では、第8次～第10次調査が行われ、集落の中心から約420mにわたる2列に並ぶ中期の土坑墓が確認された。三内丸山6遺跡ではフラスコ型土坑群が検出された。南郷村畑内遺跡で前期の大型住居跡、鯉ヶ沢町餅ノ沢遺跡で中期の大型住居跡、住居跡12軒、縄文後期の組石棺墓が5基検出されている。大畑町二枚橋遺跡では晩期の配石や多数の土偶など、弘前市十腰内遺跡では晩期の大型住居跡などが発見された。

階上町滝端遺跡、引敷林遺跡では、後期後葉から晩期前葉の遺物が出土し、住居跡も検出された。

八戸市内では牛ヶ沢4遺跡など11ヶ所の縄文時代早期から晩期の遺跡が発掘された。大半が個人住宅等の建設に伴う小規模な補助事業発掘だが、こういった地道な発掘は文化財保護の立場から広く行われる必要があるだろう。

三沢市内では天狗森3遺跡など3ヶ所の縄文時代の遺跡が発掘され、早期～中期末などの住居跡などが発見された。下田町向山6遺跡では早、前期の土器が出土した。

森田村石神遺跡では前期、中期の遺物、八重菊1遺跡では晩期の遺物が出土した。

黒石市長坂1遺跡では中期中葉から後期前葉の住居跡15軒、土坑37基を発掘し、多くの遺物が出土した。

弘前市孤独遺跡では早期の土器が出土し、沢部1号遺跡では晩期の土器が出土した。

青森市では小牧野遺跡など4ヶ所の縄文時代の遺跡を発掘した。

車力村牛湯1遺跡では前期の装身具、碓ヶ関村四戸橋遺跡では中期の板状土偶が出土した。

3 弥生時代

三沢市小山田(2)遺跡で二枚橋式期の住居跡2軒、土坑2基、八戸市牛ヶ沢(4)遺跡で前期の住居跡1軒を検出した。他に、畑内遺跡、八戸市昼場遺跡、弘前市沢部I号遺跡青森市安田2、五所川原市隠川11、12遺跡でも弥生土器が出土している。

4 古代(奈良・平安時代)

櫛引遺跡では、住居跡が55軒検出された。奈良時代の遺物には、坏・甕・甑などの土師器、紡錘車、須恵器大甕など出土し、平安時代では大溝、円形周溝や掘立柱建物跡のほか遺物では、砥石・鉄製品や琥珀玉製品が出土している。

畑内遺跡では、平安時代の畠跡とみられる畝状遺構が検出された。

八戸市法霊林遺跡から奈良時代の竪穴住居跡2軒、新井田古館跡から奈良時代の竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡多数、大仏遺跡から平安時代の竪穴遺構17軒、土坑12基、溝11条、通路1条など、根岸山添遺跡から奈良時代の竪穴住居跡2軒検出されている。遺物では、大仏遺跡から出土した11世

紀後半頃と推定される。中国産の青白磁皿が注目されている。

階上町では、山館前遺跡から平安時代の竪穴住居跡が7軒検出された。下田町では、向山(6)遺跡から平安時代の竪穴住居跡が4軒検出され、埋れきらない竪穴が35基確認されている。

三沢市では、小山田(2)遺跡から10世紀初め頃の竪穴住居跡が1軒、土坑が14基、猫又(1)遺跡から9世紀末から10世紀初め頃の竪穴住居跡1軒、天狗森(3)遺跡から火山灰層2枚堆積している円形土坑3基が検出されている。

七戸町では、貝ノ口遺跡から竪穴住居跡から鉄鍋破片が出土し、七戸城北館から竪穴住居跡7軒、倉越(2)遺跡から竪穴住居跡が2軒検出されている。

青森市野木遺跡は、県と青森市が発掘を行い、県の調査では9世紀中頃から10世紀後半までの竪穴住居跡162軒、掘立柱建物跡2軒、土坑176基、溝状遺構52条、焼土状遺構14基のほか、畠跡とみられる畝状遺構3ヶ所、水場が1ヶ所、階段状遺構が1ヶ所調査された。このうち、溝や柱穴で囲まれた土坑が7基あり、トイレ遺構の可能性もあり注目されている。市の調査では、竪穴住居跡85軒、土坑140基、竪穴遺構30基などが検出された。野木遺跡に隣接する新町野遺跡では、炭化物が多量に出土する土坑が検出された。

浪岡町野尻(1)遺跡では、9世紀後半から10世紀前半の竪穴住居跡12軒、10世紀中頃以降の竪穴住居跡が7軒検出された。ほかに炭化物が多量に出土した土坑も検出された。五所川原市隠川(12)遺跡からは、3～4世紀頃の古式土師器(塩釜式)と後北式土器が出土して、注目されている。犬走須恵器窯跡が発掘調査されたが、窯の覆土から白頭山火山灰が検出された。この窯を完掘したところ重複して古い窯も確認された。森田村では、八重菊(1)遺跡から製鉄関係の竪穴が6基ほど検出された。弘前市では、独狐遺跡から溝跡24条、沢部I号遺跡から多数の竪穴住居跡、堀跡1基が検出されている。中里町では、中里城跡における10世紀から11世紀にかけての空堀の構築・廃絶の様相が明かにされた。

5 中世

市浦村十三湊遺跡の県教育委員会による発掘調査では、家臣館地区と町屋の南限とされる場所の2ヶ所を発掘した。その結果、家臣団館地区からは、4間×5間の大型掘立柱建物跡を検出した。町屋地区からは、15世紀前半期の畑跡が32条見つかった。出土遺物は、13世紀から15世紀前半期のもので青磁、白磁、高麗象嵌青磁などの輸入陶磁器、古瀬戸、珠洲、瓷器系陶器等の国産の土器・陶磁器の他、炭化米、古銭、鉄製品等が出土した。また、市浦村教育委員会では十三湊遺跡のうち7地区の発掘調査を行った。その結果、湊迎等の西側では、中世十三湊の初期の頃(13～14世紀)の瓶子、珠洲のすり鉢、甕、壺、四耳壺片、越前、常滑の甕片、渡来銭など40点が出土し、逆に15世紀代にあたる遺物が含まれないことから、当地区が初期の中心な港湾施設があった可能性が分かって来た。砂山地区の調査では、砂丘上におびただしい量の鉄滓が廃棄されており、その下層から中世陶磁器と鉄滓、炭化物を含んだ溝状遺構が検出したことから15世紀前半の段階においても砂丘は形成され、この付近で鍛冶を行っていた可能性が分かって来た。

平賀町大光城跡の調査では、井戸跡、竪穴住居跡のほか溶鉱炉施設と思われるカマド状遺構などが検出している。主な遺物は、青磁、白磁、瀬戸美濃、珠洲、古銭などが出土した。

鱒ヶ沢町種里城址の調査では、2間×4間の掘立柱建物跡が検出している。そのほか煮沸等に使用された炉跡や畝状遺構なども見つかった。

弘前市福村城は、天正2年(1574)頃に築城されたと伝えられるもので、調査では虎口に架かる

橋の橋脚部分（2間幅で2間分の計7本）を検出した。橋は、五角形から七角形に加工され、外側の橋脚は内転びて技法を用いていることが確認された。遺物は唐津の甕や瀬戸美濃のすり鉢、下駄、箸などが出土した。

八戸市新井田古館遺跡からは中・近世の土壙が39基が検出した。八戸市大仏遺跡からは、中・近世の瀬戸産の御皿（おろしざら）・火鉢・染付、砥石、茶臼などが出土した。また、この時期に並行すると思われる張り出しのある竪穴遺構を検出した。八戸市館平遺跡からは、中・近世に造られた掘立柱建物跡2軒を検出している。出土した遺物に陶磁器（青磁、瀬戸・美濃・唐津産）がある。

七戸町貝ノ口遺跡の今回の調査では、15世紀初頭から16世紀末頃（室町時代から戦国時代）の堀跡、土壙が検出した。ここでは、土壙と堀跡が全長40mにわたり、並行しており、その延長線上には区画溝も検出した。さらに、堀跡と区画溝の組み合わせにより「喰違虎口（くいちがいこぐち）」が作りだされていることが確認された。こういった手法は、県内では発見例がなく新たな手法を用いていたことが明らかになった。また、掘建物柱跡及び土壙が1基検出し、土壙内からは鉄製の小柄の鞘及び中国染付の破片、天目茶碗の破片がまとまって出土した。史跡七戸城跡北館（史跡の環境整備に伴う発掘調査）では、掘立柱建物跡など4軒を検出した。

南部氏関連城館である南部町聖寿寺館跡については、竪穴遺構8基、土壙10基、溝状遺構1基、柱穴などが確認された。遺物は15～16世紀の白磁、青磁、染付け、赤絵、美濃瀬戸、天目、鉄砲玉、刀子、骨角器、漆などが出土した。

南郷村砂子遺跡からは、新井田川の洪水による砂の堆積によって埋もれた中近世頃の畠跡が検出された。畠跡は、畝幅70cm、長さ15mほどのものが多いが、長いもので40mのものも検出した。

6 近世

弘前市の弘前城（慶長16年・1611に築城）の調査では、北の郭から建物跡や柵列などを検出している。遺物は、唐津の皿・瀬戸美濃の折縁菊皿・肥前の染付などが出土した。弘前市革秀寺庭園遺跡（二代藩主津軽信牧が慶長13年（1608）に創建）からは、礎石が1ヶ所検出した。遺物は、17世紀前半の唐津陶器などが出土した。

弘前市長勝寺（欄庭院）の調査では、16世紀前半の天目茶碗や16～17世紀初頭の中国産染付碗、17～18世紀の肥前磁器の碗が出土した。

八戸市八戸城跡の調査では、堀跡1条、堀跡1列、柱穴跡、土壙2基が確認された。遺物は、肥前系磁器、瀬戸、美濃系陶器、京焼系陶器、漆塗り碗・盆、焼塩壺、灯明皿、瓦質土器、瓦、古銭、青銅製引手が出土した。八戸市新井田古館遺跡では、竪穴遺構1基、井戸2基、土壙墓9基検出した。遺物は、唐津すり鉢、染付などが出土した。

五所川原市隠川（11）・隠川（12）遺跡からは、江戸時代の陶器（伊万里焼、産地不明の陶器）や銭貨（寛永通寶）、土製人形が出土した。

付表・平成9年度青森県内遺跡発掘調査一覧

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
1	野尻(1)遺跡	縄・平	29-060	浪岡町	青森県教委	9.4/30~9.10/29	道路建設
2	隠川(12)遺跡	縄・弥・古・平・近	05-072	五所川原市	青森県教委	9.4/30~9.10/29	道路建設
3	隠川(12)遺跡	縄・弥・古・平・近	05-072	五所川原市	青森県教委	9.5/6~9.6/13	道路建設・(試)
4	隠川(11)遺跡	縄・弥・平・近	05-071	五所川原市	青森県教委	9.4/30~9.10/29	道路建設
5	隠川(2)遺跡	平・近	05-062	五所川原市	青森県教委	9.5/6~9.6/13	道路建設・(試)
6	砂子遺跡	縄・平	65-226	南郷村	青森県教委	9.5/1~9.8/29	ダム建設
7	畑内遺跡	縄(前・中・後・晩)弥・平	65-002	南郷村	青森県教委	9.5/1~9.11/14	ダム建設
8	櫛引遺跡	縄(草創~晩)・奈・平	03-150	八戸市	青森県教委	9.5/1~9.10/30	道路建設
9	野木遺跡	縄・早	01-210	青森市	青森県教委	9.5/2~9.11/28	工場団地建設
10	安田(2)遺跡	縄文(中・後)・弥・平	01-016	青森市	青森県教委	9.7/30~9.10/31	道路建設
11	安田(2)遺跡	縄文(中・後)・弥・平	01-016	青森市	青森県教委	9.5/2~9.7/31	道路建設
12	上野尻遺跡	縄文(前)・平	01-281	青森市	青森県教委	9.5/2~9.10/31	公園造成
13	新町野遺跡	縄文(早・前・中・後)平	01-161	青森市	青森県教委	9.5/2~9.5/30	工場団地建設
14	山下遺跡	縄・平	01-277	青森市	青森県教委	9.5/2~9.10/31	公園造成・(試)
15	十腰内(1)遺跡	縄・弥	02-010	弘前市	青森県教委	9.7/1~9.9/19	公園造成
16	石倉下遺跡	縄(中・後・晩)	04-121	黒石市	青森県教委	9.11/17~9.11/21	道路建設・(試)
17	餅ノ沢遺跡	縄(中・後)	15-034	鮭ヶ沢町	青森県教委	9.6/26~9.10/6	道路建設
18	福山遺跡	平	37-008	鶴田町	青森県教委	9.9/1~9.10/22	農業関連・(試)
19	小奥戸(4)遺跡	縄・弥	52-026	大間町	青森県教委	9.9/1~9.10/31	電気・(試)
20	小奥戸(4)遺跡	縄・弥	52-026	大間町	青森県教委	9.9/1~9.10/31	電気
21	戸沢遺跡	縄	51-030	川内町	青森県教委	9.4/22~9.6/12	電気
22	長者久保(2)遺跡	旧	47-020	東北町	青森県教委	9.7/28~9.8/12	学術調査
23	折戸遺跡	平	39-005	小泊村	青森県教委	9.11/26~9.11/28	公園建設・(試)
24	下馬坂遺跡	縄(後・晩)・平	54-045	東通村	青森県教委	9.5/1~9.7/3	道路建設
25	五石橋遺跡	縄	66-029	倉石村	青森県教委	9.5/20~9.6/10	道路建設・(試)
26	新納屋(1)遺跡	縄(早)・(後)	50-107	六ヶ所村	青森県教委	9.5/1~9.6/25	道路建設
27	米山(2)遺跡	平	01-276	六ヶ所村	青森県教委	9.5/2~9.10/31	公園建設・(試)
28	米山(1)遺跡	縄文(中・晩)、平	01-275	六ヶ所村	青森県教委	9.5/2~9.10/31	公園建設・(試)
29	上野尻遺跡	縄文(前)、平	01-281	六ヶ所村	青森県教委	9.5/2~9.10/31	公園建設・(試)
30	牛ヶ沢(4)遺跡	縄(早・前・後)・弥	03-266	八戸市	八戸市教委	9.9/16~9.11/28	採掘場造成
31	法霊林遺跡	縄・奈	03-180	八戸市	八戸市教委	9.4/24~9.5/28	住宅建設
32	法霊林遺跡	縄・奈	03-180	八戸市	八戸市教委	9.4/22~9.5/28	住宅建設・(試)
33	法霊林遺跡	縄・奈	03-180	八戸市	八戸市教委	9.4/~9.8/	その他建物・(試)
34	法霊林遺跡	縄・奈	03-180	八戸市	八戸市教委	9.4/23	住宅建設・(試)
35	毛合清水(2)遺跡	縄(前)	03-121	八戸市	八戸市教委	9.5/23~9.6/19	その他建物
36	新井田古館遺跡	縄・奈・平・中・近	03-147	八戸市	八戸市教委	9.4/28~9.5/19	住宅建設
37	新井田古館遺跡	縄・奈・平・中・近	03-147	八戸市	八戸市教委	9.5/7~9.9/8	区画整理
38	新井田古館遺跡	縄・奈・平・中・近	03-147	八戸市	八戸市教委	9.4/25	区画整理・(試)
39	新井田古館遺跡	縄・奈・平・中・近	03-147	八戸市	八戸市教委	9.4/25	区画整理・(試)

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
40	狐平遺跡	縄(後)・平	03-251	八戸市	八戸市教委	9.7/24~9.8/7	住宅建設
41	一王子(1)遺跡	縄(前・中・後)	03-014	八戸市	八戸市教委	9.7/30~9.8/7	住宅建設
42	大仏遺跡	平・中	03-054	八戸市	八戸市教委	9.4/21	住宅建設・(試)
43	大仏遺跡	平・中	03-054	八戸市	八戸市教委	9.6/25~9.9/12	道路建設
44	館平遺跡	縄(早・後)・中・近	03-024	八戸市	八戸市教委	9.6/30~9.7/11	宅地造成
45	昼場遺跡	縄(前・中・後・晩)・弥	03-059	八戸市	八戸市教委	9.5/8~9.9/2	道路建設
46	見立山(2)遺跡	縄(早・前)・平	03-114	八戸市	八戸市教委	9.6/20~9.9/26	霊園拡張整備
47	西長根遺跡	縄(中)	03-036	八戸市	八戸市教委	9.11/18~9.12/17	道路建設
48	丹後平古墳	奈	03-254	八戸市	八戸市教委	9.5/8~9.12/5	道路建設
49	根岸山添遺跡	縄文(後)・平	03-203	八戸市	八戸市教委	9.8/7~9.8/28	道路建設
50	中館(八戸城跡)	中・近	03-181	八戸市	八戸市教委	9.10/6~9.11/11	公園建設
51	見立山(2)遺跡	縄(早・前)	03-114	八戸市	八戸市教委	9.6/20~9.9/26	霊園拡張整備
52	西長根遺跡	縄(中)	03-036	八戸市	八戸市教委	9.11/18~9.12/17	道路建設
53	蟹沢遺跡	縄(前)・近	03-019	八戸市	八戸市教委	9.10/29~9.11/12	その他開発・(試)
54	重地遺跡	縄(早)	03-033	八戸市	八戸市教委	9.10/14~9.10/27	宅地造成・(試)
55	一王子(1)遺跡	縄(前・中・後・晩)	03-014	八戸市	八戸市教委	9.10/28~9.11/25	遺跡建設
56	熊沢遺跡	縄(前・中・後)・平	01-055	青森市	青森市教委	9.6/4~9.11/21	道路建設
57	野木遺跡	縄・平	01-210	青森市	青森市教委	9.9/24~9.10/31	道路建設
58	三内丸山(6)遺跡	縄(中・後)・平	01-282	青森市	青森市教委	9.8/4~9.10/31	道路建設
59	小牧野遺跡	縄(後)	01-176	青森市	青森市教委	9.7/23~9.10/31	道路建設
60	野木遺跡	縄・平	01-210	青森市	青森市教委	9.5/12~9.10/31	工場団地建設
61	新町野遺跡	縄(早・前・中・後)・平	01-161	青森市	青森市教委	9.6/2~9.9/4	道路建設
62	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.6/19~9.7/25	宅地造成
63	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.8/1~9.12/31	宅地造成
64	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.5/19~9.6/15	宅地造成
65	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.4/14~9.6/15	宅地造成
66	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.6/30~9.9/26	学術調査
67	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.11/1~9.11/30	その他建物・(試)
68	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.8/1~9.9/30	学術調査
69	十三湊遺跡	中・近	38-022	市浦村	市浦村教委	9.8/18~9.9/5	下水道建設
70	福村城跡	平・中・近	02-044	弘前市	弘前市教委	9.10/8~9.11/7	住宅建設
71	小栗山館遺跡	平・中	02-107	弘前市	弘前市教委	9.7/10~9.9/12	道路・住宅建設
72	独狐遺跡	縄・平・中・近	02-212	弘前市	弘前市教委	9.5/19~9.7/18	農業関連
73	猫又(1)遺跡	平	07-024	三沢市	三沢市教委	9.9/16~9.10/27	資材置き場建設
74	天狗森(3)遺跡	縄・平	07-118	三沢市	三沢市教委	9.11/19~9.12/5	排水新設工事
75	小山田(2)遺跡	縄(平)・弥・平	07-117	三沢市	三沢市教委	9.7/7~9.9/4	道路建設
76	小山田(2)遺跡	縄(平)・弥・平	07-117	三沢市	三沢市教委	9.7/7~9.9/4	道路建設・(試)
77	垂柳遺跡	弥	32-002	田舎館村	田舎館村教委	9.10/6~9.11/28	学術調査
78	垂柳遺跡	弥	32-002	田舎館村	田舎館村教委	9.10/6~9.11/28	学術調査
79	前川遺跡	弥・平	32-003	田舎館村	田舎館村教委	9.10/6~9.11/28	住宅建設
80	立蛇(1)遺跡	奈・平	48-021	下田町	下田町教委	9.5/14~9.5/22	住宅建設

番号	遺跡名	時代	遺跡番号	市町村名	調査実施機関	発掘調査年月日	原因
81	向山(6)遺跡	縄(早・前)・平	48-030	下田町	下田町教委	9.4/21~9.9/6	キャンプ場建設
82	中野平遺跡	縄(早)・平	48-026	下田町	下田町教委	9.10/9~9.10/21	その他建物(試)
83	中野平遺跡	縄(早)・平	48-026	下田町	下田町教委	9.9/25~9.10/21	その他建物(試)
84	中野平遺跡	縄(早)・平	48-026	下田町	下田町教委	9.9/25~9.10/28	その他建物(試)
85	二枚橋(2)遺跡	縄(晩)	53-013	大畑町	大畑町教委	9.4/21~9.5/31	公園造成
86	二枚橋(2)遺跡	縄(晩)	53-013	大畑町	大畑町教委	9.8/11~9.11/28	陸上競技場建設
87	滝端遺跡	羽和(後・晩)	63-005	階上町	階上町教委	9.4/16~9.6/31	道路建設
88	山館前遺跡	縄(後)・弥(後)・平	63-073	階上町	階上町教委	9.8/18~9.9/5	公園建設(試)
89	引敷林遺跡	縄(早・中・後・晩)	63-015	階上町	階上町教委	9.8/11~9.8/13	学術調査
90	八重菊(1)遺跡	縄(晩)・平	19-004	森田村	森田村教委	9.5/20~9.6/30	道路建設・(試)
91	八重菊(1)遺跡	縄(晩)・平	19-004	森田村	森田村教委	9.10/22~9.12/31	農業関連・(試)
92	石神遺跡	縄(前・中・後・晩)	19-002	森田村	森田村教委	9.7/1~9.9/30	遺跡整備
93	広ヶ平(4)遺跡	平	19-039	森田村	森田村教委	9.9/6~9.9/7	道路建設・(試)
94	若緑遺跡	平	19-040	森田村	森田村教委	9.9/6~9.9/7	道路建設・(試)
95	貝ノ口遺跡	奈・平・中	41-065	七戸町	七戸町教委	9.5/22~9.8/22	道路建設・(試)
96	貝ノ口遺跡	奈・平・中	41-065	七戸町	七戸町教委	9.5/22~9.8/19	住宅建設
97	七戸城跡北館	古・中	41-001	七戸町	七戸町教委	9.9/29~9.12/2	史跡の環境整備
98	七戸城跡宝泉館	縄・古・中	41-001	七戸町	七戸町教委	9.9/29~9.10/31	崩壊防止工事
99	倉越(2)遺跡	平・古	41-064	七戸町	七戸町教委	9.9/2~9.9/26	道路建設
100	藤崎城跡	中・近	26-003	藤崎町	藤崎町教委	9.6/2~9.8/15	道路建設
101	藤崎城跡	中・近	26-003	藤崎町	藤崎町教委	9.10/1~9.11/6	その他建物
102	藤崎城跡	中・近	26-003	藤崎町	藤崎町教委	9.7/30~9.8/8	その他建物・(試)
103	大光寺新城跡	平・中	30-104	平賀町	平賀町教委	9.4/15~9.7/31	その他建物・(試)
104	大光寺新城跡	平・中	30-104	平賀町	平賀町教委	9.8/19~9.10/31	その他開発
105	大光寺新城跡	平・中	30-104	平賀町	平賀町教委	9.11/1~9.12/10	土砂採取
106	犬走(2)遺跡	平		五所川原市	五所川原市教委	9.6/14~9.10/30	土砂採取
107	長坂(1)遺跡	縄(後)	04-015	黒石市	黒石市教委	9.6/2~9.10/31	農業関連
108	寺上遺跡	縄(前)	06-030	十和田市	十和田市教委	9.6/16~9.8/8	道路建設
109	中里城跡	縄・平・中	36-002	中里町	中里町教委	9.4/1~9.5/30	公園造成
110	日和見山遺跡	縄(後・晩)	17-002	深浦町	深浦町教委	9.5/12~9.11/17	公園造成
111	種里城跡	平・中	15-024	鱒ヶ沢町	鱒ヶ沢町教委	9.6/9~9.9/30	遺跡整備
112	広岡溜池遺跡	縄・平	16-008	木造町	木造町教委	9.10/23~9.11/14	遺跡整備
113	李平遺跡	縄(後)	28-003	尾上町	尾上町教委	9.6/21~9.6/22	住宅建設・(試)
114	川代製鉄遺跡	近	51-024	川内町	川内町教委	9.8/22~9.8/30	学術調査
115	中里(2)遺跡	縄(中・晩)	43-021	十和田湖町	十和田湖町教委	9.9/8~9.10/31	学術調査
116	聖寿寺館跡	中	62-018	南部町	南部町教委	9.6/9~9.9/30	農業関連
117	大谷地東沢(3)遺跡	縄(後)	40-084	野辺地町	野辺地町教委	9.9/16~9.11/21	道路建設
118	四戸橋遺跡	縄	33-018	碓ヶ関村	碓ヶ関教委	9.4/1~9.8/31	送電線鉄塔建設
119	二ツ森貝塚	縄(中)	49-021	天間林村	天間林村教委	9.5/6~9.5/31	送電線鉄塔建設
120	牛潟(1)遺跡	縄(中・後)	22-004	車力村	車力村教委	9.6/5~9.7/15	学術調査
121	館町遺跡	縄(後)	66-001	倉石村	倉石村教委	9.5/20~9.6/10	農業関連

研究紀要第3号

1998年3月28日 印刷

1998年3月31日 発行

編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森市新城字天田内152-15

電話 0177-88-5701

F A X 0177-88-5702

印 刷 長尾印刷株式会社

〒030-0931 青森市平新田字森越17-1

電話 0177-26-7121

BULLETIN
OF
AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER

No.3

CONTENTS

- | | |
|---|---------------------------------------|
| A Pottery of the latter half of the Middle Jōmon period
in North Tohoku Districts | SUZUKI, Katsuhiko |
| A Table: The houses in Initial Jōmon Period of Aomori
Prefecture | NAKAMURA, Tetsuya
SAKAMOTO, Mayumi |
| The Clay Figurines <i>Kinoko</i> made of earth of the Jōmon
period | KUDOU, Sin-ichi
SUZUKI, Katsuhiko |
| The HATAKE (till the field) detected in Aomori Prefec-
ture | KIMURA, Tetsujirō |
| The Trend of Excavation Investigation in Aomori Prefec-
ture with the 9th year of Heisei (1997A. D.) | |
-

March 1998

AOMORI PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL
ARTIFACTS RESEARCH CENTER